

序章 少女

うらかな午後は、けたたましく打ち鳴らされた鐘の音によって終わりを告げた。

村の鐘がこれだけ繰り返し鳴らされるのは、よほどの事態が起こった時だけである。

ようやく言葉を覚え始めたばかりの幼い少女は、自宅でお昼寝の真っ最中だった。安眠が鐘の音によって妨げられたので、彼女は大きな声で泣き出してしまった。彼女は鐘の音に負けないほどの大声で泣いた。

彼女は家の誰かが自分を抱っこして気持ちを落ち着かせてくれることを期待したが、その日はいつものようにはいかなかった。どういうわけか、大人たちも彼女と同じくらい不安を感じているようだった。家の中でも外でも様々な声が飛び交っている。

少女はいつの間にか泣き止んでいた。泣いていても、事態は何も解決しないだろうと本能的に感じ取ったのかもしれない。

彼女は起きあがって、窓の外に目をやった。戦いに用いられる本物の武器を目にしたのは、その時が初めてだった。普段は農耕器具を手に行っている村の男たちが、刀剣を握って何人も駆け抜けてゆく。ただならぬ空気を感じ、少女は青ざめた。幼いながらも、いかに危険が差し迫っているのかを彼女も感じ取っていた。

慌しさは、次第にその度合いを増していった。人の往来は激しくなり、負傷者や、ぐったりしている人を二人がかりで運んでいる人たちの姿も見受けられた。

「お願いだ、誰か手を貸してくれ！」誰かが叫んだ。

少女は声が出た方向を見て絶句した。斜め向かいの家の壁が燃えていたのである。炎そのものは小さかったが、消火作業は難航しているようだった。

少女は、火事の様子をしっかりと見ようと窓から身を乗り出して見て驚いた。村のあちらこちらから黒煙が上がっていたのである。

「私、手伝ってくる」家の中で聞き覚えのある女の声が聞こえたので、少女は視線を室内へと戻した。外が明るかったせいか、室内の光景は暗く緑みがかって見え、声の主の姿は人影にしか見えなかった。

「ダメよ、外は危険すぎるわ」もう一人の女が金切り声で言った。

「でも、このままじゃあ延焼して村じゅうが火事になってしまうわよ」ドアが開け放たれる音がして、誰かが飛び出して行くのが見えた。

「あ、待って。置いていかないで！」慌てて、もう一人もあとを追う。

開け放たれた扉から昼の光が室内に差し込んでいた。外では怒号と悲鳴が飛び交っていたが、二人の女性がいなくなった室内は、妙な静けさに包まれていた。

ベッドの上に座っていた少女は、眉をひそめた。

「……アルウィン？ ベネット？」やっと覚えたばかりのつたない言葉で呼びかけてみたが、返事は無かった。

彼女はベッドから降りると、とぼとぼと炊事場のほうへと向かった。

「……アルウィン！ ベネット！」もう一度呼びかけてみるが、返事は無い。

どうやら、家の中には自分しかいないようだった。少女は泣きべそをかいて、しばらくその場で立ち尽くしていたが、誰も家に戻ってくる気配は無かった。

心細さを感じながら、彼女は扉のほうを振り返った。家から出て、知っている人を探し

にいこうかとも考えた。

だが、それはできなかった。なぜか、そうしてはいけない気がしていた。少女は唇をぐつと結ぶと、ベッドのほうへ向かって歩き出した。

彼女は再びベッドへと戻って横になると、毛布にくるまって強くまぶたを閉じた。眠ることなんてできなかったが、ほかにはどうすることもできなかった。悪い夢ならば、早く覚めてほしいと思った。

……どれぐらいそうしていただろうか。とても長い時間のようにもあり、とても短い時間のようにもあった。入り口の扉がきしむ音がしたかと思うと、足音がこちらのほうへと近づいてきた。誰かが家の中に入ってきたようだった。

少女は毛布を掴んでいる手にぐつと力を入れた。怖い。

足音はベッドの前で止まった。少女の心臓は肋骨を突き破って飛び出してしまいそうなほど、激しく脈動していた。

次の瞬間には、大きな手で毛布が引き剥がされた。幼児の力では抵抗のしようがなかった。少女は手足をバタつかせて、最後の反撃を試みた。

「――セシエ」

聞きなれた男の声が、少女の名を呼んだ。少女は抵抗をやめ、固く閉ざしたまぶたをゆつくりと開いた。

「パパ？」少女の声を聞き、男の険しい顔に若干の安堵の色が浮かぶ。

「無事だったんだね。良かった」彼は片手で少女を抱き上げながら言った。「まったく、アルウィンとベネットはどこへ行ってしまったんだ」

少女の目は、父のこめかみあたりに釘付けになった。そこには切り傷があつて、血が流れて乾いた跡が残っていた。

「パパ？」少女は父親のこめかみを心配そうに指差す。

「ああこれか、気にするほどのものじゃない」男は首を横に振った。

彼には、自分の怪我を心配している余裕はなかった。急いで少女を抱えあげると、彼はそのまま炊事場へと向かった。そして保存食備蓄用の小型地下倉庫の蓋を開け、その中身を手当たりしだいに放り出したのだった。ソーセイジや乾燥豆が床で山を作ったが、それでも小型の地下倉庫には大人ひとりが入れるほどのスペースさえ無かった。

彼は倉庫の中にできた小さな空間に毛布を敷き、そこに娘を座らせた。

「いいかい？ ちょっと狭いけど、この中でしばらく待っていてほしいんだ。蓋をするから暗くなっちゃうけど、時間が経ったら父さんが必ずセシエを呼びに戻ってくるよ。それまで大人しく待っていてられるね？」

父のその言葉を聞いて、少女は泣きそうな顔で首をぶるぶると振って父親のほうに両手を伸ばした。

彼は目をつむって、静かに首を横に振った。

「駄目だ」そう言うってから、彼は少しやさしい顔になった。「……いいかい、これは新しいゲームなんだ。セシエがどれだけ長い間、暗いところに隠れていられるか度胸を試す遊びさ。もしお父さんが呼びに来るまで辛抱できなかったら、その時は自分で蓋を開けて逃げ出したっていい。でも、もしも怖くても辛抱してお父さんが戻ってくるまでじっと待つことができたなら、セシエに美味しいおやつのご褒美をあげよう。砂糖のたっぷり付いた焼

き菓子と、すり潰した野苺を入れたヤギのミルクだ」

おやつという言葉聞いて、少女の目は輝いた。おやつ自体、めったにありつけることが無いのに、父親がくれると言った二つは、とても豪華な部類に入るおやつだった。その二つを同時に味わえる機会なんて、めったに無い。

「おやちゅ！」少女は興奮気味に叫んだ。

「ああ、おやつだ」男は片方の眉をあげて見せた。

少女はキヤツキヤツと喜びの声を発してうなずいた。

「やる！」

その返事を聞いて、男は満面の笑みを浮かべた。

「そうかそうか。ご褒美が欲しかったら絶対に途中で出てきたりしちゃ駄目だよ、わかったね？」彼はウインクをした。

少女は元氣よくうなずく。そのしぐさに、父親も同じようにうなずいて見せた。

「……じゃあ、そろそろ閉めるよ」

父の手が、地下倉庫の取っ手を掴む。

「あ、そうだ」

彼は思い出したように、取っ手にかけた手を離して自分の首飾りを首から外すと、それを少女の首にかけた。

それは革を編んだ紐の先に、見栄えのしない白っぽい小石が一粒ついただけの簡素な首飾りだった。

「幸運のお守りだよ。セシエがこのゲームに勝てますように、ってね」

彼は微笑んだ。首飾りを貰えた喜びもあって、少女は満面の笑みを父親に返した。

「……閉めるよ」

男はそう言ってゆっくりと地下倉庫の蓋を閉ざした。男は最後まで少女の顔を名残惜しそうに見つめていた。

閉ざされた倉庫の中は少女が想像していたよりも真っ暗だった。少女はその真っ暗闇に恐怖を感じ始めていたが、目が慣れてくるにつれて何かが仄かな輝きを発しているのに気づいた。さっき父親に貰った首飾りの小石である。

「わあ！」

声が地下倉庫の中で反響してくぐもった変な声に聞こえたことにも驚いたが、少女の関心はもっぱら光る小石のほうに向けられていた。少女は仄かな緑黄色の光にうっとりとして見惚れていた。輝きはとても弱く、暗闇に目が慣れていないと気付きもしないような微々たる光だったが、少女は不思議な輝きに好奇のまなざしを向けていた。

蓋が閉められてからも、しばらくは何やら引きずる音や、カチャカチャという金属音、父親の足音などが聞こえていた。そういう音が姿の見えない父の存在を暗に示していたので、暗闇の中でも少女は恐怖を感じなかった。もちろん、小石への感動が恐怖心を追いやってくれたことも大きい。

だが、やがて静かになって何も物音が聞こえなくなると、さすがにそういうわけにはいかなかった。しばらくそのことには気付かなかったが、小石を眺めることに飽きてくると少女は突然心細くなった。

「パ。パ。？」

不安げに小声でそう呼びかけてみたが、返事はなかった。密室の地下倉庫内ではその呼びかけの声さえも反響で不気味に聞こえた。

少女は泣き叫びたくなかったが、父親との約束があるから我慢した。もしここであきらめてしまったら、おやつにはありつけなくなってしまうのだ。

彼女は窮屈なスペースで、もそもそと何度も体勢を変えながら、まだかまだかと父親が戻ってくるのを待った。

視覚情報がないと、時間の感覚はまるで無かった。

……どのくらいの時間、彼女はそこにいたのだろうか。

少女はいつの間にかそこで眠ってしまったようだった。どれくらい時間が経過したのか想像もできなかった。目を覚まして周囲を見渡しても、小石の光以外はほとんど何も見えなかった。

地下特有の湿気を帯びた臭いと、倉庫の備蓄食料の臭いが入り混じって、特有の臭いを発していた。不快感のある臭いである。

彼女は少し息苦しさを感じ始めていた。もちろん臭いの影響は大きい。だが、酸素が薄くなってきたのも事実だった。地下倉庫は換気の良い場所ではない。

もはや、少女は我慢の限界だった。

彼女はおやつをあきらめて、地下倉庫の蓋を押し開けようとした。……ところが、なぜか蓋は持ち上がらなかった。ほんの少しだけ浮き上がるような感じはあったが、外の明かりが見えるほどの幅すら開きはしなかった。

少女は自分が完全に地下倉庫に閉じ込められているということに気がついた。ギブアップするも何も、はじめから出ることができないようにされていたのだ。少女は悲しくて怖くて、大声で泣き出してしまった。父親が自分を閉じ込めてどこかへ行ってしまったのだから、裏切られたような気分だった。

彼女は大声で喚いて、蓋を拳で何度も殴りつけた。手から血がにじむほど激しくである。息苦しくて暗いこの場所から、何としても逃げ出したかった。

しばらくそうしていると、その声と音を聞きつけたのか、頭上で何人かの足音が聞こえはじめた。人の気配を感じた少女は死に物狂いで泣き叫び、手の痛みもお構いなしに蓋を叩いて助けを求めた。

頭の上で物を動かすような慌しい物音がしばらく続いたかと思うと、少女の顔につめたい新鮮な空気がやさしく吹きつけた。蓋の隙間から、わずかな明かりも届いた。

外側から地下倉庫の蓋が持ち上げられると、外の光が少女の顔に照りつけた。一瞬だけ人影らしきものが見えたが、暗闇にずっといた少女にとって朝の光は眩しすぎた。彼女は目をつむった。

「ガイズル侯爵閣下、こちらに来てください！」蓋を開けてくれた人物が、大きな声を出した。

「どうした、オルソン隊長！」

目をつむっていてよくわからなかったが、もう一人がこちらに駆けつけてきたようだった。硬い靴底の音がした。

「見てください、子どもです」

「なんと、あの状況で助かったとは……、とても運の強い子だな」そう言うと、ガイズル

侯爵と呼ばれた男性は優しく少女を抱え上げた。お父さんの手の中にいるような心地だった。少女は何とか眩しいのをこらえて、目をこじ開けてみた。

黒い髭を蓄えた精悍な人物が、自分を抱え上げていた。朝の光に照らされて、神々しく見える。だが、その目には優しい光が湛えられていた。

「お嬢ちゃん、名前は？」低い落ち着きのある声だ。

その男性は、少女の知らない人だった。しかしその声にはどこか不思議な安心感があったので、少女はおずおずとしながらも答えた。

「……セシエ」

それを聞いて、隣にいたオルソン隊長の顔が強張る。侯爵は一瞬彼のほうに顔を向けたが、すぐまたセシエのほうに視線を戻し、目を綻ばせた優しい微笑みを見せる。

「そうか、セシエか。いい名前だ。私はガイゼル・アルディエルド。ヨレンディンという土地の侯爵をしている」

彼の微笑みには全く敵意が無く、セシエも頬の緊張を解いた。

「こんにちは」

セシエが礼儀正しく挨拶をしたことに、彼は少し驚いたようだった。

「お会いできて光栄です。レディ・セシエ」そう言い終えると、ガイゼルは横にいる人物に目をやる。「オルソン隊長、お前も抱いてみるか？」

「閣下ッ！」侯爵の言葉に、小柄な初老の男性は少し慌てたようだった。ひとこと閣下と呼びかけただけの短いフレーズだったが、少女は思わずその迫力にビクリとしてしまった。

「おー、よしよし。怖がらなくていいよ」

ガイゼル侯爵は彼女の怯えを察して、優しく抱きしめてくれた。彼の体は身に付けた武器のせいで少しゴツゴツとしていたが、彼の体温は少女を深い安心感で包んだ。

少女がガイゼル侯爵の肩越しに見た光景は、幼い彼女にはあまりよく理解ができないものだった。辺り一帯が焼け野原となっており、炭化した黒い物体が大小たくさん地面に転がっていたのである。

彼女の家もはや面影すらなく、頭上には空が広がっていた。周囲に健全な状態で残っている建物は見当たらず、ほとんどの家々は何本かの柱を残すだけとなっていた。

ガイゼル伯爵に抱かれた少女は首をかしげた。辺りで動き回っている人々は、村の人たちではなかった。みんな、知らない人ばかりだ。

でも、もう誰も慌てふためいたりしていなかった。彼らの表情には、笑顔さえも見て取れる。今まで少女は忘れていたが、鐘の音ももう聞こえなくなっていた。聞こえるのは知らない人たちのん気な話し声ばかりだった。

まだ十分な知識の無い幼い少女にでも、大混乱が終わりを告げたのだということだけは理解ができた。身の危険が無くなったのを知ると、緊張でこわばっていた少女の肩の力がスーッと抜けた。彼女は自分の頭をガイゼルの首元にもたせかけ、そのままスースーと安らいだ寝息を立てはじめた。

窓にはめられた木戸を押し開けると、ベッドと机しかない狭い自室に朝の爽やかな光が飛び込んできた。

目が覚めたばかりの彼女は、眠気を追い払うために大きな深呼吸をする。朝の冷たい空気を肺一杯にためると、気分爽快だった。

彼女は窓枠にもたれかかり、空を見上げた。眩しさに目を細め、朝もやの中を二羽で飛び去っていく森の小鳥を見つめながら、物思いにふける。彼女は辛く長かった二十年間を思い返していた。

(そっか、もうあれから二十年になるんだ……)

二十年前、貯蔵庫から助け出されたあの日、セシエは戦災によって村、家、家族、すべてのを失ってしまったのだった。

戦災で焼かれた村でセシエを見つけ、自立して生きていけるよう取り成してくれたのはガイゼル・アルディエルドだった。そんな彼も今やヨレンデインの侯爵ではなく、リルニア平原のほぼ全域を統べる国王となっていた。

……彼女の村を焼いた忌まわしい戦争は、いまなお続けられていた。その戦争はランドール人と、レグドル教国という異民族の国とのあいだで繰り広げられている、とても長い戦争だった。

すべては、レグドル教国軍がランドール人たちの住む地域に突如侵攻を開始したことに端を発する。ランドール人を力で征服しようとするレグドル教国軍と、レグドル教国軍の魔手から自分たちの土地と独立を守り抜こうとするランドール人との戦いは、セシエが生まれるよりもずっと以前に始まった。

ランドール人の土地の東南部にあるリルニア平原は、開戦当初からレグドル教国軍の攻撃の標的となった。当時の平原にあった三つの王国は、魔獣をも戦力として用いるレグドル教国の圧倒的な強さによってなすすべもなく打ち滅ぼされてしまった。

古くからリルニア平原の片田舎ヨレンデインを領地として守ってきたアルディエルド一族は、三王国が減んだあともレグドル教国の支配を受け入れず、粘り強く抗戦を続けた。平原には他にもそういった領主たちがいくらか残っていた。

国王を頂かない彼らとレグドル教国軍は、一進一退の攻防を繰り返していた。壮絶な戦いの中で多くの人命が失われ、いくつもの街や村が地図上から消えゆくこととなった。戦いは何年も続いた。歳月を重ねるごとに抵抗を続ける領主たちの数も減り、やがて平原全域のランドール人たちの間には、陰鬱な空気が流れ始めていた。

そんな折、父からヨレンデインの君主の座を受け継いだガイゼルが、驚くべき手腕で奇跡とも思えるような連戦連勝を繰り返した。当時のレグドル教国軍は戦線を広げすぎていて、十分な補給を全部隊に行なえないような状態だったから、ゲリラ的な戦術で戦いを挑んだ彼の作戦が功を奏したのである。彼はヨレンデインを守るだけでは満足せず、レグドル教国の占領下に置かれていたリルニア平原各地を解放してまわったのである。

ガイゼルの勢いに乗じる形で、厭戦ムードだった各地のランドール人たちも一斉に蜂起した。その結果リルニア平原でのミリタリーバランスは一変、レグドル教国軍は平原での足場を失って、平原からの撤退を余儀なくされた。

まさに劇的な勝利だった。誰の目にもガイゼルの功績は明らかだった。彼はリルニア平原各地の貴族から推挙され、平原一帯を統べる『国王』の称号を得た。

レグドル教国とランドール人の戦争はもちろん今も終わることなく続けられている。ただリルニア平原一帯に焦点を当てれば、ガイゼル・アルディエルドの奇跡の逆転勝利以後、この地域はレグドル教国軍の大規模な攻撃にはさらされてはいない。平原は今、彼の活躍のおかげでひとときの平和を享受しているのである。

リルニア平原の王国、ガイゼル・アルディエルド王が統べる王国に今、セシエはいた。彼女は戦災に見舞われた村で奇跡的にガイゼルに助け出されたあと、しばらくはガイゼルのそばで暮らしていた。その間、ガイゼルは彼女の引き取り手を捜してくれたようだったが、快く引き受けてくれるような者は一人も現れなかった。修道院に孤児が溢れかえるような時代だったから、当然といえば当然のことである。

数ヶ月経って結局、彼女は『陰の影』と呼ばれる特殊技能者を養成する施設に預けられることとなった。この施設はガイゼル自身が出資している施設だったから、彼も安心して任せることができたのだろう。セシエはそこで、二十年の歳月を過ごした。

『陰の影』というのは、ガイゼルの先代が育成制度を確立した、有事に活動する特殊技能者である。護衛や諜報活動・暗殺を専門的に行なう特別な存在で、情報筋では有名だった。『陰の影』の暗躍があったからこそ、リルニア平原奪還という偉業をガイゼルが成し遂げたのだという説も囁かれていた。

そんな『陰の影』の養成施設に、セシエは二十年間も籍を置いていた。この施設に入所する子はいが捨て子か戦災孤児である。子どもは即座に労働力として使えないため、一般の組合などでは受け入れを敬遠されてしまう傾向がある。しかし物事を吸収するのに最も適した年頃である彼ら彼女らは、『陰の影』の養成施設にとっては願っても無い原石だった。すぐに使い物になるわけではないが、将来を見越して育成すれば、成熟した大人を仕込んで『陰の影』に仕立てるよりも何倍も簡単に、しかも何十倍も有能な『陰の影』に成長してくれる可能性がある。

「本当に長い二十年だったわ」空をぼんやりと眺めながら、セシエが呟く。

『陰の影』の養成施設で全ての課程を修得させてもらえるのはごく少数の成績の良い者たちだけだった。何かの能力に欠点のある者は早々に課程を切り上げられ、特性に見合った仕事が割り振られることとなる。全課程を習得した優秀な『陰の影』は彼らとは別扱いされ、国王から発せられた勅命にのみ従って行動する国王直属の『陰の影』となる。

セシエにとって、『陰の影』の養成施設での二十年は過酷そのものだった。入った当時は顔見知りもいなかったし、施設にいるあいだは一度もガイゼルに会うことが許されなかった。彼女はずっと孤独だった。そして訓練自体も想像を絶するような厳しいもので、弱音を吐こうものならきつい体罰が待ち受けていた。

それでも、彼女はその環境に懸命に耐えた。ガイゼル直属の『陰の影』となって彼のために働き、自分の命を救ってくれた彼の恩に報いるのが彼女の唯一の夢だった。セシエは二十年間その思いだけを胸に抱いて、地獄にいるのではないかと錯覚してしまうような苦しい訓練に耐えてきたのだ。そして彼女は先日ようやく、『陰の影』としての全ての課程を終えたのだった。そう、彼女はきわめて優秀だった。

養成施設で課程を終えたセシエのもとに数日前、国王陛下からの召喚状が届いた。セシ

エの念願だったガイゼル国王のもとで働くという夢が、ようやく叶うのである。二十年間待ちわびたガイゼルとの再会の日が、今日やつと現実のものとなる。

「……ガイゼル様に会える」

セシエは物思いから我に返って、もう一度大きな深呼吸をした。この寄宿舎は森の中にあって、空気がとても良かった。他にも『陰の影』関連施設が各地に点在しているが、彼女が知る中ではここの朝の空気が一番おいしい。特に、今日のように心が弾んでいる日は格別だった。

朝の空気を満喫したセシエは、着替えと食事を手早く済ませるとすぐさま馬を飛ばしてガイゼル王のいるリルンブルグへと向かった。

リルンブルグはリルニア平原で一番大きな街である。リルニア王国が誕生して、ガイゼル王がこの都市を首都として宣言すると、その賑わいはより一層大きなものとなった。今では街の市壁の外側にまで商店や宿が立ち並んでいる。

市門には、すでに商人や農夫たちの行列ができていた。皆、市内への通行許可待ちである。セシエは王の召喚状があったおかげで、順番待ちの必要なくそこを通り抜けることができた。

市門を抜けると、丘の上に建てられたリルンブルグ城が否応無く視界に飛び込んでくる。近いように見えるのだが、大きさが大きさだけに意外に距離は遠い。

大通りを行くセシエは、馬をゆったりと歩かせていた。本当はもつと急がせたいのだが、街なかで馬を走らせるのは緊急の用でない限りは敬遠すべきだった。人をはねてしまう危険性があるし、馬の蹄は街の硬い石畳の上で走るのには適していない。

セシエはやる気持ちを抑え、馬に並足を守らせて城門を目指した。

城が近づくにつれ、彼女の鼓動は少しずつ早まっていくかのようだった。命の恩人に二十年ぶりに再会するのだから、無理もなかった。

セシエは片手を手綱から離し、色素のほとんど無い銀色の長髪を掻きあげた。

(陛下は今の私を見て、あのセシエだとお気づきになるかしら?)

ガイゼルが知っている二十年前のセシエは、お尻のあたりまである長い髪は持っていないかったし、まだほんの赤ん坊だった。

(ひよっとしたら、ひと目ではわかってもらえないかもしれないな)

セシエは首を振った。

(ううん、ガイゼル様に限ってそんなことない)

ガイゼルのことを考えるだけで、セシエの胸は締めつけられた。会いたくて会いたくて仕方がなかった。

その望みが叶うときに、馬の歩みとともに一步一步近づいてきている。セシエは期待に胸を膨らませていた。

面会するときどう話しかけようか、何を話そうかなどと考えていると、あつという間に街を抜けて、盛り土の丘の前に到着していた。丘の上には、市壁よりも遥かに高く重厚なリルンブルグ城の城壁が威容を誇っている。

セシエ以外にも、丘を登っていく請願者らしき人々や兵士たちの姿があった。丘を登ったところにあるゲートハウスでは、市門よりも厳重なチェックが待ち受けていた。持ち物はもちろん、ボディチェックもあった。薬物や魔法の品、武器などは特別な許可が無い限

り携行が認められない。

必要以上に入念にセシエの体を調べるいやらしい手つきの門衛を、セシエは最後まで冷ややかな目つきで見つめていた。セシエは正式に国王直属の『陰の影』となればこのボディチェックを回避できるが、他の請願者たちはそうはいかない。このボディチェックを受けるのが嫌で、請願をあきらめる女性もきつといるはずだった。セシエは門衛には女性兵士も加えておくべきだと感じた。女性のボディチェックは女性兵士に任せればいい。

(機会があれば、ガイゼル様に進言してみてもいいかな)

ゲートハウスを通過したところで小姓に自分の馬を預けると、セシエは国王の執務室がある館へと向かった。広い外庭では、兵士たちが隊列を組んで朝の訓練に励んでいる。

兵士たちを指導している、小柄で頑強そうな白髪の指導教官に見覚えがある気がしたが、セシエは首をかしげただけでその横を通り過ぎた。

館に到着したあとは、セシエも他の請願者と同じように順番待ちをする必要があった。まだ国王直属の『陰の影』としての承認を得ていなかったから、仕方の無いことだった。

初めのほうにいた数人は比較的すぐに終わった。最も時間がかかったのは、セシエのすぐ前で順番待ちをしていた男女だった。思いのほか長時間、執務室で問答が繰り返げられていた。

その会話は待合室にもかすかに聞こえていて、何かの職人組合の労働者の待遇改善とか税負担の軽減要求とかそういう話だったが、セシエはよく聞いてはいなかった。順番待ちの間もずっとそわそわしていて、落ち着かなかったからだ。

結局、セシエの順番がやってきたのはお昼ごろだった。

係の人間に呼ばれて執務室に入ると、そこにはがらんとした空間が広がっていた。会議用と思われる長い机が壁面に寄せられているから余計にそう見えるらしい。入り口のすぐそばに請願者が腰掛けるための木の椅子が五つほど置かれていて、広い空間を挟んで向かい側、歩幅にして十歩少々という距離のところは事務用の机が三つ並んでいた。机はどれも丈夫そうで、特に飾り気があるわけではなかった。左右の事務机には見知らぬ書記官が座っていたが、中央にいる人物をセシエは見まごうことがなかった。ガイゼル王だ。セシエは彼の姿を目にしただけで、急に胸が締め付けられるような感覚を覚えた。

ガイゼル王は机に広げられたいくつもの書類に目を通していった。事務机の後ろにある採光窓からの光で逆光となってハッキリとは表情が読み取れないが、その鋭い目つき、彫りが深く頬骨のしっかりとした顔立ち、口元に蓄えたひげもあの頃と同じだった。頭髪やひげに混じる白いものと、目じりや眉間に刻まれた深いしわが二十年という時間の経過を感じさせたが、あの頃の気力を未だ失ってはいないように見受けられた。

セシエは請願者用の椅子に腰を降ろすのではなく、床に片膝をついて頭を垂れた。最敬礼の姿勢である。

「お久しぶりでございます、国王陛下」

彼女がそう呼びかけてから、しばらく間があった。それから、あの懐かしい低く落ち着いた声が聞こえた。

「……表をあげよ、訓練を終えし者」

言われるままに、セシエは顔を上げた。どのような表情を作っているものかわからなかったが、彼女は軽く口角をあげてみせた。

……二十年ぶりに、セシエとガイゼルの視線が交差した。

ガイゼルはわずかに目を細め、しばらくまじまじとセシエの顔を見つめていた。セシエは自分の心が喜びに震えているような気がしていたが、努めて平静を装った。

「……陛下？」ガイゼルの隣にいた書記官が、彼に呼びかける。その呼びかけにあいまいな返事を返してから、彼は少しだけ姿勢を正した。

「汝に問う——」彼は咳払いをしたあとに、国王の威厳を湛えた声でセシエに向かって呼びかけた。「——汝が従うべきものは何か？」

セシエは自信に満ちた声で彼の問いに答える。「国王陛下のご命令のみにごさいます」

これは、国王直属の『陰の影』を承認する際のおきまりのやり取りである。セシエの答えを聞いたガイゼルは頷くと、近くに侍していた文官を呼び、何か小さなものを手渡した。文官はそれを受け取ると仰々しくセシエの前まで運び、彼女の前にそれを差し出したのだった。

それは、親指と人差し指とをひつつけた時に、その中にできる円くらいの大きさのメダルだった。そのメダルには重厚な金の輝きがあり、獅子と女性の図像が精巧で力強いタッチで浮き彫りにされていた。獅子の目には真つ赤なルビーが埋め込まれており、メダルの形状を縁取る外周には技巧的な月桂冠模様が配されていた。それ以外の何も描かれぬ余白部分は金属が抜かれていて、そのまま下に文官の手のひらがのぞいている。このメダル一つに、いったいどれほどの時間と労力が注がれているのかと思わせるようなシロモノである。

実物を目にしたのはこれをはじめでだった。これは、国王直属の『陰の影』だけが携行を許される特別なメダルである。

「汝を我が『陰の影』と認め、そのほうにこれをつかわす。受け取るが良い」

ガイゼルは極めて事務的な口調でそう言った。

「有難き幸せにごさいます」セシエはメダルを受け取ると、再び頭を下げる。

国王は手元の資料をいくつか集め、その書類に目をやる。

「早速だが、そのほうに従事してほしい任務があるのだ」

「はい」そう返事をしながらも、セシエは少し眉をひそめた。儀礼的なやり取りが終わって、少しは懐古的な話題が出るだろうと期待していたからである。

「……わが国が抱えているワレンハイトとの問題については知っているな？」

ガイゼルの視線はもう手元の書類の上から動きそうに無かった。目の前にいるセシエという人間に対しては、もう微塵も興味を持っていない様子である。彼は二十年前のことなど覚えていないのだろうか？

セシエは何か苦いものが喉にこみ上げてきそうな感覚を覚えたが、ガイゼル国王に抱いていた様々な思いをとりあえず心の中に押し込め、自分の頭の中にあるワレンハイトについての知識を掘り起こした。

*

*

*

ワレンハイトというのはデルロイ伯爵という人物が領有する、いまだリルニア王国の傘下に入ろうとしない平原北部の地名である。彼は大勢の貴族たちがガイゼルを国王として

持ち上げた際、断固として反対した人間の一人だった。

リルニア王国では、デルロイ伯爵を三王国時代とほぼ同じ地位・待遇で迎え入れることと、その領地ワレンハイトの引き続いての領有を保証していたが、彼は今でもその呼びかけには応じず、孤立したまま自分の領地に閉じこもっている。

彼がリルニア王国の条件を呑まない理由は少々複雑である。

これは三王国時代から続いている問題だった。彼が仕えていた王国とガイゼルが仕えていた王国とで、国境線の主張が異なっており、ちょうどその微妙な地域にワレンハイトが存在していたのだ。三王国が滅亡した今でもその問題が解決しないのは、そこに別の要因が絡んできたからである。

それは、ガイゼル軍がリルニア平原奪還のためにレグドル教国軍と戦っていた最中に生じたトラブルだった。例の領土境界線の問題がある地域に、ガイゼルはレグドル教国と深いつながりを持った拠点を発見したのである。問題を抱えた地域だったからこそ、レグドル教国につけ入れられたのだろう。

ガイゼルは発見と同時にその拠点への奇襲攻撃を計画した。例のグレーゾーンであることから、彼は念のため事前にデルロイ伯爵への伝令を発したのだが、奇襲を成功させるためには伯爵の反応を待っているだけの時間的余裕は無かった。ガイゼルはデルロイ伯爵の返事を持たずに行動を起こし、拠点を完膚なきまでに叩きのめした。

その作戦後、ガイゼルは攻撃対象がレグドルの拠点だった証拠をデルロイ伯爵に提示したものの、彼はそれを捏造だとしてつき返した。その上で今回の軍事作戦が、ガイゼル侯爵による明らかな挑発と示威の行動であるとして伯爵は非難の声明を発した。

デルロイ伯爵はその件について、ランドール人たちの同盟の盟主であるドレアガンド帝国に中央法廷の開廷を申請した。だが、ドレアガンド帝国はそれをまともにはとりあわなかった。ドレアガンド帝国は辺境のリルニア平原で起こったランドール人同士の揉め事を解決することよりも、目の前に迫るレグドル教国という脅威とどう対抗していくかということに大きな関心を抱いていたのである。

結局法廷は開廷されなのまま、その件は進展も悪化も見ないまま放置されているのが現状だった。ガイゼルが国王となった現在、もしもデルロイ伯爵が主張するワレンハイトの境界線をガイゼルが認めれば、同時にガイゼルは伯爵の承認無しに行なった軍事行動が境界線を越えて行なわれた不正な作戦であることを認めてしまうことになるし、逆にデルロイの主張するワレンハイトの境界線を認めなければ、デルロイ伯爵は絶対にリルニア王国の傘下に入ろうとはしないだろう。

そういった事情から、デルロイ伯爵をリルニア王国へ迎え入れる提案には、境界線に関する文言は何も記載されていなかった。そんな文書では当然デルロイの合意が得られるわけも無く、そのおかげで現在でもワレンハイト問題は未解決のままだった。

*

*

*

「……最近、ワレンハイトに不穏な動きが見られる」書面を見つめながらガイゼルが口を開いた。

「不穏な動き？」セシエが尋ね返す。だが、その口調は心なしか少しばかり弱々しい感じ

だった。

「そうだ。軍備を拡充させ、情報管制にも力を入れている。内部に潜り込ませている内債との連絡もうまく取れず、その軍備の意味を我々は量りかねている」王は山のようになっている書類の中から一枚を手取る。

「さっそく現地へ行つて、内債と接触してくれ。お前が持ち帰った情報をもとに、我々は対策を練ることにする。この言葉の意味はわかるな？」

つまり、内債からの情報に何か不足があれば、自分の『陰の影』としての技量を駆使してそれを補えということだ。

「承知しました」セシエは簡潔に答えた。

ガイゼルは手にした書類を文官に差し出した。文官はそれを受け取ると、メダルと同じように黙ってセシエの前まで運んだ。セシエはそれを黙って受け取る。

「そこに今回の件についての知っておくべき情報はまとめてある。今日じゅうによく目を通し、明朝には出立せよ。以上だ」

国王は素晴らしい終えると、自分の机の上にあった書類をひとまとめにして書記官に渡し、別の書類の束を書記官から受け取った。

それは、この事案の終了を、セシエとの面談の終了を意味していた。

「……鐘の修繕費？」

新たな書類を見ながら、ガイゼルは隣の書記官に話しかけていた。

「西区画の教会の鐘が老朽化し、ヒビが入ってしまったそうです」

「ヒビか。そういうことなら無視もできんな。それでは——」

もう、誰もセシエの存在には注意を払っていなかった。セシエの存在は、空気とさほど違いはなかった。

「ガイゼル国王陛下……」

落胆混じりの声が、思わずセシエの口をついて出てしまう。

「何だ？ まだ何かあるのか？」

国王は書類を見つめたまま抑揚をつけずに聞き返す。そこには、国王と『陰の影』の関係以上のものを見出すことはできなかった。書記官たちの睨みつけるような視線だけが、『陰の影』の女に突き刺さる。

望みは国王に恩返しすることであつて、国王と昔話をしたり、馴れ合ったりすることではないのだ。自分のために余計な時間を使わせてしまったのは、多忙な国王にとって迷惑な話だろう。——セシエの理性は彼女にそう告げていた。

セシエは再び頭を垂れた。

「……いいえ、何でもありません」

「そうか、ではもう下がれ」

期待していたものがあまりにも大きかっただけに、セシエにとっては屈辱的な面会だった。彼女は唇を噛みしめた。

——心の中で、何かがガラガラと音を立てて崩れ去ったような気がした。

第二章 接触

再会を果たした日の夜、セシエは使い慣れた森の中の寄宿舎の自室で夜風に当たっていた。

もう城に割り当てられた部屋への荷物の移動は済ませていたが、寮母に頼んで今夜だけはここを使わせてもらうことにしたのだ。

養成施設には二十年間も世話になったが、いい思い出なんかほとんどなかったし、できれば一日でも早く出て行きたいとさえ思っていた。だが、今はガイゼル王のいる城に近づくことのほうが辛かった。

幸い、明朝にはデルロイ伯爵領ワレンハイトへと向かうことになるから、セシエはしばらくリルンブルグ城に近づかなくても済む。

(……でも)

ひとしきり悲嘆に暮れたあとで、セシエは思った。

(結局は私のエゴだったのかもしれない。私にとつてのガイゼル様は救世主かもしれないけど、ガイゼル様にとつての私は特別な存在でも何でもない、ちっぽけな存在なんだわ)

セシエは月を見上げた。ため息が漏れた。

(それなのに私は浮かれて、再会したガイゼル様から何らかの好意的な反応があるだろうと期待してしまったのよ。……なんて馬鹿なのかしら)

理性はそう告げていた。だが、セシエの中の感情的な部分は、その答えでは納得してくれそうもなかった。

(大事なのは、ガイゼル様が私に対してどういう態度で接してくれるかということではなくて、私がガイゼル様から受けたご恩に、どうやって報いることができるかということなんだわ。私は、根本的な間違いを犯していたようね)

セシエは何度も自分にそう言い聞かせた。感情を理性で無理矢理押さえ込んだ。

二十年間、彼女はいつもそうしてきた。どんなに辛いことがあっても、どんなに理不尽なことがあっても、彼女はそうやって自分を押さえ込んだ。それができたから彼女は今日まで絶望の淵に沈むことなく割り切って生きてくることができたのである。

「私は国王陛下のご恩に報いるため、ただ忠実に働けばいい」彼女はそれをあえて言葉にして、自分自身に言い聞かせた。命を救ってもらった上に懇意にしておうなどというのは、あまりにもわがまますぎる身勝手な発想なのだ、彼女は自分自身を戒めた。

——その夜は様々な思いが濁流のように彼女の脳裏を駆け巡り、なかなか寝つくことができなかった。

恐らく自分で自覚している以上は眠ったのだろう。長い夜だったが、気がつく朝になっていたという印象だった。疲労感を取れておらず、目の周りが少し腫れていた。

(体調管理できないようじゃあ『陰の影』は失格ね)

セシエは自嘲しながらも、いつものように窓を開けて外の空気呼び込んだ。彼女の気分に関わらず、森の小鳥たちは今日もいつもと同じような調子で無邪気にさえずりあっている。

「……でこうやって深呼吸するのも、今日が最後ね」

二度三度の深呼吸を済ませると、彼女は出発の準備に取り掛かった。

*

*

*

その日は二頭の馬を交互に乗り換えながら、可能な限り駆足を維持してワレンハイトを目指した。休憩はほとんどとらなかった。道程には予定を狂わせるような出来事も無く、日が暮れかけた頃には街道沿いの小さな農村にたどり着いていた。

多少天候が崩れたとしても、このペースを維持できれば五日とかからずには伯爵の館があるアラニールという街に到着できる予定である。

だがそれはあくまで体が持てばの話だ。一日じゆう馬を走らせたものだから、彼女の足腰は悲鳴をあげていた。安物の馬具だったから余計だった。そんな体を十分にいたわってやりたかったが、贅沢は言っていられなかった。それに、へとへとに疲れているのは自分だけでは無いのだ。

彼女は村はずれに住む農夫と交渉し、空いていた馬小屋を借りた。多めに謝礼を支払ったから、農夫は干し草をたっぷり分けてくれた。さらに頼み込んで、彼女は馬の手入れに使う道具も貸してもらったのだった。

セシエは二頭の馬の世話を怠らなかつた。馬たちはセシエと違って、自分の足で走らなければならぬのだ。彼らは人間と言葉を交わしたりはしないが、人間に劣らないぐらい豊かな感情を持っている。そんな彼らにへそを曲げられたくはない。

セシエは二頭の虚勢馬から馬具を外し、馬体の汗と泥とを拭いてやった。全身が清潔になると、今度はブラッシングだった。それは、彼らが心地よいと感ずるまで続けた。やがて、彼らはのんびりと寛いだ様子で干し草を食みはじめる。

馬の様子に満足し、セシエはブラシを用具入れに戻した。それから自分の額の汗をそでで拭くと、彼女は自分の背負い袋の中から食料の入った袋を取り出した。

馬とじゃれ合いながら、彼女も夕食を摂った。彼女の夕食は干し肉である。調理器具など余分な道具は何も用意していなかったから、彼女は干し肉をそのまま割いて食した。ゆっくりよく噛んで食べればそれなりに満腹感があるし、少量でも腹持ちはいい。

食事が済むと、彼女は馬たちとともに馬小屋で休んだ。全身の関節が痛む体には、干し草のベッドは快適とは言いがたかった。それでも夜風にさらされて眠るよりは、何倍も体によさしい。疲れていたから、眠りに落ちるのはとても早かった。考え事ができないほど疲れているのは、今の彼女にとってはありがたいことだった。

*

*

*

少し多めに用意していた干し肉が尽きるまでも無く、セシエは出発して三日目の午前中にはワレンハイトに入っていた。

彼女は検問所のない村や街を経由しながら、かなりペースを落として伯爵の館があるアラニールへと向かった。アラニールへ直行しなかったのは、住民たちとの会話を通じて噂話を仕入れておこうと考えたからである。

領内の住人たちの話からすると、デルロイ伯爵というのは民に信頼されている領主であ

るらしい。幾人かは否定的な見方をする人間もいたが、それは少数派だった。彼はレグドル教国の脅威にさらされた時も領土と民を守り抜いたし、必要以上の徴税も行なっていないようだった。

ところがここ数ヶ月というものの、各種の税が段階的に引き上げられ、若い男は徴兵され、女も武器作りに駆り出されているという。

街酒場の老人の話では、それはレグドル教国による侵攻の時と同じような政策なのだという。

(山脈を隔ててレグドル教国と接しているこの地では、攻撃への対応の遅れが命取りなのかもしれない。ということはデルロイ伯爵の間諜が、レグドル教国の再侵攻を察知しているということなのだろうか?)

セシエはもつと興味深い話が聞き出せないかと期待し、その老人にもう一杯エールをこ馳走した。老人はその後も機嫌よくしゃべってくれたのだが、以前レグドル教国軍が侵攻してきたときの彼の従軍体験が話題の主体になってきたので、セシエは適当なところで自分から話を切って酒場を立ち去った。

アラニール市壁の外周部にたどり着いたのは、四日目の『午後の鐘』の刻を一灯時ほど過ぎた頃だった。

服装は、農民に見えるように偽装してあった。各種の専門装備も目立たないように隠してある。

遠くから市の検問所を観察した限り、チェックは相当に厳重なようだった。すべての所持品を確認するだけでなく、手紙の封印まで解いて書面をあらためている。これでは密偵と連絡が取れないはずだった。

しばらく遠くに潜んで検問の様子を観察していると、セシエは面白い事実気付いた。一部の荷馬車に限っては、どうやら特別な通行許可があるらしいのである。彼らは簡単なチェックだけで市門を通過していた。荷台の積荷をあらためることすらしていないので、何とかして通行許可のある荷馬車の荷台に忍び込み、そこに潜んでいれば簡単にゲートをやり過ごせそうだった。

ところが、彼女はその方法をあきらめざるを得なかった。なぜなら、通行許可がある荷馬車と、無い荷馬車の区別がつかないのである。通行許可のある荷馬車に何か決まった特徴があるわけでもなく、所属を示すような紋章も掲げられてはいなかった。単に許可証のようなものを持っているか持っていないかというだけの違いならば、外見からでは判断のしようがない。

とはいえ、服装だけ農民を装った今の状態で検問を通るわけにもいかなかった。いくら巧妙に変装していても、体じゅういたるところに特殊装備を潜ませている『陰の影』が持ち物検査やボディチェックを受けたら無事で済むはずがなかった。こんなところで捕まってしまうたら情報を手に入れるどころではないし、生きてリルンブルグへ帰還できるかどうかさえわからなくなる。ガイゼルに受けた恩に報いるためには少なくともアラニールでの調査を無事に終え、かつ生きて帰る必要があった。

そこで、彼女は別の手を使って市内へ潜入することにした。すなわち、街を囲んでいる市壁を乗り越えて市内へ忍び込むという単純明快な手法である。

実は、街に到着する前から彼女は半ばそのつもりでいた。内偵からの連絡が途絶えてい

ることや、近隣の村々で仕入れた情報から類推すれば、この街の検問が嚴重であることは想像に難くなかった。

彼女はすでに近郊の村で二頭の虚勢馬を馬具付きのまま二束三文で売り払っていた。移動の際の足として馬は大変役立つが、街への潜入にはただの足手まといでしかなかった。帰りに馬が必要となれば、またそのときに調達すればいい。

彼女は『日没の鐘』が鳴る直前に市壁を越えるつもりでいた。『日没の鐘』はおよそ二灯時後に打ち鳴らされるから、計画の実行予定時刻までにはまだたっぷりと時間がある計算になる。セシエはその時間を使って市壁の外面に沿って歩き、市壁に作られた「ある設備」を目指した。目当てのものを見つけるまでに、そう長い時間は必要なかった。

「あそこね」

見上げた彼女の目は、城壁上方で外側に張り出している特殊な構造物に向けられている。

その構造物の張り出し部分の下部には、人間がなんとか通りぬけられそうな大きさの穴が穿たれていた。籠城戦において穴から石を落として直下の敵を攻撃する『石落とし』と構造的には類似していたが、これは違う目的で作られたものである。アラニールの市壁には『石落とし』は無かった。

「……残念ながら、ここで決まりみたいね」セシエは落胆混じりに独り言ちた。この設備が侵入経路として理想的な構造をしていたからこそ、彼女は失望したのである。市内への侵入のために彼女が選んだ設備は『トイレ』だった。

このトイレは、市壁を守る兵士たちのために作られたものである。なぜそのようなものがあるかといえば、用足しのたびに守備兵が長時間持ち場を離れないようにするためである。たいていの街の市壁には、同様のものが設置されている。

市壁のトイレの構造は単純だった。市壁の上部からせり出した部分にトイレ用の穴が開けられており、排泄の際に他の兵の目を気にしなくとも周囲に壁が巡らせてあるだけなのである。穴の下はそのまま市外だから、市内のトイレのように溜まった排泄物を清掃するような手間さえ無い。

セシエはトイレを穴の下、市外の側からトイレを見上げていた。彼女が立っている場所には、他に人影は無かった。汚物がそのまま投棄されるから、トイレは人通りの多いところを避けて設置されているのである。

トイレの下の壁面は、風に流された小水によって緑味がかった黄色に染まっており、排泄物や尻拭いの糞がいたるところにこびりついていていた。穴の真下の地面にさほど糞尿が積もっていないのは、農夫が定期的に堆肥用に持ち帰るからだ。

人通りが無いこと、適度な大きさの穴であること、穴に蓋がされていないこと、上部が視線を遮断する二重胸壁になっていること……それらの要素は、進入経路としてはまさに理想的だった。

そこをあえて利用せず、市壁の胸壁むねかべに直接鉤をかけてロープで上ることも彼女の技術ならば可能だった。しかしトイレと比較すれば、その方法は兵士に見つかる可能性が高い危険な方法だった。理想的な進入経路を避け、あえてハイリスクな手段を選択する理由は彼女には無かった。

彼女が決行時刻を『日没の鐘』直前に設定したのもまた、リスクを抑えるためだった。この街では『日没の鐘』を合図に市門が閉ざされるので、その直前の時間は市門周辺が人

の出入りで最も混雑するのである。それに伴って多くの兵士が市門の警備と混乱防止、そして門の閉鎖作業に当たるから、市壁を巡回する兵士の数は必然的に少なくなるのである。また、そんな忙しい時間に役目を放り出してトイレを利用する兵士なんて滅多にいないだろうから、『日没の鐘』直前はトイレから侵入するには最も都合の良い時間と言えた。

彼女は近くの低木の陰で静かに計画実行までゆっくりと準備を整え、予定通りの時間に行動を開始した。

アラニールの市壁は、人の身長にして五・六人分ほどの高さがあった。彼女は待機中に組み立て式の小型石弓を組み終えていたので、ロープを縛り付けた小型鉤をその石弓にマウントし、トイレの穴に向けて石弓の狙いを定めた。

彼女が利用している石弓や鉤は、『陰の影』のために工房で作られた特殊装備である。それらの装備はすべて携帯性を重視して設計されているため、軽装に見える彼女でも実際には数多くの道具類を身に潜ませている。

この石弓は携帯性を向上させる工夫として「弓床」が廃され、専用の手甲で腕を弓床に見立てて射撃部を固定するという特殊な構造をしていた。射程・命中精度・威力は犠牲になっっているものの、携帯性という面で見れば通常の石弓の比較ではない。

ロープや鉤についても同様で、強度を極限まで切り詰めてぎりぎりまで小型化されていた。鉤はまた、様々な使い方ができるような石弓に填めて使える設計になっていた。

彼女はたった一度の射撃でトイレの穴に鉤を掛けることに成功したのだった。命中精度の低い携帯石弓であるが、誤差には特有のクセがあり、彼女はそれを熟知していた。

彼女はトイレの穴から垂れ下がったロープがしっかりと固定されていることを引っ張って確認すると、汚物を踏んでしまわないように注意しながら体をロープに絡みつかせた。排泄物の臭いで鼻が曲がってしまいそうだったが、それは辛抱するしかなかった。

彼女はあまりロープを揺らさないよう注意しながら上を目指した。鉤の強度を心配しているのはもちろんだが、理由はそれだけではなかった。あまり勢いよくロープを揺らしてしまうと、排泄物で汚れた壁に自分自身が激突してしまうからだ。花も恥らう乙女としては、それだけはなんとしても避けたい。

結局、彼女は一度だけ足の裏を壁に付けてしまったが、それ以外は特にミスを犯さなかった。トイレの穴から市壁の上へと這い上がってからは、彼女は真っ先に足の裏の汚れを尻拭い用に積まれた藁で拭い取って穴に捨てた。不運ではあったが、壁に付いたのが足の裏だったことを神に感謝せずにはいらなかった。

彼女はロープと鉤を回収し、周囲に人の気配が無いのを確認してからトイレを出ると、低い姿勢をとって市壁の上から市内を覗き込んだ。ガイゼル国王に渡された紙の情報どおり、そこには貧民街が広がっていた。ちょうど真下で、路上生活者がボロ布にくるまって何人か座っていた。鉤とロープを使ってここから下りることは可能だが、人目につくのはなるべく避けたい。

セシエは低姿勢を維持したまま移動した。巡回兵の視界に入ってしまったくないよう細心の注意を払いながら、着地しても問題無さそうな場所を探した。

貧民街には違法建築物が多いようだった。普通の建物は市壁から離して建てられるが、この付近はその常識が通じていないらしい。本来は道があったと思われる場所にも、平気で粗悪な家々が乱立していた。セシエは比較的丈夫そうに見える三階建ての家を発見し、

その屋根に飛び降りることにした。高さもさほど問題とするほどでは無く、ロープを使わなくても大丈夫だろうという判断で彼女は跳躍した。

屋根の強度は十分にあった。しかし彼女は急角度の屋根の傾斜に足をとられて完全に着地に失敗して転倒してしまったのである。片手が雨どいを掴まなければ、石畳の地面に落下して体を強打して死んでいたところである。

彼女は両手で雨どいを掴みなおすと、体勢を立て直して建物の外階段へと飛び移った。彼女はその建物の三階の扉の前に降り立ち、安堵のため息をついた。

——とそのとき、真横の扉が開いた。
「な……」

セシエは驚いて飛び上がりそうになる。扉を開けて現れたのはコテコテに化粧をした女だった。化粧が濃すぎて、年齢の推測はできない。

「あんた誰だい！ ヒトの家の階段で何をドタバタやってるんだよ！」

豊満な胸を強調したドレスを身に着けているところを見ると、そろそろ街頭の立つ準備を始めていた娼婦という印象だった。家で身支度をしていて、屋根や外階段でドスンバタンやられては、確かにたまったものでは無い。

「し、失礼しました！」

セシエは一言謝ると、大慌てで階段を降りて逃げ出していた。

*

*

*

一日の仕事を終え、男はお気に入りの酒場『赤い鷲獅子』亭へと足を運んだ。

「よう、ランダイン。お前さんにお客が来てるぜ……」

酒場の扉を押し開けて中に入ったとき、いきなり話しかけてきたのはカウンターに立つ無精ひげの店主だった。

「え？」

誰とも約束した記憶がなかったので、ランダインは一瞬首をかしげる。

「こんばんは、ランダイン」

そんな彼に向かって、艶のある長い銀髪を持った女がカウンター席に座ったまま振り返って微笑みを見せる。

ランダインは、彼女の姿を見て一瞬ほかんと口を開けた。

「こりやあ驚いたな！ シエイナじゃないか！」

たちまち男の顔には笑顔が広がった。彼はシェイナの隣へと腰をかける。

「親父、俺にはエールを頼む。いつものように香辛料の効いたやつな。……シェイナ、君も何かどうだ？」

シェイナと呼ばれた女は、自分の前に置かれた料理皿やシードルの満たされたジョッキを目線で指し示した。まだ十分な量がある。

「……結構よ」

ランダインはテーブルの上に銅貨を一枚置くと、シェイナの側に向き直った。

「元気だったか？ 街へは今日ついたのか？ みんな元気か？」

彼は興奮した様子で一方的にまくし立て、その勢いに押されて女が少し当惑したような

表情を見せる。

「おいおいランダイン、お前、尻軽女どもは相手にしないでくせに、今日はどういう風の吹き回しなんだ？」

店の親父が、興味深そうに二人を見つめていた。もちろん、ランダインに香辛料入りのエールを差し出すのは忘れていない。

「あら？ あなたこの街で、可愛い娘たちのお尻を追い掛け回しているんじゃないの？ 驚きだわ！」シェイナはランダインに挑発的な視線を送り、親父のほうを見た。「彼とは同郷なんですの。家がお隣で、幼馴染みだったんです。昔から彼ったら、仕事は遅いのにあっちにもこっちにも手が早かったんですよ」

「ほおう、そうなのかい」

店の親父はニヤニヤ笑いを浮かべながら、ランダインを見た。ランダインはブルブルと首を振った。

「そんなことは無いよ。僕はずっとシェイナひと筋さ。……マスター、彼女は僕のフィアンセなんだ」

店の親父は驚いたように、口笛を吹かす。

ランダインは自分のジョッキを持ち上げ、シェイナのほうに向き直った。

「再会を祝して乾杯！」

シェイナも自分の素焼きのジョッキを取り上げて、ランダインのジョッキにぶつける。

「……フィアンセだなんて、恥ずかしいから外では言わないって約束だったでしょ！」シェイナは怒って口を尖らせていた。

本気で怒っているわけではなさそうだったが、ランダインがフィアンセという言葉を用いることにはかなりの抵抗を感じているらしい。

「そもそも、あなたはいつだって——」

フィアンセが小言を並べそうだったので、ランダインは急いでシェイナの唇を奪った。

突然のことに、シェイナは驚きを隠せない様子だったが、すぐに彼女も熱心な舌使いで応じた。挨拶程度とは言いがたいような濃厚な口づけだった。

二人は少し名残惜しそうにしながら、唇を離す。

「ゴメンよ、これはお詫びのキスさ」

ランダインは屈託無くニッコリと微笑んでいる。

二人の熱々ぶりにたまりかねた店の親父は、やれやれと両手をあげた。

「俺は邪魔者のようなだな、見ちやいられないよ。用があったら呼んでくん、俺は奥へ行つてるぜ」

彼は厨房のほうへと歩いていき、山になっている散らかった食器の整理を始めたようだった。カチャカチャと食器類がぶつかり合う音が聞こえる。

店内には他にも七・八人の客がいたが、カウンター席に腰掛けているのはランダインとシェイナだけだった。

シェイナはランダインのほかには誰も自分のほうを見ていないのを確認すると、ジョッキの中身を口に含み、音を立てないようにして口内をゆすいだ。そして、そばに据え付けであった汚物壺の蓋を開けてこっそりとそれを吐き出す。

「……君もヒドいなあ」ランダインがその様子を見つめながらぶつぶつとぼやいた。

「食事してもいい？ 私、干し肉以外の食事に取りつけたのは四日ぶりなの」シェイナと呼ばれていた女は、男のぼやきを無視して言った。二人にしか聞こえないくらいの声量である。

彼女の前にはシチューの大皿と、小さな薄焼きのパンがたくさん盛られた皿が置かれていた。

「お好きにどうぞ」気の無い返事だった。

彼女は薄焼きパンを手で掴むと、それをスプーンのように使ってシチューをたっぷりとすくい上げ、丸ごとほおぼる。

「……そろそろ誰か来る頃だろうとは思っていたよ。でも、まさか君が直接来るなんて驚きだな」

エールをあおりながら、男が答える。二人は、声が他人に聞かれないというのももちろんだが、誰かに誑唇されないようにも気を払っていた。

「それは、フィアンセのシェイナが直接来たこと？」

「まさか！」男は素直に笑った。「でも、フィアンセって設定は、マスターを引き離すのには一番いい方法だったと思うぜ。そうだろう、セシエ？」

セシエは次から次へとパンを口に頬張っていった。暖かい食事も、干し肉以外の食事も、四日ぶりなのだ。しかも、この店の料理はなかなか味がうまい。

「……ラムサス、聞いて。今日は最低の日だったの。嫌なものを踏んじやったし、高いところからは落ちそうになるし、娼婦には怒鳴られるし、ここに来る途中うっかり野良犬を蹴飛ばしてソイツにも追い回されたの。ようやくの思いでこの酒場にたどり着いて、もう今日は何も無いだろうと思っていたのに、フィアンセを騙る男に強引に唇を吸われてしまったわ。全く最低の一日よ」

「さっきのキス、なかなか上手だったよ。ごちそうさまでした」と、男がニヤニヤ顔で答える。

セシエは食べる手を止めて大きなため息をついた。自分のジョッキに手を伸ばして、もう一度それで口を濯ごうかとも考えたが、中のおいしいシールドをこれ以上無駄にはしたくなかったので、彼女は何とか思い止まった。

セシエは再びラムサスのほうへと向き直る。

「……そろそろ本題に入りましょうか」

ラムサスとセシエは、『陰の影』の養成施設で共に苦楽を味わった仲である。

もともとラムサスには『優秀』と呼べるほど『陰の影』としての才能は無く、早々に課程を切り上げられてアラニールで内偵として働いていた。アラニールで彼は、領主館の召使いランダインとして生きている。

召使いのランダインはこの酒場が気に入っていて、仕事が終わるとほぼ毎日この酒場に姿を見せる。……これも、ラムサスが演じているランダインの姿である。

日ごろからこうしておけば、彼に接触をはかる『陰の影』は酒場で彼の来店を待っていればいいわけだから、不必要な危険を冒さなくて済む。

「君がアラニールに送られてくるということは、どうやら国王陛下も今回の一件は重く考えていらっしやるようだね」

彼はセシエが国王直属の『陰の影』になったことは知らないはずだったが、彼女の實力

を知っていたから、彼女が語らずとも国王の命令で彼女が動いているということを理解しているらしかった。

「……国王陛下のお考えは私にはわからないわ。私は、命令に従って動いているだけだから」

問いかけへのセシエの答え方に、ラムサスは少し眉をひそめた。

「陛下とのあいだに、何か問題ごとでもあったのかい？」

セシエはハツとして、男の顔を見つめた。ラムサスも『陰の影』の内偵であるだけに、洞察力は人一倍鋭い。

「いいえ、何もないわ」彼女はうつむいて、ジョッキの中のシールドに映っている自分の顔に目をやった。そこには、にがりきつた表情の女が映し出されていた。「……そう、何もないのよ」

面会のとときの記憶がよみがえりそうになったので、彼女は慌てて顔をあげる。

「そんなことは、どうでもいいのよ。それより、今の状況を教えなさい。私はここに個人的な相談事を持ち込みに来たわけではないの」

ラムサスはうなずいて、エールで口を湿らせる。気安そうな表情のままだったが、彼の目は真剣そのものだった。

「わかった。では、こちらで把握できている情報を話そう」

*

*

*

密偵のラムサスの口から出る言葉には、そう目新しいものはないように感じられた。

デルロイ伯爵が最近になって各種の税を引き上げているということ、若い男は徴兵されて日々戦闘訓練させられているということ、武器の生産が盛んになったということ、それらはセシエもすでに調査済みだった。

ラムサスはその後、国籍不明の荷馬車が保存食や武器を搬入してきていることを大手柄のような口調で話しはじめたので、セシエは思わずため息をついた。

「……あなた、それでよく密偵が務まっているわね。荷車の中身までは私だって確認できていないけど、怪しい荷馬車が入ってきているのは今日この街に着いた私だって知っているわよ」

その言葉で、ラムサスは急に落ち込んだようだった。彼はもう空になった素焼きのジョッキの中を見つめて、なにやら物思いにふけっているらしかった。

二人の間に、重い沈黙が流れる。

「……ごめん、言い過ぎたわ。気を悪くしないで」

「そうじゃないんだ、セシエ」

ラムサスは悲哀を帯びた目でセシエを見た。

「……サハンが死んだんだ。十分な情報収集ができないのは、その影響が大きい」

サハンというのは、『陰の影』の名である。

「サハンが死んだ？」

セシエは驚きの表情を隠せなかった。彼の身体能力の高さや頭の回転の速さには、特筆すべきものがあつた。

ラムサスはコクリとうなずく。

国王から渡された文書の情報によれば、このアラニールでは『陰の影』のサハンとラムサスが密偵の役割をしているということだった。

サハンが与えられている任務は、最高機密級の情報を収集することである。可能な限りデルロイ伯爵に近づき、情報を得るのである。実際、彼は伯爵専属の事務官の座に就いて任務をこなしていた。

一方のラムサスはそのサポートが主任務である。重要なポストにあるサハンは多忙で身動きが取りづらく、不審がられる行動も慎まなければならぬ。ラムサスは伯爵館の召使いをしているが、住込みではないし、拘束時間も少ない。その身軽さを利用して、サハンが集めた情報の整理・分析、その他にも市民からの情報収集や外部とのパイプ役といった雑務をこなしていた。

だからサハンが死んだということなら、ラムサスが十分な情報を握っていなくても不思議ではなかった。セシエにはサハンの死が信じられなかった。

「デルロイ伯爵が今の軍事政策を始める少し前、アラニールにデボラと名乗る一人の若い女が現れたんだ。彼女は伯爵から賓客待遇を受けて、今も伯爵館の中の一番いい客室に滞在している」

セシエの表情が険しいものになる。その女のことは、セシエはまだ何一つ知らない。

「その女には謎が多かった。賓客待遇だが、どこかの国の使節であるという発表も無かったし、伯爵との関係についても不透明だった。

そんな女が平然と館に住むようになって、なぜか伯爵の政策が極端に右傾化し始めたんだ。……もちろん彼女がそれに関わっているという証拠は何も無い。

でも、急な右傾化の理由は幹部連中にも何の説明もなかった。執務室の様様替えをする時にだって、何故そうするか説明する伯爵が、急な政策方針の変更理由を言わないというのは少し変な話だろうか？

しばらくは我々も事態を静観していたよ。……だが、デルロイ伯爵がその女のもとに夜這いをしているらしいという噂が囁かれるようになって、俺たちもはや見過ごせなくなってきた。だからある日、俺とサハンは打ち合わせをして、サハンが女についての調査を開始することを決めたんだ」

ラムサスは弄んでいた自分の空のジョッキを置き、シールドが残っているセシエのジョッキに手を伸ばした。

「ちよつと貰うぞ」

セシエはうなずいた。ラムサスがシールドをあおって一息つくのを見守ってから、彼女は話の先を急かした。

「サハンが死んだのはそのたった三日後だ。転落死だった。館に割り当てられていた自室の窓から落ちるか、飛び降りるか、落とされるかして死んだらしい。死体に不自然な外傷は無かったし、部屋には争った跡も、遺書も無かった。……当然、この件に関しても彼女が関わっているという証拠は何も出ていない」

ラムサスは包み込むようにしてセシエのジョッキを持ち、中の液体を揺らしている。彼は揺れる液体を見るでもなく見つめていた。セシエの視線も、彼の手元に注がれている。

二人の間に、しばしの沈黙があった。

先に沈黙を破ったのはセシエだった。

「……すべての影に謎の女あり、か」

ラムサスはセシエのシールドを飲み干した。

「そういうことだ」

屋敷の廊下は、暗く静まり返っていた。

『はじまりの鐘』の刻を少し過ぎた頃、黒装束に身を包んだセシエはデルロイ伯爵の屋敷の中にいた。日付の変わり目である『はじまりの鐘』の刻は深夜であるため、特別な行事でも無い限り鐘は鳴らされない。その次の『真夜中の鐘』も同様である。だから、鐘の音が鳴って人が目覚めるという心配は無かった。

彼女は単身、伯爵の館での情報収集をやつてのけるつもりでいた。

館に忍び込んで調査するとラムサスに告げたととき、彼は反対した。彼女の潜入技術を疑つてのことではない。謎の女、デボラの存在がかりなのだ。もしも今回の一件に彼女が関わっていて、サハンの死にも関わっているならば、いくら優秀な『陰の影』といえども無事でいられるという保証は無かった。

だが、セシエの立場を知っている彼は、無理に引きとめようとまではしなかった。

言うまでもなく、現状では明らかに情報不足なのだ。ラムサスから得た情報だけをセシエが持ち帰ったとしても、リルニア王国は何の対策も立てられないだろう。それでは、国王つきの『陰の影』が直接動いた意味が無いのだ。

それに、セシエとしてはどうしても調べておきたいことがあった。酒場でラムサスから得た情報の中に、気になる点があったからである。

武器の生産には熱心なデルロイ伯爵だが、アラニール周辺の防御態勢にはそれほど力を注いでいないらしい。

もしも「レグドル教国軍の再侵攻計画をデルロイ伯爵が事前に察知していて、対策として軍備増強を図っている」と仮定するならば、街の市壁の補強や領主館の要塞化、砦の建造などに力を注ぐのが定石だ。しかし伯爵はそういった防備を固めるような努力はしていないのである。

だからこそ、彼女はこうして館への侵入を果たしたのだった。守りのための軍備でないのなら、それは攻めのための軍備である可能性が高い。攻撃目標や規模、方法や時期などがこの調査によってわかれば、デルロイ伯爵が万が一リルニア王国へ攻撃を仕掛けたとしても、被害を最小限に食い止めることができる。

もし今回の調査で彼女が失敗して戻らなかつた場合には、ラムサスが明日の朝一番でリルニア王国へと立つ手はずになつていた。今まで収集できた情報だけでは確かに不足だったが、ラムサスが行けば『陰の影』が二人も命を落とすような非常事態だということだけは伝えられる。

だがやはり、セシエが生きて帰つてより多くの情報を王国にもたらすほうが望ましいのは確かだった。現段階で得られている情報だけでは、デルロイ伯爵がどこを攻めるつもりでいるのか断定できないままだからである。彼の手勢がいくらか規模を増しているとはいえ、山脈を越えてレグドル教国に喧嘩を吹っかけるつもりならば、それはやはり自殺行為だ。かといって、リルニア平原のほぼ一帯を治めるリルニア王国に対して、平原の隅の伯爵が戦争を仕掛けるのも賢い選択とは言い難い。戦いが長引けばどちらに軍配が上がるかは、火を見るよりも明らかだった。その二点から考えれば、リルニア平原に残る他の独立地域への侵攻の可能性がもっとも有力ではある。

ところが有力だとは言っても、その戦いに勝つてどこかの独立地域を自分の支配下に収めたところで、デルロイ伯爵にとってどれほどのメリットがあるのかは疑問だった。

レグドル教国という脅威を前に、ランドール人たちの協調が必要とされている昨今、その足並みを乱すような戦争を起こすのは愚かな行為だった。そんなことをすれば、他のランドール人の国や地域から大きな非難を浴び、孤立してしまうことは必定である。そうなれば、デルロイ伯爵の命運は尽きたも同然だった。

そんな状況だからこそ、セシエがしっかりと情報収集をしてワレンハイトの動向を見極め、リルニア王国に生きて帰る必要があった。

今回の潜入で、彼女は手始めにデルロイ伯爵の執務室へと足を運んだ。事務官をしていたサハンが十分に状況把握できなかったくらいだから、ここで情報収集をするのは無意味かもしれないが、それでも何か発見できる可能性が無いわけではない。調べてみる価値はあるはずである。それに、夜は長い。

警備が厳重だったのは、館の周辺だけだった。館内部での障害は、警備の人間よりもむしろ建物の構造にあった。通路がかなり入り組んでいて、しかもその幅さえもまちまちなのである。これは地方領主や豪商がよくやる、お遊びなのか真面目なのかわからない防衛手段のひとつだ。軍団が攻めてきた場合には何の役にも立たないだろうが、間者や強盗には一定の効果があるらしい。横の構造だけでなく、縦にも入り組んでいるから、まさに立体迷路だった。ラムサスが描いた間取り図が無ければ、セシエ自身、屋敷の中で迷子になっていたかもしれない。

しかし、ラムサスの描いた間取り図だって完璧なものではなかった。すべての部屋の配置が描かれているわけではないからである。記載されているのはあくまで、召使いのランダインとして、ラムサスが入ることを許可されている範囲だけに限られている。とはいえ、日ごろよく使われている部屋は、たいてい網羅されていた。

セシエは下手に記載の無い場所を動き回らないことにした。何らかの罠にはまる可能性があるが、普段誰も利用しないような場所では特別な情報を入手できる可能性が低いからだ。だから彼女は、記載されている主要な部屋に限定して調査しようと考えていた。

その手始めが執務室というわけである。デルロイ伯爵の執務室は、ガイゼル国王の執務室よりも小さかったが、暗闇の中でわかる範囲で見ても調度品や装飾品に関しては、ガイゼル国王の物よりも豪華そうに見えた。

セシエは技巧を凝らした彫刻がなされている、一番豪華な机に置かれた書類の山の前に立った。本当は燭台にでも火を灯せば書類のチェックも楽なのだろうが、誰もいない執務室に明かりが灯ると人目を引く恐れがあったから、彼女はそれを避けた。

セシエは自分の服の襟首の前に引つ張り、反対の手で胸元の小石を取り出した。首飾りの先につけられたその小石は、微細ながらも緑黄色の輝きを発していた。昼間なら判別できなくらいのごく弱い光ではあるが、書類に押し当てれば暗闇の中で字を読む助けにはなる。それに遮蔽の影に隠れて石を使うぶんには、光が弱いおかげで人に気付かれる心配をしなくて済む。

この首飾りは、二十年前にセシエが父親から渡されたものである。彼女はそれを二十年間、ずっと肌身離さず身に付けていた。しかしそれは、必ずしも父親への憧憬の念からというわけではない。

地下倉庫に娘を閉じ込めて、そのまま置き去りにしてどこかへ行ってしまった父親だから、彼を恨むことはあっても恋しいと感じることはセシエにはなかった。

価値があるものだから大事にしているのかというところ、そういうわけでもなかった。以前、彼女は値打ちが気になって専門家に小石の鑑定を依頼したことがあった。鑑定士が言うには小石自体がごく僅かに魔力を発してはいるものの、それは自然界にあるがまま存在している純粹な魔力と同程度のものであるらしく、その値打ちも道端に落ちている石ころと大して変わらないということだった。わが子を置き去りにするような父親が娘に持たせた首飾りなのだから、所詮はその程度の物かと鑑定士の答えに彼女は妙に納得したものだ。

そんなどうしようもない石を彼女がずっと持っている理由は二つあった。一つ目の理由は、焼けた村から持ち出した唯一の品がこの小石の首飾りだけだったからである。そんな首飾りを手放してしまうということは、まるで『陰の影』として育てられる以前の自分の存在証明を消し去ってしまうことのようにセシエには思えたのだ。幼少期の記憶はあいまいで、父の顔も母の顔もよく思い出せないが、それでも何か少しでも過去に接点を残しておきたいという気持ちに漠然と彼女にはあった。その気持ちに従って彼女は今でも小石の首飾りを捨てずに持っているのだ。

もう一つの理由は単純だった。光の無いような暗闇で活動することの多い『陰の影』にとっては、やはりそのわずかな明かりが便利だったからである。それに値打ちが石ころ同然とは言っても、石ころのようにそこらで簡単に拾えるというわけではなかったし、店で売っているところも見たことがなかった。だから、『陰の影』としてもその石を手放すのは惜しかったのである。

今回も小石は『陰の影』としての活動の役に立っていた。一度に書類全体を見渡すことは不可能だったが、暗闇の中で文字を読むのにはそれで十分だった。彼女は羊皮紙の上になんかざして一枚ずつチェックしていく。

「……駄目ね」

丹念に調査を重ねたが、二十と少し確認し終えたところで彼女はそう結論づけた。数が多いし、どれを当たってみても核心に迫れそうな書類は無い。もし簡単に触れられるような場所にあるのなら、サハンがすでに見つけていたはずなのだ。

彼女はその机の鍵がかかった引き出しに目をつけた。ここもハサンが調査済みなものかもしれないが、そうだと決め付けて見過ごすわけにもいかない。

彼女は小石で鍵穴を照らしてみた。その様子からして、極めて単純な構造である。

腰のポーチからピッキングツールを取り出すと、妙な傷跡を残さないようにだけ注意しながら錠を外した。

中には、封印に用いるための伯爵の印や、特別通行許可証と書かれた羊皮紙が何枚も収められていた。

「この許可証……」

特別通行許可証には「特例輸送車につき、積み荷あらため不要」の文字と、伯爵印があった。恐らく、これを所持している荷馬車だけが市門のチェック無しに通過を許されているのだろう。

彼女はその引き出しをさらに詳しく調べ、納品書らしき書類を見つけ出した。それによって、この街に武器・防具・保存食が大量に運び込まれていることが明らかとなる。武器類

は自衛目的と呼ぶには明らかに度を越えた量であるし、保存食は兵糧として使うためのものかもしれない。

その書類には送り主についての情報がなかったので、セシエはそれらしきものがまだ見つかるのではないかと思つて引き出しの中を探したが、残念ながら目ぼしいものは見つからなかった。入城が許可される荷馬車の外観に統一性が無かった点も、送り主を特定されないための偽装かもしれない。

なぜそこまで送り主を隠す必要があるのかはわからなかったが、彼女は自分が触れた痕跡を残さないように注意してすべての書類を元通りに戻した。もちろん、錠についても同様である。

そのあともしばらくは執務室で調査を続けたが、たいしたものは見あたらなかった。セシエは頃合いを見てそこでの探索をあきらめ、伯爵の私室へと向かうことにした。

時間が遅かったので、常識的に考えれば伯爵はすでに眠っているはずだった。間取り図によれば居室と寝室の二部屋に分かれているから、居室側から探れば伯爵を起こしてしまう心配も少なそうである。

入り組んだ通路を間違えないように進み、時々聞こえる巡回の足音に身をひそめて、彼女は伯爵の私室へと辿り着いた。見張りの姿は無い。

セシエは伯爵の部屋の扉に張りつくと、聞き耳を立てた。中で、人が動いているような物音はしない。

今度は鍵穴から中を伺い見る。扉の向こうの部屋に明かりが灯っているような様子はない。

彼女はその確認を終えると、いとも容易く部屋の扉の錠前を外し、内側の掛け金も特殊な形状の器具を用いて音を立てずに外した。

十分に注意して忍び込むと、部屋の中は真つ暗だった。目はすでに暗さに慣れていたので、窓からの月明かりだけでも行動に支障は無かった。

居室の中央にはソファとテーブルが据えられており、目に付く戸棚には蒸留酒の瓶などが並べられていた。奥の寝室へと続くと思われる扉もある。確認のために、その扉に対してもこの部屋の扉と同様の手順で状況確認を試みたが、部屋は暗く静まり返っているようだった。とはいえ、扉一枚隔てた向こう側で伯爵が眠っているということは疑う余地も無い。とにかく慎重に行動する必要があった。

セシエは音に気をつけながら引き出しなどを探り、目当ての内容が書かれた書類が無いか調べていった。

執務室の文書が内政や外交についての文書だったのに対し、この伯爵居室にあったものは、主にレグドル教国の調査資料だった。やはり、山脈ひとつ隔ててレグドル教国という異教徒の大国と隣り合わせであるこの地域では、領主はレグドル教国についての膨大な知識を得ておく必要があるのかもしれない。

プライベートルな部屋にまでそういった資料を持ち込む必要がある伯爵に、セシエは少し同情を覚えた。

結局、この部屋でも十分な情報を集められなかった彼女は、デルロイ伯爵の寝室に忍び込む決心をしていた。部屋を元通りにした彼女は、国王から貰い受けたメダルを手に握りしめ、寝室の調査にしくじりませんようにと祈った。民家に泥棒に入るのは訳が違った。

もしちよつとでもしくじろうものなら、それはすなわち死だ。

ガイゼル国王が自分のことをどのように思っているかと、身寄りのないセシエが頼りにできるのは、やはり国王だけだった。そんな彼から貰い受けた『陰の影』のメダルは、彼女にとっての一番の宝物であり、お守りだった。

彼女はメダルを胸元で抱きしめて心を落ち着かせると、寝室への扉の前に向かった。一度行った確認だったが、セシエは念には念を入れて、もう一度同じ確認を行った。やはりこれといった物音もしなければ、明かりが灯っていないような様子も無い。

覚悟を決めて、彼女は扉を慎重に開いた。蝶番が軋まないかということにも細心の注意を払った。

(……寝息が、聞こえない)

半分ほど扉を開けたところで、彼女はそう思った。一瞬、畏か何かかという思いが心の中をよぎったが、ありえないことだった。セシエはこれといったミスを犯していないし、思い当たる節はなかった。

(まさかラムサスが……)

ラムサスが敵と内通しているなら、これが畏である可能性もあった。だが、その可能性もゼロに近かった。『陰の影』は幼い頃から『陰の影』としての教育を受けているし、そう簡単に仲間を売ったり敵に寝返ったりすることはない。それに、もしそんな裏切り行為が他の『陰の影』たちに知れたら、裏切った『陰の影』は三日と生きてはられないだろう。

セシエはラムサスの裏切りの説も否定した。

(進まなければ)

不審に思いながらも、セシエはそのまま体を室内に滑り込ませ、寝室への侵入を果たした。暗くて様子が不鮮明だったが、ベッドの上に伯爵がいなのは確かだった。

(……むしろこれは、好都合と考えるべきかしら?)

セシエは手際よく室内を物色していった。文書のようなものはほとんど無かった。あるのは覚え書き程度のもので、本人しか理解できないような走り書きの単語が並んでいるだけだ。

そのかわり、彼女はその部屋でもっと面白いものを発見していた。

それは、衣装戸棚の奥にあった。服がたくさんかけられていて奥は暗く、見てそれとわかるようにはなっていないかった。ただ、彼女はそこに、かすかな空気の流れを感じとったのだ。彼女は隠し通路を見つけたのである。

(伯爵は、お出かけ中のようね)

セシエが伯爵の私室に忍び込んだとき、彼女は内側の掛け金を外して進入した。ということは、だれかが部屋の内側から掛け金を掛けたのはほぼ間違いないのである。それでいて人の気配は無く、かつ窓には格子がはまっているのだから、セシエはこれが畏では無いかと疑っていた。

だが、隠し通路があるのならば話は別である。伯爵は施錠して私室にこもっているふりをして、実際は隠し通路からどこかに出かけているのである。

(デボラという女のところかしら?)

ラムサスの話から考えれば、その結論が自然と導かれた。そして、執務室や居室、寝室を探しても何も出なかったのだから、セシエのとるべき行動はひとつだった。

(……行ってみますか)

*

*

*

むせ返るようなジャコウの香りに、獣脂が焦げる甘い臭いが混じる。獣脂の蠟燭の明かりの揺らめきに照らされて、薄い肌着一枚の女性の肢体がなまめかしく映し出されていた。

男はその後ろ姿をじっと見つめ、物思いにふけていた。

「どうされましたの？」

二つの純銀の杯と葡萄酒の瓶を載せた盆を持って、女が振り返りながら尋ねる。

「私では退屈なのかしら？」

男はそう問いかけられ、目を泳がせた。彼女は女性として魅力的であるし、人間としても魅力的だった。今まで知り合ったどんな人間よりも理知的であったし、思考の柔軟さも併せ持った素晴らしい女性だった。彼女と一緒にいると、自分のあらゆる欲求がさらけ出されていくような感覚を味わう。

「いや、そういうことじゃないんだ。ただ——」

女は男のいるソファの前のテーブルに盆を置き、彼の隣に腰を降ろす。そして、彼を上目遣いに見つめた。

「ただ？」

男はそう問いかける女のほうに目を向ける。かすかに憂いを含んだ女の眼差しと、艶やかで張りのある唇に吸い込まれてしまいそうだった。

女は豊満な二つの女性的ふくらみをわざと男の体へと押し当て、彼の首筋を自分の指でやさしく撫でた。男の理性はどこかへ吹き飛んでしまいそうだった。

「ま、待ってくれ！」

男はむしやぶりつきたい気持ちを抑え、女の肩を両手で掴んで自分の体から引き離れた。いつもこの女には、同じようなやり方で話をうやむやにされているような気がしていた。今日は、彼女としっかりと話し合わねばならない。

「乱暴にしないで……」

両肩を男に驚づかみにされたまま、女は恥ずかしそうに視線を逸らした。その仕草がなんと官能的で、男は危うく分別を失うところだった。彼は慌てて手を離すと、ソファから立ち上がった。彼女の体温や息遣いをそばで感じていると、とてもじゃないがまともな会話はできそうになかった。

突然立ち上がった男を、女は流し目で見て微笑している。男は必死で言葉を探した。

「君はとても魅力的な人だ。そう、とてもなんて言葉で言い表せないくらいだ。私が忘れていた喜びも、君は思い出させてくれた。だが——」

「だが？」二つの銀の杯になみなみと葡萄酒を満たしながら、女が復唱した。

「これは正しい関係ではないのだ！ 私はリルニア平原のワレンハイトを領地に持つランドール人の伯爵で、君はレグドル教国から遣わされた査察官だ」

客室の衣装戸棚の奥で、二人のやり取りに耳を澄ましていたセシエは思わず声をあげてしまいそうになった。なんとか堪えることはできたが、衝撃的だった。デボラという女は、

ランドール人と敵対的な関係にあるレグドル教国の人間だったのだ。しかもそのレグドル教国の人間と、デルロイ伯爵はただならぬ関係にある。セシエは息を潜めて成り行きを見守った。

「楽しいことをするのが、そんなにいけないことだとは存じあげませんでしたわ」

デボラは杯の一つを手に取り、それをひと息にあおった。急に杯を傾けたため、葡萄酒の液体の一部が彼女の口角から首筋へと伝い、胸の谷間へと流れた。彼女は空になった杯をテーブルへと戻すと、自分の指で胸の葡萄酒を拭い、デルロイ伯爵を見つめながら指の葡萄酒をゆっくりと舐めた。

伯爵はその様子を息を飲んで見守っていた。

「伯爵はちゃんと、私の指示通りに動いてくれますわ。私も査察官として、そのことを過不足なく本国に報告していますし、本国もあなたの努力を好意的に受け止めています。もうじき、レグドル教国は正式にデルロイ伯爵領を同盟国と認めることでしょう」デボラは立ち上がり、伯爵の胸に自分の体を預けた。「私もあなたも、やるべき仕事はきっちりやっているのです。プライベートな時間をどう過ごそうと、私たちの自由じゃありませんこと？」

デルロイ伯爵は、戸惑いながらもデボラの腰に手を回した。

「……そ、そうかもしれないな」

デボラは彼の手首をそっと掴んで、自分のお尻のほうにその手を運ぶ。

「いや、そうじゃない！」

伯爵は声を荒らげてデボラを突き飛ばした。彼女はそのままソファの上に倒れこむ。

「また君はそうやって誤魔化そうとする！」

彼は激昂しているらしかった。女が注いでおいてくれた葡萄酒を掴み取って一気に飲み干してしまうと、杯を床に叩き捨てて女のほうに自分の人差し指を向けた。

「私はプライベートな時間の過ごし方について君と論議しているんじゃない！」女は肩からずり落ちた肌着の肩紐を直しながら、目を合わせずに伯爵の言葉を聞いていた。彼女に動揺した様子は無い。「君は同盟の成立がもうじきだと言うが、その具体的なものを私に提示して見せたためしがない！ 私がそれを要求したときはいつも、君が話をうやむやにしよう。いいかげん、そんなのにはウンザリしている！」

彼はそこまで勢いよく言い立てると、大きなため息をついた。そして、少し柔らかな口調で続けた。

「私はこれでも、この地域を統べる領主だ。領地が狭いとはいえ、領民に対しての責任がある。これ以上は、ただハイハイと君の指示通りに動くわけにはいかない。そろそろ具体的なものを示してくれ」

少しの沈黙のあと、デボラがデルロイ伯爵の顔を見上げた。そして、不敵な笑みを浮かべる。

「わかりましたわ」

彼女はソファの上で姿勢を立て直して、立ち上がった。もう腰をくねらせたり、上目遣いで男を見つめたりするような真似はしていない。スッとまっすぐに立って、引き締まった表情を伯爵のほうに向けている。女の体格は小柄だったが、それを全く意識させないほどの存在感があった。

「知りたいのなら、教えてさしあげましょう」

デボラはベッドに脱ぎ捨ててあったイブニングガウンを身にまとうと、錠のかけられた保管庫から羊皮紙の束を取り出した。それを何も言わず、伯爵に差し出す。

「これは……」伯爵は戸惑いながらそれを受け取った。

デボラはテーブルの向かい側のソファに腰掛け、足を組む。彼女はハキハキとした口調で言った。

「あなたからの提案を基にして、我々が用意した筋書きの全容です」

デルロイ伯爵はデボラと向かい合う席に腰を下ろし、彼女を見る。

「筋書きだと？」伯爵は女を睨みつけてから、手元の羊皮紙に視線を落とした。彼はそれを読みふける。

あまりにも長い沈黙だったので、音だけを頼りにしていたセシエはじっとしていられなくなつた。彼女は音を立てないようにして慎重に隠し通路から一步前に出た。衣装戸棚の中にはたくさんさんの服がかかっていたし、棚の奥までは蠟燭の明かりも届かない。音さえ立てなければ、セシエには何の危険も無いはずだった。セシエは棚にかけられたたくさんさんの服の間から、そっと室内を覗いた。

セシエは凍りついた。黒髪の女が、衣装戸棚のほうをじっと見据えていたのである。

(大丈夫だ。見えていない、見えていない)

絶対に見えているはずは無かつた。人間の視覚については十分に熟知していたし、自分のいる位置が相手の死角になっている点は疑いなかつた。下手に慌てて音を立てるほうがよほど危険だ。

それでも相手はじっと衣装戸棚を見つめていた。それも、セシエの瞳の中を覗き込もうとしているかのように見える。デボラの瞳は、鷹の目のような鋭さがあつた。

(見えてない、見えてない、身じろぎしたらバレる)

セシエは心臓が飛び出してしまいうさだかつた。激しい鼓動が相手にまで聞こえてしまうのではないかと思つた。だが、動くわけにはいかなかつた。

女は、最後にセシエに微笑みかけるような表情を見せて、衣装戸棚から目を離れた。彼女は伯爵のほうに向き直つたのだつた。

セシエは視線から解放されたのを確認し、再び通路側へと身を潜めた。気付かれてはいないはずだつた。潜入や潜伏の技術には絶対の自信があつた。あらゆる可能性を考えてみたが、どう考えてみてもあの女の側から見えているはずは無かつた。

(でもあの女、こちらに笑いかけてきた)

動揺で、嫌な汗が噴き出していた。もうとても中の様子を確認してみようとは思わなかつた。まだ心臓はドキドキとしていた。

「ご覧のように、この作戦は伯爵の部隊が的確に動けるかどうか重要です」沈黙を破つたのはデボラだつた。彼女は羊皮紙に描かれた地図を指し示した。

「最初に行動を開始するのは教国軍部隊です。八千の兵を有する教国軍部隊はザングバル山脈を越え、中央街道を通ってまっすぐリルンブルグを目指します。

その間に伯爵はご自分の千の兵を率い、寡兵だからこそ可能なサン・ルブラー山脈の東方を通るルートを通ってリルンブルグを目指します。もちろん、表向きはリルンブルグへの救援部隊を装うのです。そうして、伯爵軍はリルニア王国軍とともに教国軍の到着に

備えます」デボラはニヤリと笑った。「そして、戦いの中で突然寝返るのです。ランドール人は、まさか同胞がレグドル教国側へ寝返るとは夢にも思っていないません。ですから当然大混乱に陥るでしょう。そこを一気に畳み掛けるのです」

デボラの笑みに、デルロイ伯爵が応じる気配はなかった。

「しかし、そう上手く計画通りに運ぶものなのか？」

デボラは声をあげて笑った。

「リルニア王国は、確かに強かな国です。我々も前回の戦いでは大敗を喫し、平原を追い出されてしまいました。」

しかし、我々の調査によれば、リルニア王国は戦役後の食糧難と飢饉の経験から農地の拡大に力を注いでいます。人手を農作業に多く回しているため、連中はあの頃の四分の一ほどしか兵力を維持していません」

「ほう……」

「その圧倒的に有利な状況に加え、我々の計画ははまだ連中に察知されていません。連中がレグドル教国の動きに気付くのは、国境警備隊が教国軍のザングバール山脈越えを発見したときです。」

そこから八千の兵をリルンブルグに移動させるのに必要な時間は、およそ二週間という短期間。しかも、教国軍は中央街道から平原各地へ行軍が可能のため、教国軍の狙いが不明確なうちは諸侯も自分の領地から部隊を送り出すのを渋るはず。そうなればリルンブルグの守備は手薄になり、猫の手も借りたい状況となる。そこに伯爵軍が救援部隊として現れれば、いくら犬猿の仲とはいえ無下に追い返すような真似はしないでしよう。あとはもう、我々の思う壺です」

デルロイもそれを聞いて、ようやく笑みを見せた。

「なるほどな」

女の言葉にうなずいて、伯爵は葡萄酒を瓶のままあおった。

デボラは黒髪を掻き上げると、姿勢を正し、真剣な表情でデルロイ伯爵を見た。伯爵は思わず息を呑み、同じように姿勢を正した。

「この筋書き通りに行動していただき、伯爵軍がリルニア王国を裏切った時点で同盟は成立となります。それでよろしいですね？」

デルロイ伯爵はデボラを見つめたまましばらく黙っていたが、やがて口を開いた。

「同盟の話がレグドル教国に打診した時点で、私の心はすでに決まっていた。その条件を呑もう」伯爵が立ち上がって手を差し出し、デボラがそれに応じる。

「では明日さっそく、本国へ使者を出します。教国軍は準備が整い次第行動を開始しますので、伯爵もそろそろ部隊の最終調整に入ってください」

馬が泡を吹いて倒れてしまうのではないかと思えるほど、セシエは帰路を急いでいた。彼女は敵の計画をラムサスにも教え、朝を待たずに旅路に着いたのだった。

セシエはリルニア王国にとって障害となりうるデルロイ伯爵とデボラを、二人の密会中に踏み込んで暗殺することができたかもしれないが、それを試みたりはしなかった。怨恨で人を殺傷するのは違って、この件には政治が絡んでいるのだ。暗殺によってどのような場所にどのような影響が出るのかは想像もつかないし、良かれと思つてとつた軽率な行動が、自国を滅ぼす可能性だってゼロではないのである。一度国に戻って状況を報告するのが賢明な判断だった。

彼女はアラニールを出て最初の村までは身一つで走り、その村で馬を買った。お金は王国から多めに支給されていたから、心配する必要はなかった。彼女は馬を走らせるペース以上で走らせ、馬が泡を吹いて倒れる前に道程の村々で多めに金を渡して別の馬と交換させ、なるべく速いペースを維持した。途中の村への到着が夜になった場合は、何も告げずに勝手に馬を拝借して旅の続きを急いだ。彼女は寝ずのままでリルンブルグを目指し、二日後の明け方にはリルンブルグに到着していた。まだ、市門が閉ざされている時間帯であった。リルンブルグの街には『陰の影』だけが知る非常用の隠し通路がある。セシエはそれを利用して市内に入ると、同様の通路を利用して国王の寝室へと急いだ。この通路は『陰の影』が急ぎのときと、国王が街を脱出しなければならぬ場合に使用される秘密通路である。

セシエがガイゼルの寝室に訪れると、彼は静かな寝息を立ててベッドの中で休んでいた。彼の顔が判別できるのは、格子窓越しの白みかけた空のおかげだ。

「国王陛下、『陰の影』にごさいます」

なるべく驚かさないうよう、声のトーンを落としてガイゼルに呼びかける。

「国王陛下、『陰の影』にごさいます」

次は少し大きな声を出す。王は唸って身じろぎし、体を起こした。

「国王陛下、『陰の影』セシエ、ただいまワレンハイトから戻りました」

片膝をついて最敬礼を取るセシエのほうに、国王はゆっくりと向き直る。

「……うむ。よくぞ戻った、『陰の影』よ。ご苦労だった」そう言いながら、彼は目をこすつた。「かような時間に面会ということとは、事態の切迫した報告なのだな？」

国王直属の『陰の影』はいかなる時間でも国王との面会が許可されている。ガイゼル国王の声は眠そうだったが、不機嫌そうな響きはなかった。

「デルロイ伯爵は、レグドル教国と手を結んで我が国に侵攻するつもりで、ごさいます」

*

*

*

まだ眠そうな奉公人たちが、執務室の隅に寄せてあったオーク材の長机を数人がかりで移動させている。セシエはその様子を座に着いた王の背後に侍して見つめていたが、疲れと眠気でそのまま倒れこんでしまいそうだった。

奉公人たちの手によって四台ある長机がすべて部屋の中央へと運ばれ、隣室にあった椅

子とその周囲に並べられると、執務室はたちまち会議室へと早変わりした。

この部屋には、貴金属の装飾品も豪華な花瓶も置かれていなかった。室内を華やかに見せているものといえば、壁と机の上を飾っているリルニア産の繊細なつづれ錦くらのものである。アルデイエルドの家系はあまり浪費を好まなかった。暗闇の中で目にしたデルロイ伯爵の執務室とは大違いである。

つづれ錦の文様の上で、朝の光と奉公人の影が踊っていた。まぶたが閉じてしまわないよう、セシエはその情景を楽しもうと心に決めて神経をそこに集中させていた。

「だいぶ、辛そうだな？」

呼びかけられて、セシエは王のほうに向き直る。突然の呼びかけだったので、何と答えるべきか思いつかない。そんな彼女に、国王は微笑みを見せた。こんなにそばで、しかもセシエ個人に向けられたガイゼルの笑顔というのは、二十年ぶりのことだった。

「何も言わずともよい、わかっておる。今回の情報が私の元になるべく早く伝わるよう、お前はアラニールからほとんど休憩も取らずにリルンブルグへの帰路を急いだのであろう？この臨時評議会さえ済めば、後は好きなだけ休んでかまわん。暖かい食事と、浴用の桶はお前の部屋に運ばせておく」

セシエは最敬礼の姿勢をとる。

「……お気遣い、痛み入ります」彼女はそう口にするのがやっとだった。

彼の笑顔に、セシエは自分がひどく動揺していることに気づいていた。二十年ぶりの彼の笑顔に、セシエは当惑していた。

地に片膝を着けて頭を深く下げる最敬礼の姿勢なら、自分の動揺を彼に気取られる心配はなかった。

「臨時評議会での評議員への説明、しっかりと頼むぞ」

*

*

*

準備の整った会議室に最初に姿を見せたのは、ミリエル王女だった。彼女はガイゼル国王の第三子で、セシエより五歳も年下の庶出の娘である。

彼女は幼い頃から街が好きでよく訪れるので、セシエも街では何度かその姿を見かけたことがあった。直接に話しをしたことはなかったが、民と過ごす時間を多く持つとする姿勢が好印象で、老若男女、街じゅうにファンも多い。その人当たりの良さもあってか、最近は外交団にもよく参加しているようだ。

「お父さま、突然何事ですか？」

「急を要する事態に見舞われた。……詳しくは皆が揃ってからだな」

ミリエル王女はシンプルなデザインの無地のチュニックに、乗馬用のズボンとブーツとといういでたちだった。一目見ただけで、ドレスを着て大人しくしているようなタイプではないことがわかる。大きな瞳と、ブロンドの巻き毛が特徴的な、朗らかそうな姫君である。

「そちらは？」

王女の目が、セシエのほうに向けられる。

「私の新しい『陰の影』だ」

「お初にお目にかかります。『陰の影』セシエにいます」

セシエは抑揚の無い調子で答え、拳を軽く胸に当てて敬礼の姿勢をとった。

「こんにちは、セシエ。私はミリエルよ」

王女はセシエに近づきながら自分の手袋を外すと、微笑んで手を差し出した。王女という肩書きに似合わずとても気さくだったので、セシエは一瞬だけ戸惑いを感じたが、すぐに笑顔を返して彼女と握手を交わした。この気兼ねしない雰囲気こそが、ミリエル王女が国民に慕われる大きな要素なのだろうとセシエは思う。

ミリエル王女が現れたのち、評議員たちがぞくぞくと会議室に姿を現し、座席を埋めていった。臨時評議会が開かれるという伝令が発せられた一灯時後には、二十ある議席がすべて人で埋まっていた。そのほとんどが、リルニア王国の中で重要な地位を占める人物か、その代理人である。そのほとんどが男性で、年齢は様々である。評議員たちの中には、ミリエル王女の二人の異母兄の姿もあった。武芸に秀でたオキレフ第一王子と、きらめく才知の持ち主たるグレアム第二王子である。グレアムは刺繍があしらわれた鮮やかな公用着に身を包んでいたが、オキレフは鷹狩りの装束のまま席についていた。他の評議員たちも服装は様々だった。評議会では礼装および軍装が基本となるが、緊急の場合はその限りではない。そして、今回の評議会は『緊急』なのだ。皆、伝令を受けて一目散に駆けつけたに違いなかった。中には、額に玉の汗を浮かべている人物もいる。

臨時評議会は国王の号令とともに始められた。今回臨時で評議会を開いた理由が王の口から述べられると、評議員たちの間にはどよめきが起こった。皆、まさかデルロイ伯爵がレグドル教国と手を組むとは夢にも思っていなかったのである。

どよめきがおさまるまでにはしばらく時間がかかったが、しばらくすると再び静寂が戻った。王は周囲が静まったのを確認してからセシエを皆に紹介し、彼女に今回の偵察の詳細を報告するよう促した。

彼女はなるべく主観を交えないよう注意を払いながら、偵察の内容について詳しく語った。レグドル教国からの使節のこと、『陰の影』が謎の死を遂げていること、伯爵軍と教国軍の進軍計画や規模など、セシエは調べてわかったことを過不足無く伝えた。新たな情報が彼女の口からもたらされるたびに会議室内はどよめいたが、彼女は国王に倣って、そのつど静寂が戻るのを待ってから話を続けたのだった。

「報告は以上です」言うべきことをすべて言い終えた彼女は、最後にそう締めくくった。

彼女が口を閉ざすと、国王は立ち上がった。

「……我が『陰の影』の言う通りであるならば、敵はそろそろ行動を開始する頃だ。もはや外交努力で危機を回避できる可能性はほとんど無い。我々は現在、非常に切迫した状況に立たされているといえるだろう。だが、この段階で相手方の計画を察知できたのは、せめてもの救いと考えるべきなのかもしれない。ザングバル山脈を越えてリルンブルグまで軍勢を到達させるのは、一人で早馬を飛ばすとは違って相当の時間が必要だ。となれば、我々には十分とは言えないまでも、ある程度余裕を持って対策を練る時間が残されているということになる」国王はそこで一度言葉を切り、体を前に乗り出した。「ぜひ諸君の意見を聞かせてほしい」

議論は、セシエがもたらした情報の信憑性の確認から始められた。デルロイ伯爵がレグドル教国と手を組むという話は、評議員たちにはなかなか理解できないらしかった。

リルニア王国とワレンハイトは不仲だが、考え方の相違はあっても結局のところ人種や

信仰は同じなのだ。それに比すれば、レグドル教国は人種も違えば信じる神も生活様式もまるで異なる未知の存在なのだ。そんな国と仲良くするという発想は、ランドール人にとっては困難なことだった。

数灯時も続いた話し合いは、結局のところ堂々巡りだった。どう論議したところで、情報信頼性はどれほどのものかというところで内容が腰砕けになってしまうのである。

ガイゼル国王はらちの開かぬ議論を一度中断させ、セシエの話が事実であるという前提で議論を続けようと進言した。異論を唱える者もあつたが、国王はその件に関して譲らなかつた。

方向性が定まると、議論の進行は円滑になった。話題はやがて、具体的な対抗策の検討に移った。

「ここは、リルンブルグに立てこもるのが上策でしょう」ある年老いた伯爵がそう切り出す。

「敵の部隊は八千、デルロイ伯爵の軍勢を足し合わせたところで九千。現在リルンブルグにいる将兵と騎士の数は予備役を合わせたとしてもたったの四千足らずですが、諸侯の騎士団が各地から集合すれば、敵戦力を遙かに上回ります。その戦力で籠城すれば、我々に敗北はありません」

評議員の間から、口々に同意の声が上がった。リルンブルグは強固な城壁に守られているから、戦力で上回ることができればこれほど心強いことはない。

賛成の意見が大勢を占める中、カンタレア地方のヴェルゲン男爵が突然立ち上がった。彼の先入観に縛られない型破りな作戦指揮には定評があり、若年の男爵ながらも軍内部での発言力は大きい。そんな彼の口からどのような言葉が発せられるのかと、皆、固唾を呑んで見守った。

「恐れながら、軍指揮官としての立場で発言させていただきます。その作戦には、賛成いたしかねます」彼はきっぱりと言った。

リルニア領内のレグドル軍残党狩りで英雄視されている彼の発言には、大きな意味があつた。手放して老伯爵の意見を賞賛していた者でさえ、その口をつぐんだ。室内は急に静まり返った。

「どういふことかね、男爵？」老伯爵は、嫌悪感をあらわにして尋ねる。動乱の世に建国して十余年というリルニア王国には、貴族の中にも武辺者が多い。老伯爵が若造の言葉に嫌悪感を示すのも仕方ないことだった。

ヴェルゲン男爵は老伯爵の態度を気にする様子も無く、先を続けた。

「伯爵閣下はリルニア平原の三王国の失敗をお忘れでしょうか？ レグドル教国に攻められて、リルニア平原の王国群がことごとく敗北を喫した原因の一つは、諸侯の騎士団の出し洩りです」

ヴェルゲンが持ち出した話は、リルニア王国の建国以前にリルニア平原にあつた三王国のことを指していた。諸侯の間で上手な連携が取れず、それぞれの領地ごとに個別にレグドル教国軍と戦つたために、三王国は結果的に滅んだ。

「あの時は平原各地が一斉に攻められ、各地の防衛が精一杯でとても王都防衛にまで騎士団を回せなかつた。だが、今回はあの時とは状況が違う。同じような騎士団の出し洩りは起こらん」

当時は騎士道の考え方が戦争の中心にあつたので、重装騎士同士のぶつかり合いが戦争の中心と考えられていた。

それに対し、レグドル教国軍は合理的な集団機動戦術を得意としており、騎士道前提の戦術ではまるで太刀打ちできなかったのである。緒戦での手痛い敗北からランドール人は多くの事を学び、現在は騎士個人の戦闘能力に依存しない集団戦法が実戦で導入されるようになった。騎士制度とは別に、軍制が整備されたのも、レグドル教国の侵攻が契機となっている。

「確かにあの時とは状況が違います。ですが、今回の作戦で敵が利用する中央街道は、平原各地への行軍には非常に便利が良い街道です。リルニア側のほぼすべての軍勢がリルンブルグに集結していることを敵が察知すれば、計画を変更して手薄になっている地域を攻めるかもしれません。」

……実際に敵が計画変更を考えているかどうかはともかくとしても、リルニア諸地域の領主は、敵の動向にそういった可能性を考慮するはずです。そうした場合、やはり全軍をリルンブルグに送るようなことはせず、領地にある程度の規模の守備部隊を残しておくのではありませんか？」

彼の言葉に、多くの評議員が気まずそうに目線を逸らした。評議会はリルニア王国の有力者の集まりであるから、当然ながらリルニア諸地域の領主の多くがこの評議会に参加している。彼らにしてみれば、ヴェルゲンの言葉は正確に的を射たものだった。誰しも、自分の領地を完全に無防備にして敵前にさらしたくは無いのだ。

それは、老伯爵としても同じだった。彼もきまりの悪そうな様子で少しだけうつむいたのがヴェルゲンにはわかった。

皆の反応をゆったりと見渡してから、カンタレアのヴェルゲンが再び口を開く。

「リルンブルグに集結するであろう戦力を、下方修正する必要が出てきましたな」

老伯爵はヴェルゲンを睨みつけて声を荒らげた。

「味方の騎士団の救援が減るのなら、リルンブルグ市民を街の防衛に駆り出せばよい！」彼は激しく長机を叩いた。その衝撃で、中央に置かれていた飾り気の無い花瓶が倒れてしまいそうな激しさがあった。

一方のヴェルゲンは、彼とは対照的に平静を保っていた。

「確かにそれならば、ある程度戦力の穴は埋められます。常識的に考えれば、デルロイ伯爵軍によって街の内側からリルンブルグを開門されるか、完全に包囲されて兵糧攻めをされない限りは問題無いでしょう」

男爵の言葉を聞き、老伯爵の口元に一瞬笑みが浮かんだ。デルロイ伯爵の内通はすでに発覚しているため、リルンブルグの内側から彼らに開門されてしまう心配は無い。それに、リルニア平原の真ん中で兵糧攻めを行なおうとしても、敵はまともに兵站線を維持できないだろうから、兵糧攻めに持ち込まれる心配も無さそうだった。

ヴェルゲンは自分の口ひげを指で軽く撫でつけ、再び口を開いた。

「ただし、その理論が通用するのは敵がランドール人の国の場合です。レグドル教国を敵とした場合、三王国滅亡の教訓からわかるように、今までの常識を基準に作戦案を組み上げるのは賢明とは言えません。」

連中は、戦争に手段を選びません。怪物や呪術をも軍事利用してしまうような恐ろしい

国です。リルンブルグが開門されずとも、また、兵糧攻めに持ち込まれずとも、我々が危機に陥る可能性は多分にあります。

…：想定できる事象の例を挙げれば、敵戦力に高等な魔術師や召喚師がいた場合です。リルンブルグの守りは通常兵科の攻撃に対しては十分な防御力を誇りますが、魔術師に火の玉を降らされたり、召喚師に召喚されたドラゴンに空から炎を吹かれたりしては、まるで対処のしようがありません。それに、そういった状況に陥れば、付け焼刃で防衛に動員されている市民たちは恐慌をきたしてしまうことでしょう。市民たちは混乱して逃げ惑い、彼らに阻害されて正規部隊もうまく機能しなくなる…：

さすがのリルンブルグも、そうなってしまえば陥落は時間の問題です」
評議員たちが再びざわめきあう。

老伯爵はその声が一瞬にして静まり返るほどの大声を張り上げた。

「黙れ！ それは万が一の可能性の話であろう！」彼は咳払いをし、少しだけ語気を和らげて続けた。「レグドル教国とランドール人の戦いの記録を紐解けば、そういった先例が無いわけではない。しかし、この平原での戦いに関して言えば、それほど大きな力を持った魔術師が参加していたという記録は無い。ドラゴンについても同様だ」

間髪を置かず、男爵が答える。

「今回がその一例目になる可能性は、否定できません」

ヴェルゲンのその言葉を、老伯爵は鼻で笑った。

「そんなものにいちいち怯えていれば、作戦など何一つともに実行できん。それでも貴様は将校か！」

ヴェルゲンは表情一つ変えないまま、それに答えた。

「最悪の状況を想定しておくのも将校の務めです。では、伯爵閣下のご指摘を尊重し、敵戦力に魔術師や召喚師のような特殊戦力が含まれない場合を考えてみましょう。」

攻城兵器をリルニア平原に持ち込んでいないレグドル教国軍は、リルンブルグに籠城する我々に対して短期決戦を挑むには、明らかに決定力不足です。となれば、包囲を完成させて、兵糧攻めでリルンブルグ攻略を狙う可能性が高いと考えられます」

老伯爵は再び鼻を鳴らした。

「兵糧攻めというのは、後方支援が十分に続くことを前提とした作戦だ。単独戦力でそんな作戦を行なえば、敵は平原の真ん中で孤立し、逆に窮地に立たされることになるだろう」
老伯爵のその言葉を半ば無視し、ヴェルゲンは王侯の席のほうに体を向けた。

「グレアム王子殿下、敵がそういった作戦に出た場合、リルンブルグはどれくらいの期間耐え切れますか？」

問いかけられたグレアムは、腕を組んで思考を巡らせる。内政の大部分を取り仕切っている彼は、そういったことに詳しい。皆は彼の回答を待った。

「ここは地下水には恵まれていないから水の確保は心配ない。問題は食料だな。ここ数年、我々は開墾推進政策によって農作物の租税割合を極限まで引き下げている。その影響で、国の倉庫には備蓄と呼べるほどの穀物はない。それにリルンブルグが即座に戦闘状態になるという事態は想定されていないから、乾燥豆や豚の腸詰などの保存食も十分な貯蔵が無い状態だ。市民全員を支えるならば、頑張ってもふた月だろうな」

ふた月というグレアムの言葉を聞いて、老伯爵の顔に笑みが戻る。老伯爵は胸を張って

発言した。

「それだけあれば十分ですな。敵はリルニア平原の真ん中では、まともに補給を受けることができません。籠城してしばらく様子をみていけば、そのうち敵は兵糧を失ってすぐごと撤退していくことでしょう」

周囲が再びどよめく。

『陰の影』のもたらした情報からわかる範囲で言えば、敵は連絡線や補給路を重要視している様子は無い。また、現状では複数の師団を運用しての大規模な軍事行動に出るつもりも無いようだったから、兵糧は補給に依存するのでなく必要な食料を師団自体が運搬していると考えるのが自然だった。携帯食料とはいっても、やはりそれなりにかさばるものだから、とてもじゃないが管理自営型の戦闘部隊が何か月分も自分たちの食料を持ち運ぶというのは現実的ではなかった。

老伯爵の発言も、そのことに拠っている。

彼の言葉を受け、ミリエル王女が発言を求めた。

「ちよっと待ってください。確かにケレンズ伯のおっしゃるように、レグドル教国の師団は単独で突出しすぎていて、後方からの補給は困難を極めるでしょう。ですが、我々の実施してきた開墾推進政策によって、逆にリルンブルグ周辺の農村の穀物庫にはある程度のゆとりがあります。ですから、敵は無理して本国からの補給路を維持して兵糧運搬せずとも、そういった村々から食料を略奪できるのではありませんか？」

日ごろから、農村に視察に行くことが多い王女は、農村の食糧備蓄状況がどれほどのものかということも、ある程度は把握していた。

「……となれば、敵が二ヶ月以内に撤退してくれるかどうかは運任せということになります。それに、農民たちへの被害も心配です」

女王の指摘に、老伯爵は言葉を詰まらせる。

「ドレアガンド大同盟が十分に機能していて、同盟国からの援軍が期待できるような状況なら話も変わってきますが、現状では籠城で敵を迎え撃つのは得策とは言えません」

冷静にヴェルゲンが止めを刺すと、老伯爵の顔はこの上ないほどに紅潮した。

その様子を見て、しばらく静観していたガイゼル国王がようやく口を開いた。

「男爵、もうそのあたりでよい」国王は老伯爵に視線を移す。「ケレンズ伯、貴公の案は素晴らしいが、少しばかり問題もはらんでいるようだ。ここは、レグドル討伐の勇たるヴェルゲン男爵の案も聞いてみようではないか」

皆の視線が、若き男爵のもとに注がれる。ヴェルゲン男爵は表情一つ変えずに言い放った。

「……野戦です」

ヴェルゲンが籠城を否定した時点で、皆、彼の答えは知っていたはずだった。だが、彼の口から実際にその言葉が発せられると、周囲はとたんにざわざわと騒がしくなった。

「馬鹿な。いくら地の利があるとは言え、こちらの戦力は予備役を含めても四千に満たないのだぞ。それが野戦で勝てるものか！」老伯爵は立ち上がって反論した。籠城での防衛戦闘と違って、野戦の場合は石の壁で守られているわけではないから大きな陣地阻止力は期待できない。となれば、やはり実地的な兵の数が大きくものを言うことになる。

「伯爵閣下のおっしゃるとおり、我々には地の利があります。それに、戦力差は大きいで

すが、敵は数押しを好む傾向があり、そこに我々の勝機があります」

「ガイゼル国王は興味深そうな反応を示し、先を促した。

「私は平原の北方、デルロイ伯爵の領地からは少し西方になりますが、彼の領地同様、山脈を挟んでレグドル教国と近接した地域を領有しております。そのため、我がカンタレアはレグドル教国軍がいつ攻めてきても対応できるように私設部隊を保有しております。

部隊の規模はそれほど大きなものではないですが、カンタレア地方の駿馬と、よく訓練された乗り手だけで構成された軽騎馬隊です。武装は長弓と戦斧を主兵装としており、機動力に重点を置いているので従者を従えておりません。そのため、彼らは機動力を生かした一撃離脱戦法を得意としております。相手が歩兵部隊ならば、ほぼノーリスクで大打撃を与えることができます」

ヴェルゲンは壁に掛けられたテンペラで描かれた地図のところまで足を運ぶと、カンタレア地方を指差した。

「私の部隊は今、ここにいます」

続いてヴェルゲン男爵は、リルンブルグから中央街道沿いを指でなぞった。

「リルンブルグの主戦力はこの街道を北上するわけですから、私の部隊が……」

彼は再びカンタレアを指差し、その指を中央街道へと移動させ、南下させる。

「……こう動けば、両軍でレグドル軍を挟撃できます」

オキレフ第一王子が口を開く。

「お前の話だと、その騎馬部隊は敵を引つ掻き回すには向いているようだが、敵を挟み討ちにして殲滅するのには向かないんじゃないか？」

数が少なく、装甲も薄い軽騎馬では、確かにその通りである。

「……ですから、挟撃で決戦に持ち込むものではありません。リルンブルグの主戦力は接敵後、決戦を避けて遅滞行動に移るのです。敵はリルンブルグの主戦力に阻まれて満足に進軍できず、かつ後方から軽騎馬隊によってじわじわと戦力を削られていくこととなります」

ヴェルゲンの言う遅滞行動というのは、総力戦を避けて、後退しながら敵の進軍を妨害して移動速度を鈍らせる作戦行動である。

今度はグレアム第二王子が口を開いた。

「……なるほど、それであえて背後には圧倒性の薄い軽騎馬隊を配するのだな。敵はその戦術でじわじわと被害を受けるうちに、後方への撤退を考えるだろう」

「ご明察です、殿下。敵を殲滅しようとするばこちらにも相応の被害を覚悟せねばなりません。それに、もし敵があきらめず強引に進軍を続け、リルンブルグまで辿り着いてしまったとしても、その頃にはもう満足にリルンブルグを包囲できるほどの兵力は残っていないはずです。こちらから決戦を仕掛けるのは、そうなる前からでも十分に間に合います。

また、さきほど挙げた例のように、もしも敵軍に魔術師などの特殊兵科が存在していた場合でも、遅滞行動をとっている分には籠城しているよりは大幅に被害を減らせます」

ガイゼル国王は大きくうなずいてから口を開いた。

「……なるほど、悪くない計画だ。ケレンズ伯はどう思うか？」

尋ねられ、老伯爵は頭を垂れる。

「軽騎馬隊が期待通りの活躍ができるとすれば、最良の策と存じます」

彼の声は呻き声に近かったが、もはや反論する気は無いらしかった。意地で自分の案を無理矢理貫き通そうとはせず、良策を受け入れるだけの冷静さと判断力があった。

国王は咳払いをした。

「皆に聞きたい。カンタレア男爵ヴェルゲンの提案よりも優れた策は無いか？ 無ければこの策の具体的な計画に話を移したいと思うが、どうか？」

しばらくの沈黙の後、どこからとも無く拍手が起こり、やがてそれが全体に伝播した。

「では、男爵の案を中心として作戦案をまとめよう」

議題が具体性を持ち始めたので、セシエは閉会までそう長くは続かないだろうと考えていたが、甘かった。結局、臨時評議会は『正午の鐘』を二灯時半も過ぎた頃までかかった。食事も休憩も無く長時間続けられたので、セシエは眠気と疲労のあまり倒れこんでしまいそうだったが、気力だけで何とか最後まで乗り切った。

評議會の間、彼女は発言を求められたとき以外、口を開くことは無かった。そして、口を開く機会を与えられた場合も情報の再確認が主で、特に自らの意見を述べる機会は無かった。彼女自身、養成施設で軍事の概論を学んだが、あくまで『陰の影』として活動するために知っておくべき知識としてだった。そこから状況を戦略的に判断して意見できるような教育は受けていないのである。

評議會が閉会すると、セシエは一目散に自室へと向かった。もう、立っているだけで精一杯だった。

自室には、王の約束どおり食事と水の張られた桶があった。給仕もここまで評議會が長く引くとは思っていなかったのか、すでに食事は冷めているようだった。

王の配慮は有り難かったが、今は空腹を満たすことや旅の汚れを落とすことよりも、ただただ満足な睡眠を体が欲していた。彼女は履物の革紐を解くことさえおっくうで、そのままベッドに倒れこんだ。

彼女はそのまま、丸一日眠り続けた。

*

*

*

リルンブルグ駐留の騎士団三百余騎、リルニア王国軍の長槍兵二千五百名、弩弓兵五百名、長弓兵二百名によって第一師団が編成されることとなった。その数は、リルニア王国軍の予備役も召集しての数である。数の不足を弩砲などの大型兵器でカバーしようという案も出されたが、機動性の問題から採用されることはなかった。

三千五百あまりの人員で構成された師団は、作戦提案者のヴェルゲンが采配を振るうこととなった。副将の人選も、彼自身が行なった。

評議會の後すぐに各方面に早馬が巡り、緊急召集がかけられた。レグドル教国軍との戦いに備えて可能な限り追加で人員を集めるのが目的である。師団のリルンブルグ出発までに集結できる部隊は集結し、出撃後も行軍途中で随時合流していく手筈で、敵と交戦するまでに師団の人員は四千五百程度にまで膨らんでいるだろうという見込みだった。

師団のリルンブルグ出発は例の臨時評議會が行なわれた日から数えて五日後で、発令から出陣までの期間がこれほど短いのは極めて異例のことである。

出陣までのあいだ、将校や王侯貴族は休む暇もなく作戦会議と情報収集に時間を費やし

た。騎士たちは自分の体重とさほど変わらない重装備の武器に体を慣らし、足並みをそろえた騎馬突撃の練習を繰り返した。王国軍は予備役の再教練と隊列維持・変更の各自の動作や情報伝達系の再確認に明け暮れた。従軍しない市民たちも不足分の武器や防具の製作に関わるか、あるいは軍事物資の調達や準備に追われていた。まさにリルンブルグの街が総動員されているという印象だった。

部隊はレグドル教国軍と正面から対峙する第一師団のほかに、小規模の師団が一つ編成された。こちらはデルロイ伯爵の部隊への対策として用意された第二の師団で、王国軍中隊五つから編成された五百名あまりの小規模なものである。

デルロイ伯爵の部隊はレグドル教国軍よりも規模が小さいため、多少道幅が狭かったり荒れていたりしても進軍に問題は無く、また、リルニア王国への救援を装っているためにレグドル教国軍とは別の目立たないルートからリルンブルグを目指すはずだった。

リルニア側が師団を二つに分けたのは、主力であるヴェルゲンの師団がレグドル教国軍と対峙したときに、デルロイ伯爵の部隊がヴェルゲンの師団に対して包囲機動をとると非常に危険だからである。たとえ数は少なくとも、決して侮ることはできない。敵と対峙しているときに側面や背面から攻撃を受ければ、ヴェルゲンの師団は致命的な被害を受けかねない。だからこそ、こちら側も小規模師団を用いてデルロイ伯爵の部隊の動きをけん制しなければならないのだ。

レグドル教国軍の部隊さえ崩してしまえば、デルロイ伯爵の部隊は孤立無援となる。攻める手段を失った伯爵は投降するか、あるいは自分の領地ワレンハイトへと逃げ帰るしか選択肢は無くなる。もし伯爵が逃げ帰ったとしても、レグドル教国に与した事実をリルニア王国が同盟議会に提出すれば、兵隊の血を流すことなく伯爵は政治的に追い詰められていくことになる。

第二師団の五百という数は、けん制の任務に支障が無いだけの切り詰めた人数である。人数に余裕を持たせて編成すれば、レグドル教国軍と正面から対峙するヴェルゲンの第一師団の人数を減らさなければならなくなる。そんな危険はとても冒せなかった。

ガイゼル・アルディエルド国王は、自らが第二師団を率いることを望んだ。デルロイ伯爵との怨恨の幕引きの場にガイゼル・アルディエルド自らが立ち会うのは当然とも言えることだった。

国王の身の危険を案じて評議員たちからは反対の声もいくつかあがったが、大半は理解を示した。ガイゼルは戦いの中でのし上がった人物であるから、やはり彼の本領は戦場なのである。彼は出撃中に生ずる自分の職務の穴を、軍務はオキレフに、内政はグレアムに託した。

第五章 出陣

出陣前夜、セシエは窓から見える夜の月を眺めていた。夜も国王の寝室で護衛に当たらなければならぬ日もあったが、今日は非番である。

彼女は今回の作戦で、国王に随行して第二師団に加わる予定になっていた。王直属の『陰の影』はセシエのほかにもいて、二名の同行が決まっていた。同行しない者たちは別の任務を遂行中だった。同行する二人の名はユーケリアとディアンドと言い、王に引き合わせられる以前にも養成施設で面識があった。ユーケリアは体術もさることながら知性と芸術的なセンスに溢れた女性であり、ディアンドは怪力と敏捷さを併せ持った巨漢である。

二人はセシエの先輩だったが、特に親しく会話した覚えはなかった。王に引き合わされて以後も、事務的なこと以外はそれほど多く言葉を交わしていない。『陰の影』は基本的に他人と親しくするのがタブーなのである。養成施設では、もしその禁忌を破った者がいれば想像を絶する非人間的な懲罰が課せられた。お互いの好き嫌いや、情によって作戦行動に支障が出てはならないからである。

(……今夜は冷える)

窓にはまった木戸を開け放っているので、部屋に夜風が流れ込んできて寒かった。彼女は木戸を締め切った真つ暗闇が嫌いだった。何か落ち着かない感じがするのだ。

それは村が焼けたあの日、父親に地下倉庫に閉じ込められた記憶が精神的なショックとして残っているからかもしれない。とはいえ、任務に支障が出るほど閉所と暗所にトラウマがあるわけではない。

小洒落た商家では、木戸の替わりに木枠をはめ、油塗り羊皮紙を木枠に貼り付けるのが流行している。木戸と同様に開け閉めができるから、風除けと採光ができて、かつ換気もできる優れたものということになるが、城内の館でその構造は失格である。もしも城が攻められた場合、厚い木戸を閉めればある程度の防衛効果が得られるが、木枠にしてしまったらそういうわけにはいかない。石造りの城や館も、骨組みは木造の場合が多い。もし窓から火矢が飛び込んできたりしたら、それが木の構造体に燃え移って、城が焼け落ちてしまう恐れだ。だから、原則的にリルンブルグ城でも『木枠に油羊皮紙』という加工は禁止されていた。もちろん、セシエはその禁を破るつもりはなかった。

厚みのある窓の縁に身を預け、窓から顔を出して空を見上げると、夜の空気は冷たく澄み渡っていた。半月の輪郭がハッキリと浮かび上がっている。

「明日も晴れてくれそうね」

雨の日の野営の辛さは訓練で知っていた。できれば作戦中は空がずっとご機嫌であってほしいと思う。

彼女はまったく眠気がやってこないことに痺れを切らし、とうとう外出することにした。眠れない日は彼女の場合、剣術の型を一通りこなすと自然と心がリラックスでき、眠りにつくことができるのだ。養成施設ではずっとそうしてきた。城ではまだ一度も睡眠のためにその手を使ったことはなかったが、確か城の屋内演習場は夜でも利用できたはずだった。今日はそこで少し汗を流そうと思う。

彼女は獅子と女性の図像が浮き彫りされたメダルを首から提げた。国王直属の『陰の影』だけが携行を許される特別なメダルである。これを持たずに夜の城内をうろろうとしてい

たら、不審人物として捕らえられかねない。

身を隠すと言うほどではなかったが、あまり目立たぬように注意しながら屋内演習場へ向かうと、そこには先客がいた。

細身の小型剣を振るう女性には、見覚えがあった。

「殿下……」

セシエの声に反応し、ミリエルは動作を止めて声のした方向——演習場の入り口を見る。

「あなたは……確かセシエね？　こんな夜遅くにどうしたの？」

彼女は鞆に剣を納めながら尋ねた。

「いえ、少し稽古で汗を流したいと思ひまして。……良い剣をお持ちなのですね」

セシエは寝つけないからとはさすがに言えなかったので、やんわりと話題を変えた。王女の剣はいたってシンプルなものだった。それは、彼女が自分の剣に装飾的意味を求めていないことを示していた。その点は、こんな時間に一人で剣の稽古をしていることから窺い知れる。

ミリエルは帯剣のベルトの位置を直しながら、にこりと微笑んだ。

「変な剣でしょ？　以前はもつと見栄えのいい細剣レイブを使ってたんだけど、護拳と鏢の飾りが指にこすれて痛かったから、私のアイデアを多分に盛り込んで新しくしつらえてもらったの」

そう言つて、彼女は再び鞆から剣を抜き払う。乾いた鞆鳴りの音で、その剣の金属の硬さが実戦的なものと察しがつく。

「細剣で突いたら、鎧の相手だと剣が折れちゃうって聞いたから、刀身を厚くしてもらつたの。そしたら、剣が重くなりすぎてまともに振るえなかったから、長さも短くしてもらつたのよ。そうしたらこんな変テコな剣になっちゃつたの」

彼女はおどけて舌を出して笑つてみせた。

「ねえセシエ、汗を流したいって言つていたわよね？　せっかくこんな場所で会つたんだし、ひと勝負お願いできないかしら」

王女の提案に驚き、セシエは言葉に詰まった。

「し、しかし、殿下に万が一のことがあつては……」

あまりの狼狽ぶりに、ミリエル王女は声を立ててケラケラと笑つた。

「大丈夫だよお。私、もし怪我したつて父上に泣きついたりしないもん。それに、そう簡単に負けたりはしないわよ」

そう言つて、ヒュンヒュンと素振りをしてみせる。なるほど、確かに足捌きや腰の乗り方から見れば、我流というわけでも、昨日今日で覚えた手並みというわけでも無さそうだった。幼い頃から教師をつけ、剣術の訓練を受けているのかもしれない。

「……ですが」

「まともに剣を振るえる女の人が、私の知り合ひにはいないの。街に行つたときに女の傭兵さんに会つたことはあるけど、剣を交えるような機会は得られなかったわ。女の人がどこまで強くなれるものなのか、私は知りたいのよ。お願い、一戦だけでいいの！」

セシエは深々とため息をついた。どうやら、口で言つてあきらめてもらえるような相手ではないらしい。不本意ではあつたが、体でわかつてもらうしか無さそうだった。

「わかりました。では一戦だけお手合わせいたしましょう」

その言葉を聞いて、ミリエル王女は飛び上がった喜んで。

「ただし、私は真剣をえません」

そう言いながら、セシエは入り口付近の木箱に乱雑に納められたビワ材の木製剣を一本引き抜いた。木製剣といえども実戦同様の練習ができるよう、重量は金属長剣に近づけてある。

「そう？ でも、私は木剣が折れないよう手加減できるほど器用じゃ無いからね？」

そう言っつて、ミリエルは姿勢を落として戦いの構えを見せた。もちろん、手にしているのは先ほどの剣だ。自分も木製の剣を使おうという気は毛頭無いらしい。あるいは、彼女の剣の師がそう指導しているのかもしれない。実戦で練習の成果を発揮するためには、やはり練習のときから実戦用の武器に馴れておいたほうが良いのだ。

「お構いなく。私も儀礼的な剣術は心得ておりませんので」

セシエはそう言いながら、一步一步、演習場の中へと静かに歩みを進めていく。

ミリエルは喉をゴクリと鳴らして、剣の柄を握りなおした。

『陰の影』の女は王女と三歩測ほどの距離まで近づいたところで、初めてビワの剣を構えた。右手の剣を胸元の高さまで持ち上げて、柄頭に左手を添える。そこからは細かなすり足を使って、一足一刀の間合いまで距離を詰める。『陰の影』の女はその場で静止した。彼女が動きを止めると、まるで精巧な彫像のようであった。

王女は汗でじっとり濡れた手で何度もグリッブを確認した。動かない相手に大きな突きを繰り出すのは懸命ではない。ここはフェイントで相手の出方をうかがうのが懸命だ。彼女は声を張りあげ、一歩踏み込んだ。そして、その踏み込みから想像される突きよりも幾分も短く素早い突きを胴に向けて放った。セシエは両手を巧みに使って剣を瞬く間に翻し、王女の剣を払った。大きな突きを出していたら、体勢を崩していてもおかしくないような見事な受け流しだった。

セシエは受け流しからの切り返しの動作で攻撃に出た。虚を突かれた王女は半歩足を下げ、鏢でそれを受け止めるのがやっとだった。セシエは自分の剣を王女の剣と打ち合わせたままその上を滑らせて、剣の鏢同士をぶつけ合わせた。王女は剣の圧迫を支えるのがやっとで、とても突き放すことができない。

セシエは呼吸を置かず、鏢同士を競り合わせたまま剣の角度を少し変えて、柄頭に置いた左手の腹に力を強く加えた。ビワの剣は王女の剣を絡めたまま、刀身だけが角度を変えて王女のわき腹に襲いかかった。ミリエルは相手の剣を支えていて動かせない剣では防衛のしようが無く、無理な体勢から飛びすさるうともがいた。案の定、軸足のバランスを崩して王女は尻餅をつく。

圧倒的不利な状態から何とか立て直そうとしてみたが、すでにミリエル王女の眼前には刃の無いビワの剣の切っ先が突きつけられていた。

ミリエルは王女らしからぬ悪態をつけて、手にした剣を投げ捨てた。その剣の金属音が、二人だけの演習場の壁面に虚しく反響した。

「勝負あります、殿下」

セシエは剣を下ろして左手に持ち替え、王女を引き起こすために右手を彼女の前に差し伸べる。

「悔しいけれど、そのようね」

荒い息のミリエルは微笑んで答え、彼女の手を掴み返した。

*

*

*

セシエが一通り満足するまでの間、ミリエルは演習場の隅にちよこんと座って黙って彼女の動作に見入っていた。

セシエは型の最後の一振りを終えて剣を収めると、大きく息を吐き出した。静かな演習場に、王女の拍手が鳴り響いた。

「動きにキレがあるわ。私では遠く及ばない感じね」

セシエは額の汗を拭い、呼吸を整えてから尋ねた。

「殿下は、なぜ剣術にこれほど興味を持たれているのです？ 失礼ながら、高貴なご婦人がたは刺繍や詩歌でお遊びになられるものとはかり思っております」

ミリエルは屈託無くケラケラと笑った。

「普通はそうだよ、私は変わり者なんだよ、きつと。」

セシエは知っているとと思うけど、ガイゼルお父様のご正室は、グレラム兄様をお産みになられた後、レグドル教国軍との戦いに巻き込まれてお亡くなりになられたわ。

……私は妾腹の子なの。それに、物心ついたときにはガイゼルお父様に育てられていたから、母上のことは何も知らないのよ。それに、乳母はあくまで仕事として私に接したし、それほど懇意な間柄にはなれなかった。

だから、私の遊び相手はもっぱら殿方ばかりだったの。オキレフ兄様には狩りやいたずらを教え込まれたし、グレラム兄様は面白い物語を読んで聞かせてくれたわ。オルソンには馬の乗り方や剣の扱い方を教えてもらったわね」

「オルソン？」

セシエは、その名をどこかで聞いたことがあるような気がした。だから、思わず問い返してしまったのである。

「ああ。軍部の指導教官で、私の教育係も務めているコワイお爺さん。昔はお父様やお父様のお父様と戦場を駆け回っていたらしくて、たまに昔話を聞かせてくれたりもするのよ」

二十年前、焼け落ちる村でガイゼルに付き従っていた隊長の名が、確かオルソンだったとセシエは思い起こす。厳しい表情を浮かべていた印象はあるが、顔立ちはおぼろげだった。彼女は懸命に記憶を辿ろうとした。

「セシエ？」

ふと気付くと、ミリエル王女が不思議そうな顔でセシエのほうを覗き込んでいた。

「あ、いえ。なんでもありません」

その反応に、ミリエルは肩をすくめた。

「ねえねえ、ここに座りなよ」王女が自分の座っている場所のすぐ横を手で叩いて、セシエに促した。

セシエは戸惑いながらも言われるままにその場所に座り、ミリエル王女のほうを見た。

彼女の顔はすぐそばにあり、輝いた翡翠の瞳が『陰の影』を見つめていた。

「ねえ、私、もっとセシエみたいに強くなれるかなあ？」

それほど厚みの無い、健康的な桃色をした唇が動く。

「お世辞ではなく、殿下はいい筋をしておられます。鍛錬と経験を積み、男性に引けをとらないだけの実力を得られると思います」ミリエルはそのほめ言葉を素直に喜ぶ。そんな王女に、セシエは質問を投げかけてみた。「殿下はなぜ強くなりたいのですか？」

ほめ言葉に浮かれていた姫君は、そう質問されて、少し真剣な表情を見せた。そして、少し考えてから言葉を口に出した。

「私ね、戦争を終わらせたいの」

王女が端的にそう言ったので、セシエは一瞬ぎよつとしたようだった。その様子に気付いた少女は、思わず苦笑してしまった。彼女は咳払いをしてから、口を尖らせて言った。

「別に、剣で敵をねじ伏せて戦争を終わらせようなんてつもりで言ったんじゃないんだからね！」

そして、少し語気を和らげる。

「お城の中や、街、牢獄、そして外交団に加わって向かった先の国々でも、私は多くの人と話したわ。その中で、私は気付いたの。世の中にはいろいろな人がいる。親切な人、面白い人、短気な人、気難しい人……みんな、長所もあって短所もある。どこかに善い部分を持っているし、どこかに悪い部分も持っている。

それはきつと、レグドル教国の人たちも同じなんだと思う。

でも、彼らは言葉も生活様式も私たちとはまるで違う。……だから私たち、そして彼らは今、そのお互いの違いに戸惑っているのよ。赤ちゃんの人見知りみたいなものなんだと思うわ。

だから私は、レグドル教国の人たちともしつかりとお話をして、彼らのことを理解したい。そして、ランドールの人たちのことを彼らに伝えたい。そして、彼らが本当はどんな人たちなのかを私たちも知るべきだと思うの。お互いがお互いをわかりあうことができれば、この戦争はきつと終わらせることができるはずなのよ」

熱弁を終えてもセシエが黙っていたので、ミリエルは恥ずかしそうに付け足した。

「世間知らずなお姫さまのたわごとだよね。目の前に迫った危機に対して、手をこまねいて見ているだけの私が言うような台詞じゃないわ」

セシエは真顔だった。

「そんなことは無いと思います。私は幼い頃から施設で教育を受け、レグドル教国の人間はまるで鬼畜生のような存在であると教え込まれました。だから、そのようなことは考えつきさえしませんでした。……大変ご立派なお考えだと思います」

ようやく口を開いたセシエの言葉を受けて、王女は頭を掻いた。

「そうだといいんだけどね」はにかみながら答え、王女はなぜ強くなりたいかという理由をちゃんと話していないことを思い出す。

「私はこの世界を希望ある世界に変えたい。だから私は強くなりたい。負けないだけの強さが欲しい。……口先だけの理想なら、負け犬の遠吠えと同じだから」

セシエは二度、三度と大きくうなずいた。

「……国王陛下もさぞ殿下のことを頼もしくお思いでしょう」

ミリエル王女は微かに口元を綻ばせた。

「だったら嬉しいな」

不意に、二人だけの屋内演習場に何者かの足音が鳴り響いた。二人は同時に入り口のほ

うを見やった。

がっしりした体格の、背の低い白髪老人がこちらに向かって歩いてきているところだった。こそこそする様子が無いところを見ると、どうやら不審者では無いらしい。

「姫さま！」

二人の姿を見るや否や、老人はそう叫んだ。彼は足を早めて二人のもとへと急ぐ。

「うげ、オルソン！」

ミリエルがそう漏らしたので、セシエは老人の顔をまじまじと見つめた。浅黒い顔に刻まれた皺が深くはなつてはいたが、二十年前に見たオルソン隊長その人だった。

「姫さま、また就寝時間後に部屋を抜け出しましたな！」

オルソンは二人の前まで来て怒鳴りつけた。そして、ギロリとセシエのほうを一瞥した。

「この者に誘われたのですか？」

屈強そうな老人は再び視線を王女のほうに戻し、口荒に尋ねる。

「違う、セシエは関係ないよ。たまたまここで会っただけ……」

老人はいきなりグイと乱暴にミリエルの腕を掴んだ。セシエは驚いたが、老人の暴挙を放置できずに割って入ろうとする。

「いいの、セシエ」

王女は自由なほうの手で『陰の影』を制した。

「しかし……」

王女は軽くウインクして見せ、片笑みを浮かべた。

「いつものことよ。私が言いつけを守らないのがいけないの」

そう口にする彼女は、老人に引っ張られてよろよろと立ち上がる。

オルソンは感情の読み取れない目で『陰の影』をまじまじと見た。セシエは怪訝な色を帯びた目でオルソンを睨み返す。

白髪の老人はフンとひとつ鼻を鳴らすと、踵を返した。

「行きますぞ！」

半分引きずられるように、王女は演習場の出入り口へと向かう。部屋を出るときに彼女は扉の縁に掴まって振り返った。

「ねえ、セシエ！ 私はまだ無力なの。今回の出陣でも、私は何の力にもなれない。だからお願い、セシエ。……お父様を守って！」

切望する声が、演習場内に響き渡った。セシエは王女に対して最敬礼を取ること、自分の意志を彼女に伝えた。

「絶対だよッ！」

王女の残した最後の一声が広い室内に共鳴し、そして、静寂が戻った。

*

*

*

翌日の未明、簡略な出陣式を執り行って、ヴェルゲン男爵の率いる第一師団、ならびにガイゼル国王自らが率いる第二師団がリルンブルグを後にした。簡略な出陣式とはいえ、要人のほとんどが出席する正式なものだった。国王自らが出陣するのだから当然といえば当然だった。出席者の中にはミリエル王女やオルソンの姿もあったが、セシエが言葉を交

わず機会はなかった。

今回の作戦では、国王付きの『陰の影』三人が第二師団に加わっていた。三人の役目は国王の護衛のほか、状況に応じて偵察などに駆り出されることになっている。

二つの師団は中央街道を北上し、三日間行動をとりにした。対抗策が練られた臨時評議会の日から毎日、定期的に敵情視察のための斥候が放たれており、デルロイ伯爵軍およびレグドル教国軍のおおよその状況は把握していた。斥候によって繰り返し持ち帰られる敵の情報は、規模・進軍ルートともに当初の予想と一致していた。

敵に想定外の動きが見られないため、第二師団は中央街道沿いでレグドル教国軍と接敵する予定の第一師団に別れを告げ、サン・ルブラール山脈を抜けるわき道へと進路をとった。

サン・ルブラール山脈は中央平原東部にI字型に横たわっており、中央街道はその山脈の西側を縦に走っている。つまり第一師団はサン・ルブラール山脈を右手に見ながら北上していくことになる。

一方の第二師団は、山脈のI字のちょうど屈折点に当たる部分を越えて山の東側に移動し、そこから北上する進路だ。

サン・ルブラール山脈を越えずに平野部を東に大きく迂回して抜ける案も考えられたが、所要時間が大幅に伸びる点を考慮して不採用となった。また、迂回ルート移動中に何らかの不慮の出来事によって行軍ペースが落ちてしまった場合、その間に敵がサン・ルブラール山道を抜けるルートを通って、第二師団とぶつからないまま突破されてしまう可能性も考えられるのである。そうなってしまうたら、第二師団の存在意義は全く無くなってしまうことになる。

逆に山道ルートを進みさえすれば、何らかの理由で行軍ペースが落ちてしまったとしても、迂回ルートを選んだときのような問題に悩まされる心配は無さそうだった。なぜなら、敵が迂回ルートを進んでも、こちらは山道を引き返せば十分に先回りできるからである。それにもしも敵が迂回ルートで無く山道ルートを進んで両軍が山中で遭遇することになったとしても、山間の隘路で遅滞行動を取ればそれほど被害を出さずに済むはずだし、隘路を先に抜けてしまえば、広い場所に部隊を展開できる分、こちらが俄然有利に戦えることになる。

もちろんそれは、行軍に何らかの障害が出たときの事であって、計画通りに進めば二日で山間の道を抜け、さらに北に二日進んだところの低木地帯に陣を張り、正面の障害物の無い平原に敵軍を布陣させる予定であった。

第二師団はその場所で低木を有効利用した防御陣を組み、前面に長弓部隊を並べて矢で平原の敵を狙い撃ちにして数を減らし、隊伍を乱して切り込んだ敵を歩兵部隊が冷静に迎え撃つ手筈だった。そうすれば戦力差は十分にカバーでき、被害も最小限に止められるのである。

ところが、作戦計画というものはどれだけ綿密に練られたものであっても、完全に予定通りに進むことはまずない。第二師団にとって想定外だったのは、山道に入ってから一日目の夜のキャンプで降り始めた、水桶をひっくり返したような大雨だった。

その雨は翌々日の朝まで断続的に降り続くことになった。この近辺で、こんな激しい雨が降るのは極めて稀なことで、数年ぶりのことである。その雨が狙ったようにこの時期に

重なったのは、不運としか言いようがなかった。

第二師団は結局、その雨の影響で山道を抜けるのに予定よりも二日も長い四日の期間を要してしまった。雨の間はほとんど身動きが取れず、雨が止んだ後もぬかるんだ道が師団の行軍を阻んだからである。

雨の影響は行軍の遅れだけではなく、ただでさえ足場の悪い山道を、悪天候の中で進んだため、足をとられて軽症を負う者が続出したのである。また、急な雨に体温を奪われて体調を崩す者も多かった。山道の行軍で死者こそ出さなかったものの、そういった悲惨な状況に師団全体が意気消沈し、陰鬱な空気が彼らを支配していた。

雨による第二師団の影響をよそに、デルロイ伯爵軍はほとんどペースを落とすことなく進み続けているようだった。斥候の話からすれば、平地を進軍している敵には大雨もさほど被害をもたらさなかったという。

敵が健全な状態で進軍を続けているという報告によって、ガイゼル国王と作戦参謀たちは今後の作戦行動の変更を余儀なくされた。なぜなら、今回の遅れによって、二日進んだ先の低木地帯への到着が、敵のその地点の通過に間に合わない可能性が大きかったからだ。計算は計算でしかないと実際には間に合うのかもしれないが、予定していた低木地帯まではほとんど障害物の無い平地が続くから、中途半端な場所で敵と遭遇してしまったり、こちら側が壊滅的な打撃を受けてしまう危険があった。そんな無茶を承知で進軍するわけにはいかなかった。

それで一度は山間ルートで行軍障害が出たときの案を採用することに決まった。すでに山道は抜けてしまっているが、あえて山道に引き返し、敵が山道ルートを選べばこちらは遅滞行動に移る。もしも敵が迂回ルートを選んだら、山道ルートを抜けて先回りするとう、例の案である。

しかし、理屈ではその計画が理想的だと思えても、病気や怪我の災難に見舞われた山道に引き返すことに、積極的態度を示す者は誰一人としていなかった。そんな折、朗報をもたらしたのは『陰の影』ユークリアだった。彼女はちょうど、国王のテントで作戦会議が行なわれている最中に斥候の任務を終えて国王のもとに報告に来たのだった。

敵情に関しては目新しい情報はなかったが、彼女の報告によれば、進軍ルート上にあるイセール川が雨の影響によってかなり増水しているというのだ。上流の地形から考えれば、数日は水位が下がらないだろうというのが彼女の見解だった。

イセール川はサン・ブルラール山脈北部に水源を持つ穏やかな川で、水深もかなり浅い。場所を選ばず安全に渡河できる程度の水量しかないイセール川は、戦略上の緊要地形とはなりえない小さな川だった。それが今では雨の影響で増水して川幅が大きく広がり、水かさが増したために、渡河できる地点はごくごく限られたポイントだけとなっているのだ。しかもそのポイントにしても、水に慣れていない者ならば足をすくわれて溺れてしまいかねないほどの危険な状態であるという。

リルニア軍第二師団を苦しめた雨が、今度は彼らに味方したようだった。国王は不敵な笑みを浮かべながら参謀連中を見渡した。彼らも皆、考えていることは同じようだった。

「イセール川を正面に据え、陣を張るぞ」

国王は絶対の自信を持って、そう宣言した。

*

*

*

リルンブルグの市壁の外は、まるで難民キャンプのような様相を呈していた。薄汚い天幕や毛布が雑然と並び、各所からは焚き火の煙が立ち上っている。

しかしそれは、難民キャンプではなかった。そこにいる多くが屈強そうな戦士たちだった。ゴロツキと呼ぶのがふさわしいような粗暴な者たちがたむろするその付近一帯は、殺伐とした空気に包まれていた。

汚らしい身なりの戦士たちは防具と呼ぶにはあまりにもお粗末な装備で身を包み、武器にも全く統一性がみられなかった。彼らは軍属ではない。

そんな彼らを市壁の上から見下ろしているのは、リルニア王国の幹部たちである。

「お前は思う？」

その中の一人、オキレフ第一王子が隣にいたミリエル王女に興味深げに尋ねる。どういったタイプの人間とも分け隔て無く接する事で有名なミリエル王女でも、中庭に集まったゴロツキたちにはさすがに面食らっているようだった。

そんな彼女に代わって口を開いたのは、第二王子のグレアムである。

「私はやはり賛成できません。このような連中を正規軍部隊の援軍に派遣したのでは、リルニアは各国の笑いものとなりましょう」

オキレフはグレアムの頭をぼかりと殴り、彼の言葉を一笑に付した。

「確かにお前の言うとおりの、国の存亡をかけるような戦いで傭兵に頼るなんて、バカみてえな話だ。……だがな、恥を掻いてでも勝率を上げられるなら、俺は誇りを守って死ぬよりも、迷わず勝率を上げるほうを選ぶぜ」

中庭に集まった傭兵たちの数は、数千に達していた。傭兵募集の通達を各地に発したのは、他ならぬオキレフだった。

彼は敵の動きをセシエがリルンブルグにもたらしたその日のうちに、各地へ通達を發したのである。そんな彼自身も、呼びかけに呼応した傭兵たちがこれほどたくさん集まるとは予想もしていなかった。

「これだけ数がいりゃあ、レグドルの豚どもに一泡吹かせてやれるぜ」

意気込むオキレフに、弟のグレアムが水をさす。

「このような烏合の衆、戦場に到達するまでに自然崩壊してしまっても不思議ではありません」

「わかっただらあ、だから俺が直々に傭兵部隊の指揮を執るって言ってんじやねえかよ」

そう言って、オキレフはもう一発グレアムの頭を張る。もちろん軽く当てる程度なのだが、それでもグレアムは叩かれるたびにあからさまに不快そうな顔をする。そんな二人の間にミリエルが割ってはいるのは、ごく日常の光景である。

「グレアム兄さんはオキレフ兄さんの事を心配して言ってるのよ。オキレフ兄さんもその点は理解してあげてよ！」

妹がぶーっと顔を膨らませたので、オキレフは片手をひらひらと振って『わかった』の合図を示した。あまり真面目に取り合っているような印象は無い。とはいっても、彼のそういう態度もいつものことである。

「……さきほど参戦志願者のリストを拝見しましたが、個人契約の傭兵はともかくとして

も、『黒鉄槌』と『疾風の虎』というそれなりに信頼性のある二つの傭兵団が名を連ねておりましたぞ」

三人のやり取りをそれほど気にする様子も見せず、幹部連中の後方に控えていたオルソン爺が口を開いた。

「彼らなら、きっと金額に見合うだけの仕事をこなしてくれるはずじゃて」

オルソン爺の言葉に、オキレフは大きくうなづく。オルソンという老人を、彼の地位や階級で判断すればちっぽけな存在でしかない。というのは、彼は有力な貴族でもなければ將軍でも無いからである。そんなオルソンの言葉にオキレフが嬉しそうにうなずいたのは、それなりに意味があった。

今でこそ貴族の地位も軍の階級も有さないオルソンではあるが、彼は若い頃にガイゼル・アルデイエルドの右腕としてリルニアの失地回復に尽力した人物なのである。貢献度からみれば高い爵位を授かっていてもおかしくはないほどの大人物であるし、当時は軍部においてほぼ最高の地位にあり、個人の武芸も一軍の將としての手腕も一級品だったと言われている。

最近王国に頼まれて城や軍の仕事、評議員などを引き受けてはいるものの、地位や名声、それに伴う報酬などはすべて彼自身が辞退しているのだった。

世間の噂によれば、彼が地位や名誉を授かるのを辞退するのは『面倒ごと』が性に合わないからとか、『成り上がり者』と呼ばれることを拒絶しているからとか、様々な説が囁かれていた。もちろん事実は今なお謎のままである。

とかくそういった事情があるから、リルニアの有力者たちの中には彼の事を粗野に扱う者はなかったし、軍事面に関しての彼の言動には將軍や上流貴族の発言に匹敵するほどの影響力があった。

そんなオルソンが太鼓判を押してくれたおかげで、オキレフも得意げな表情と余裕を取り戻していた。口では大きなことを言っているけど、やはりオキレフ自身も本当は傭兵に頼ることには少し抵抗を感じていたらしい。オルソンの言葉で、その感覚は払拭されたようだった。

「俺たちの力で、レグドル教国もデルロイ伯爵もひねり潰してやるぜ。待っているよ！」

*

*

*

中央街道を北上していたリルニア王国第一師団の司令部に、大きな動揺が走った。レグドル教国軍の八千の戦力が目前に迫っている状況で、駆けつけた増援を含めても五千に満たないリルニア王国第一師団から、師団長であるヴェルゲン男爵の姿が忽然と消えたのである。置き手紙など彼の足取りを示すものは何も残されておらず、天幕の中には争ったような痕跡すら無かった。敵前逃亡するような頼りない将校ではないし、彼が突然蒸発した原因は誰にもわからなかった。

だが、第一師団には人を割いてヴェルゲンを搜索するような時間的余裕はなかった。それどころか、軍を後退させる猶予すら残されていないような状況だった。もう一日と離れていない距離に敵軍が迫ってきているのだから当然である。もしも後退を試みようものなら、敵の激しい追撃に遭うのは目に見えていた。

千人長級の隊長たちは、総司令不在のまま作戦会議を開いた。

会議では様々な対策案が飛び交ったが、結局のところ数で劣るリルニア軍は野戦で敵に正攻法で挑むわけにはいかなかった。

ヴェルゲン男爵が不在であったが、結局は再三にわたって彼が話していた彼の軽騎馬隊との共同作戦を採るのが最善の策だという結論に達する。カンタレアを発した軽騎馬隊との連絡線は現在も維持されており、彼らが順調な足取りであることは不幸中の幸いであった。

翌日、第一師団は敵の軍勢と対峙することとなった。ヴェルゲンの軽騎馬隊とやり取りした最後の伝令も、すでに軽騎馬隊が敵へ攻撃可能な位置にあると伝えている。総司令官不在の第一師団に、もはや混乱は無かった。彼らの採るべき戦術は、カンタレアの軽騎馬隊が自由に暴れられるよう遅滞行動をとることである。

レグドル教国軍がリルニア王国軍第一師団の最終警告を突き返し、いよいよ戦いの緊張が両軍を包み込んだ。

戦いの火蓋は、レグドル教国軍の突撃を告げる銅鑼の音によって切って落とされた。彼らが第一波として差し向けた突撃部隊は、ダオルグという生き物たちであった。

ダオルグは矮小な体躯で、土気色をした表皮が不気味な人型の生物である。ひしゃげた鼻と細く尖った目が印象的で、たいそう醜い顔をしていた。もともと大陸の東端あたりに棲息する生き物らしいのだが、レグドル教国が戦争にダオルグたちを尖兵として好んで用いた結果、落ちのびたダオルグがランドール人たちの土地にも隠れて住み着いた。

森や洞窟に住んで近隣の農村を荒らし、家畜を略奪するダオルグは、ランドール人にとっては害虫同然だった。リルニア平原に残っていたダオルグは軍部の努力によってかなり数が減っていたのだが、レグドル教国はまた新たに連中をこの土地に連れ込んだのである。戦いに勝とうが負けようが、またしてもリルニア平原全土はダオルグの被害に苦しめられることになるだろう。

ダオルグはランドール人より知能も力も劣っているため、正面からぶつかってもさほど苦戦するような敵ではない。だが、ダオルグの殲滅に夢中になるあまり隊列を崩してしまっただけでは、それこそ敵の思う壺である。第一師団の千人長たちもそのことを十分に理解していた。彼らはダオルグたちを皆殺しにしてやりたい気持ち抑え、彼らは密集方陣を崩さなかった。

ダオルグたちの真後ろには、レグドル教国の長弓部隊が控えていた。レグドル教国軍兵士が使う弓はグリップから上に伸びるリブが下方のリブに比べて長い特殊な形状をしており、材料もこの付近ではお目にかかれない特殊な木を用いたものだった。その弓は飛距離でリルニア王国の一般的な単弓に勝っており、脅威であると言えた。もしもリルニアの軍勢がダオルグとの戦いに気を取られていたら、長弓部隊が放った矢の雨で大きな被害を受けていたかもしれない。

リルニア軍は冷静に遅滞行動を維持した。だが、ヴェルゲンの騎馬隊はいつまで待っても現れる気配がなかった。敵後方を彼らが攻撃してくれなければ、敵の注意はすべてリルニア軍に向けられることとなる。

さすがのリルニア軍も、ダオルグの執拗な攻撃と何度も降り注ぐ矢の雨で徐々に兵力を削られていった。

命の危険を感じた一人兵士が隊列を離れて後方に駆け出すと、あとはもうどうしようもなかった。他の兵士たちが逃げ出す男の姿を目にし、我も我もと多くの者が競って後方へと駆け出したのである。彼らを取りまとめる千人長たちは怒声を張り上げて彼らを制止しようとしたが、耳を貸すものは誰一人としていなかった。一部のほころびがやがて全体に広がり、第一師団の隊列は瞬く間に崩壊していった。彼らはもはや軍隊では無くなっていた。

彼らは転んだ仲間をお構いなく踏み越え、踏まれた者は起き上がる間もなく何度も何度も踏まれて命を落とす。将棋倒しのように折り重なるように転倒して、押しつぶされて圧死する者も多かった。数千の人間が狂乱して逃げ惑う様子は、まるで地獄絵図であった。

街道沿いを引き返して逃げゆく彼らの前に、馬に乗った一団が立ちふさがる。戦闘用の装備に身を固めており、彼らは道幅いっぱい横隊を組んでいた。彼らの掲げる旗はカンタレアのものだった。

その隊の中央で黒馬にまたがっていたのは、紛れもなくリルニア王国軍第一師団の総司令、ヴェルゲン男爵であった。彼は密かに第一師団を離脱した後、自分の軽騎馬部隊との合流を果たしていたのである。そして彼は自ら軽騎馬部隊を率い、第一師団の背後に回り込んだのである。

彼はゆっくと腰の剣を引き抜いて天に掲げた。よく研ぎ澄まされた鋼鉄の剣の切っ先が、不気味にギラリと光った。

*

*

*

デルロイ伯爵はイライラとした様子で貧乏ゆすりをしながら、一気に酒瓶をあおった。「伯爵、深酒はお体に障りますよ」

テントの入り口の垂れ幕を払って中へと入ってきたのはデボラだった。彼女はあの日以来、淫蕩そうなおぶりはぱったりとやめてしまっていた。

今となつては、デルロイはこの女の事が憎々しくて仕方が無かった。すでに、当初聞かされていた計画は破綻しているはずなのに、デボラは少しも慌てた様子を見せず、自信あがりな訳知り顔で、いつも静かにたたずんでいる。

「リルニア軍のこういつた対応も君たちの筋書き通りかね？」

デルロイはアルコールが回って焦点の定まらない目で女を睨み、机の上の書状を拳で叩いた。リルニア王国の使者が持参したガイゼル・アルディエルドの署名入りの文書である。

その文書には、救援部隊としてデルロイ伯爵の部隊を受け入れるつもりが無いということが明記されていた。ワレンハイトとレグドル教国との関係を指摘するようなくだりこそ書かれていなかったものの、これ以上軍を進めれば領土侵犯として断固たる処置に出るという穏やかならぬ表現があった。リルニア側は、デルロイの軍の即時撤退を求めている。

これはすでに、デルロイがデボラに示された『筋書き』とは大きく異なる事態である。「もちろん、こうしたリルニアの反応も想定内ですわ。敵の注意を少なからずこちらに向けることができましたのですから、むしろ評価されて然るべきことだと認識しています」

デボラは毅然たる態度で答え、それがかえってデルロイの神経を逆撫でした。彼は足を載せていた折りたたみ式のフットレストを強かに蹴り飛ばして立ち上がり、手にした酒瓶

を地面に投げつけて叩き割った。

「イセール川を挟んで睨み合いを続け、もう二日だ。敵は動く気配を見せず。我々も身動きを取れないでいる。我々は連中にまんまと足止めされているわけだ。この状況を貴様は評価しろと言うのか？」

伯爵軍がイセール川に到達した時、デルロイ伯爵は川の状況と対岸のリルニア軍の陣容を見て、思わず二の足を踏んでしまった。もしこんな川を渡ろうとすれば、川に足を取られている間に敵の矢の雨を受けて壊滅の憂き目を見ることになるだろうということは、一目でわかった。だから彼は、二日間も軍を進められずにいた。

デボラは戸惑いを見せることも無くずんずんと歩みを進め、伯爵の前で立ち止まると、彼を見上げて小ばかにしたような笑みを作った。

「何がおかしい」言いながら、デルロイは女の胸ぐらを掴む。驚掴みにされ、彼女の外衣が乱れる。それでも女は冷笑をやめなかった。

「この喜ばしい状況がご理解いただけませんか？ 敵部隊は国王が直々に指揮しているのですよ。これは、デルロイ伯爵が軍を動かしてくださったからに他なりません。伯爵とガイズル国王との怨恨がそうさせたのです。敵の撤退勧告書の封印を見てもわかるように、敵は国王自らの出陣で伯爵の顔を立て、撤退を促してきているのです。もしそれが叶わなかった場合には、恐らく国王自身が一連の怨恨の幕引きを図るという意味も含んでいるでしょうけれど」

デルロイ伯爵は、ただ無言で女の顔を睨みつけていた。

「イセール川の増水によって我々が不利な立場に立たされてる点は否めません。ですが、敵が形を重んじて国家元首を前線にさらしたのは明らかな失策です。そう解釈すれば、今回の状況もそう悪いものではありません」

伯爵は歯を食いしばりながら、獣のような呻き声を発する。彼はデボラから手を離し、視線をそむけた。

「……ああ。そういう観点で見れば、確かに君の言うとおりのかもしれない。だが、足止めを食らって攻めあぐねているのも事実だ。いくらご馳走が目の前にあっても、見るだけでは腹は満たされん」

デボラは口元に手を当てて少し考え込むようなしぐさを見せ、それから口を開いた。

「万策尽きてここでじっとしているわけではありません。今は、ただじっと機会を窺うべきときなのです。もう少し、心静かにご辛抱くださいませ」

デルロイ伯爵は彼女の言葉を聞いて、視線を戻した。

「……何か根拠があって、そう申しているのでしょうか？」

「もちろんですわ」女は不敵な笑みを浮かべた。

リルニア王国軍第二師団とデルロイ伯爵軍のイセール川を挟んでの睨み合いも、もうすでに三日目が終わろうとしていた。その間に周辺の土地からの援軍三百が合流を果たして、何とか八百にまで戦力が膨らんだが、それでも千の敵に対するにはまだ劣勢だった。オキレフ王子が傭兵をまとめてリルンブルグを發ち、援軍としてこちらに向かっているという情報があったが、到着までにはまだ数日かかりそうだった。

そして徐々にではあるが、イセール川が普段の穏やかさを取り戻しつつあった。増水した川が敵が強行突破しようとしてくれれば、敵が川に足を取られている隙に対岸から矢の雨を降らせて甚大なダメージを与えることができるのに、川の流れが緩やかになればその作戦もそれほど効果的なものとは言えなくなる。

敵が強行突破せず、川の流れが穏やかになるのを待つ作戦に出ることも想定はしていた。だがその想定では、川が穏やかになるのを敵が待つ間に、こちらはもっと大勢の味方部隊と合流できるという計算が大前提にあった。それが崩れ去った今、このまま何日も川岸に留まっているのは危険だった。川を防御柵代わりに使う作戦は、もはや意味を成さなくなりつつある。

日没とともに、国王は三人の『陰の影』に命令を發した。ユークリアには川の水量の變化に伴う軍事行動への諸影響の調査、セシエには敵の野営地へ潜入しての作戦情報の収集、ディアンドには敵偵察隊の發見・排除という役割が与えられた。

セシエは久々の重要任務に、心臓の高鳴りを感じていた。彼女は万全を喫し、かなり下流からイセール川を渡河したのだった。イセール川下流は川底が滑りやすくなっていて、危険な渡河となった。呑み込まれてしまうほどの激流ではなかったものの、軽装でも苦労するくらいの勢いはまだあり、泳ぎを身に付けているセシエでも流れに足をとられてしまえば溺れてしまう危険性があった。彼女は慎重に時間をかけて川を渡ったから良かったものの、重い武器や鎧を身に纏って敵の攻撃の中を、隊列を維持して渡河するなど無謀としか思えなかった。

対岸に上がり敵の野営地周辺まで近づくと、歩哨がいたるところに配されていた。もはや、歩哨以外には出歩いている者も無く、大半の天幕はすでに消灯しているようだった。野営地の周囲に点々と立っている兵士は必ず二人一組で持ち場についており、定置監視の組と巡回の組とがあるようである。

実情把握ができていくかどうかはともかく、リルニア王国が『陰の影』という秘密工作員を有しているということは周辺諸国でも有名だった。それは、未然の紛争抑止効果を狙ってリルニア王国自体が『陰の影』の噂を意図的に流しているということもあるが、そのおかげで敵も警戒の手を抜くことができないらしい。

毎晩、これだけの数の歩哨を立てているとなれば、敵の兵士も相当に疲れているに違いないかった。

しかし、セシエにとってその歩哨の数は、さほど潜入の妨げにはならなかった。周辺の雑木林は彼女の身を隠すのに大いに役立っていたし、敵も多くの歩哨を配しているために、かえって一人ひとりの警戒心が低かったのである。

二人一組で警戒しているということは、単純に考えれば倍の数の目が周囲を警戒してい

るといふことになるが、その実、お互いが雑談しながらのんびりと交代の時間を待っているため、一人のときよりも警戒の目は行き届いていないようだった。

セシエは痕跡を残さぬよう注意しながら、警戒の隙を突いて少しずつ野営地の中心部へと近づいて行った。セシエは夜番のために用意された焚き火の明かりが作り出した影に身を潜め、作戦司令部が置かれている天幕を静かに探る。

(……あれみたいね)

彼女の瞳には、他のものと比較してひと際大きな天幕が映っていた。まだ明かりが灯っており、入り口部分に二人の見張りが付けられていることから判断して、指揮官用の天幕である可能性は高かった。

『陰の影』は焚き火が生み出す影を出て、様々のものが生み出す影のあいだを移動し、少しずつ目標の天幕へと距離を詰めていく。彼女が一番注意を払ったのは、消灯している天幕の横を通り抜ける時だった。下手に天幕のそばを通れば、月明かりに照らされて天幕の布に彼女の影が映ってしまうからである。デルロイ伯爵軍が使っている天幕はリルニア軍のものよりも幾分か厚手のようだったが、それでも中から絶対に影が見えないという保障は無かった。もしも中の人間がまだ眠っていなかったら、厄介な事態になりかねない。彼女は細心の注意を払いながら、目標の天幕を目指して着実に距離を詰めていった。

もちろん、何とかして目標の天幕に辿り着いたとしても有益な情報を得られる可能性は低かった。天幕と言うのは普通の家屋に比べて構造が単純すぎて、かえって潜入が難しいから、資料を手に入れるのは困難を極める。当然、見張りがいるために正面から忍び込むというわけにもいかない。となれば天幕の外の、見張りや歩哨たちから死角となる位置で中の会話を盗み聞きするくらいしか方法は残されていないのである。ただ、そういった直接の情報入手が不可能だったとしても、敵の部隊の色めき具合などから次の一手を類推することは可能であるから、見たまま感じたままを国王に報告するだけでも大きな意味はあるのだ。とはいえ、やはり可能な限りは情報収集の努力はしなければならぬ。

(今だわ!)

歩哨が前方を通過したのを確認し、彼女は目標の天幕の裏側まで一気に駆け寄った。身に付けている金属類は音が立たないようにしっかりと固定してあったし、靴底もやわらかい素材で作られていて、足音がほとんど鳴らないような工夫がされていた。彼女の立てた物音を特に気にするような者はいなかった。

何とか天幕への接近に成功したセシエは、ホッと胸を撫で下ろした。ここまで近づいてしまえば、野営地の外にいるよりもかえって目立ちにくいものだ。後は周囲に人が近づいて来る気配が無いか警戒しながら、じっと耳をそばだてていればいい。もし二灯時ほども居座って有用な情報が得られないようであれば、あきらめて帰るしかない。だが、それはそれで『敵の作戦部には、いまだ目立った動きが無い』という、一つの有益な情報となり得る。

だが、実際にはごく短い時間様子をうかがっただけで『目立った動き』を感じる事ができた。指揮官用天幕には、人の出入りが多いようだった。これは、見張りや偵察の状況報告だけにしては頻度が多すぎた。むしろ、隊長や幕僚たちが何らかの打ち合わせのために指揮官の天幕を訪れているといった印象である。とは言っても、もちろんセシエは相手の顔を見たわけではない。会話の内容も天幕の布の厚みのせいで上手く聞き取れないでい

たが、ぼそぼそと聞こえる語感や話し方の抑揚からだけでもそれぐらいの判別はついた。セシエは時々巡回してくる歩哨に注意しながらも、何らかのキーワードだけでも聞こえてこないかと必死に耳をそばだてていた。

意識を天幕の中の会話に集中していたセシエだが、周囲の警戒をおろそかにしたつもりはなかった。それなのに、唐突に彼女は嫌な感覚を覚えた。

『……動クナ』

それは、声をかけられたというのとはまるで違っていた。耳を通して伝達された音声情報ではなく、心に直接呼びかけられたような不気味な感覚だった。

その瞬間、彼女は驚きと恐怖で凍りついた。何かが背後に唐突に現れたような感じだった。ほんの一瞬前までは、何の気配も感じることには無かったのに、今は自分の背後に禍々しい気配を帯びた何者かがいる。しかも、言葉ではない何か不思議な手段を用いて語りかけられたのだ。これほど恐ろしいことはなかった。

『……抵抗スル……無駄……暴レル……死ヌ』

もはや背後に何かいることは疑うべくもなかった。相手が第二波の思考を飛ばしてきたのである。それは言わば、相手の意志が自分の心の中に直接飛び込んでくるというような感覚だった。具体的な言葉でメッセージが伝わってくるのではなく、相手の送り込んできた意志をセシエ自身の脳が解釈して単語に還元しているという感じである。それは、とても不快なことだった。

『……急グ……駄目……見ル……ウシロ』

もはや心に飛び込んでくる単語以外には、考えている余裕は無かった。彼女はその単語の意味することを必死に考える。

(……きつと、ゆつくりと後ろを振り返れということね)

彼女は恐怖を抑えながら、そう結論づけた。そして、何の小細工もせず相手に言葉に従うつもりでいた。状況がわからない以上、下手にあがくほうが危険だからだ。もしも、味方部隊や国王に不都合が生じる可能性が感じられれば、そのときは自分の舌を噛み切れればいいのだ。そうすれば、味方にはほとんど迷惑をかけずに済む。

彼女は慎重に後方を振り返る。もちろん、少しずつ、少しずつである。何者かの気配は、自分の後方に半歩測も離れていないくらいの場合から感じられるようだった。だが、振り返ったところには、誰も立ってはいなかった。それでも視線の方向からは、圧迫されるような強い気配が感じられた。

『……正面……天幕……』

脳に直接届けられる声が、今度はそう告げていた。消灯していて見えづらいが、五十歩測と離れていないところに天幕がある。

『……来イ』

声はセシエに命じた。彼女は左右を警戒しながらその指示に従って移動する。歩哨たちが異変を感じている様子は無く、セシエのことを認識しているのはどうやら声の主だけのようにだった。

例の天幕に近づくにつれて、それが消灯しているのではなく、やや厚みにあるフェルトで覆われていて、中の光が漏れていないだけなのだということがわかった。デルロイ伯爵軍の兵たちが使っているものとは違う天幕の入り口の前で、セシエは立ち止まった。

『……入レ』

言われるまま、彼女はそつと手で入り口のフェルトを押し退けた。四人も入れれば目一杯という程度の広さの空間はランタンの光で橙に染め上げられており、隅には使い道のわからない道具類が規則的に並んでいた。呪詛や魔術に関わるような品かもしれない。そして椅子や机は無く、武器や防具もいつさい見当たらなかった。

そんな空間に、ゆったりとした長衣を身にまとった女性がたった一人、くつろいだ姿勢で座っている。黒く艶めいた長い髪を持ち主だ。その女性の鷹のような瞳が、中に入ろうとするセシエをじつと見据えていた。

毛皮の敷物の上に安座している女は、デボラに間違いなかった。

セシエは自分の膝が震えているのがわかった。だが、余裕の無い態度を見せてはいけないうということも彼女にはわかっていった。セシエはためらうようなそぶりをいつさい見せず、天幕の中へと足を踏み入れる。

それを見て、デボラは口元に微笑みを浮かべた。その笑みで、彼女の口元には小じわが走る。

どこか悟ったふうな目つき、口元の小じわ、想像していたよりも、デボラはずっと年齢を重ねているのかもしれないとセシエは感じはじめていた。

「どうぞ。腰を下ろして」

先ほどの言葉ならざる言葉とは、ニュアンスがまるで違っていった。今度の言葉は、デボラ自身の口から発せられた肉声であった。やや低く落ち着きがあり、どこかなまめかしさが感じられる声だった。

セシエは天幕の入り口が背中に来る位置を避け、指示に従って敷物の上に座った。もちろん姿勢を変更しているあいだは片時もデボラから目を離さなかったし、腰を下ろしてからも、何かが起これば急いで動ける状態はキープしている。

「これであなたにお会いするのは二度目になるわね、リルニア王国の『陰の影』さん」

そう口にするデボラの目は、いたずらっぽく微笑んでいた。「一度目はそう、デルロイ伯爵館の私の部屋だったかしら……」

彼女がそのように切り出したので、セシエは驚きで危うくあんぐりと口を開いてしまっそうだった。伯爵館でデルロイとデボラの会話を盗み聞きしていたとき、セシエがいた場所には十分に暗かった。絶対に見えるはずがなかった。

「なぜ……」

セシエがようやく発することができたのは、それだけだった。その言葉には、様々な意味合いが込められていた。

「あの日も、今日も、あなたは実に見事に仕事をこなしていたわ。でも、私も馬鹿じゃないから、部外者が侵入してきそうな場所には警戒網を張っておくことにしているのよ。それに触れてしまったのがあなたの落ち度ね」

セシエは侵入者対策のトラップに引っかかるようなミスを犯したつもりは無かった。だが、デボラの天幕の中の様子から、ある予測はセシエの中にあつた。

「……魔法使いか」

つぶやくように言葉を発したセシエに、デボラは作り笑いで答える。つまり、デボラが用意していたのは魔法的な罠だったのだ。目に見える仕掛けなら対処のしようもあるが、

魔術や呪術のたぐいはセシエの専門外である。

「あなたは利口そうに見えるから大丈夫だとは思うけど、たかだか一人の魔法使いと思っ
て見くびらないでね。そのせいで、伯爵直属のある事務官は自室の窓から転落して死ぬ羽
目になったわ」

サハンのことを例に挙げ、デボラはセシエの表情から何かを汲み取るうとしているよう
だった。

セシエは冷静だった。サハンの死にデボラが関わっている可能性は大いにあったが、必
ずしも彼女の言葉がそれを裏付ける証拠とはなりえない。

平然としているセシエを見て、押しが足りないと感じたのか、デボラは思い出したよう
に付け足す。

「……ああそれと、あなたが伯爵館で私たちの私生活を覗き見した翌日には、館で勤めて
いたある召使いが死んだわ。不遇にも館の入り口の落とし格子を支えるロープが切れて、
落ちてきた重い樫材の格子に押しつぶされて亡くなったの」

さすがのセシエも、二例目にはもはや平然とはしていらなかった。デボラが言ってい
る召使いというのが、ランダイン……つまりラムサスのことだろうということは考えずと
も想像がついた。彼とは特に親しい間柄というわけでは無かったが、図らずも一度は唇を
重ね合わせた仲だ。穏やかではいらなかった。

「……あなたが簡単に人を殺せて、しかもそのことで少しも思い悩まないということは理
解したわ」

ちよつと皮肉めいた言葉だったが、デボラは特に機嫌を損ねた様子を見せなかった。む
しろ、多少なりと感情をあらわにしたセシエを愉快そうに見つめていた。

「そのとおりよ。だから、馬鹿な真似はやめてね」

彼女は足を崩し、よりくつろいだ姿勢をとった。どうやら、彼女はセシエが『馬鹿な真
似』に出たりしないだろうと思っただけらしい。

セシエは彼女がくつろいだ姿勢になった今の状況なら、一瞬にして相手の息の根を止め
る自信があった。だが、その考えを頭の隅に押しやる。何せ相手は魔法使いなのだ。どん
な手で反撃されるかわかったものではない。今はまだ、大人しくしているほうが無難だっ
た。

「それで、あなたの狙いは何なの？ 侵入者を伯爵の前には突き出さず、こうして自分の
天幕に招き入れた。もちろんそれは、何か理由があつてのことなんでしょう？」

セシエの問いかけに、女はクククと声を殺して笑う。

「お利口さんね、そのとおりよ。……まず私が聞きたいのは、ガイゼル王が今後どう動く
つもりなのかということ」

それを聞いて、今度はセシエが相手を冷笑する番だった。

「命恋しさに、私がリルニア王国をレグドル教団に売ると考えているのなら、それは大き
な間違いね。何ならこの場で舌を噛み切つてご覧に入れましょうか？」

その言葉を聞き、デボラが眉をひそめる。彼女は葡萄酒の入った革の水袋を手に取り、
杯にそれを注ぐ。

「話したくないのなら別に強要はしないわ。それに、あなたの足元に敷いている毛皮はお
気に入りなの。血で汚されたりしたら台無しだからやめて」

彼女は一つの杯を『陰の影』に差し出した。

「……あなたがなぜレグドル教国をそこまで敵視しているかは知らないけれど、そう悪くはないところよ？」デボラはそう言ったが、自分の村を焼き払ったレグドル教国をセシエは絶対に好きにはなれないと感じていた。もちろんあえて口に出したりはしなかった。

「私はリルニア平原で生まれたランドール人だったけど、レグドル教に改宗してレグドル教国に帰化したの。レグドル教国で長年暮らしてみて、ランドール人たちの考え方の古臭さ、堅苦しさを知ったわ。国を飛び出してレグドル教国に駆け込んだことを、今でも私は後悔していないわ。」

レグドル教国はおおらかなお国柄だし、能力さえあれば地位や報酬も思いのまま。あなたは身体能力が高いようだし、おつむも悪くない。あなたもレグドル教国に来て、自由な空気に触れてみたらどうかしら？」

セシエは受け取った杯には口をつけなかった。

デボラがセシエを殺すつもりならいくらでも手っ取り早い手段があるはずだから、杯に毒が入っている可能性は少なかった。それに、大抵の毒ならセシエは匂いや味で判別できる。それなのにセシエが杯に口をつけなかったのは、まだこの天幕に招き入れられた真意を探れないままでいたからである。

杯に満たされた葡萄酒程度のアルコールで前後不覚になるような心配はまず無かったが、少なくとも置かれた状況がはつきりするまではしらふでいたかった。

「レグドル教国に寝返るなんて考えたこともありませんし、別に私は地位や財産を求めるつもりなんてありません。あなたはそんなことを告げるためだけに私をここへ招き入れたのですか？」

「ずいぶんとせっかちなのね。……いいわ、本題に入りましょうか」言いながら、デボラは自分の杯に口をつける。「私は今から、デルロイ軍の明日の作戦の情報をあなたに話すわ。その情報を信じるかどうか、その情報をどうするかという点はもちろんあなたの自由よ。私の話が終わったら、後は勝手に天幕から出て行ってもらうてかまわない。別に尾行をつけるつもりも無いわ」

彼女の言葉にセシエは我が耳を疑った。デボラがデルロイ軍の作戦をセシエにしゃべってしまったら、相手方は致命的な事態になりかねない。デボラはレグドル教国の人間であってデルロイ伯爵の部下ではないから、あるいは何らかの理由で伯爵軍を切り捨てる算段をしているのかもしれないが、逆にそう思わせてリルニア軍を罠にかけるつもりかもしれない。かかった。

「なぜそのような——」

セシエが口を開いた瞬間、デボラはそれを制する。

「あら、あなたご自分の今の立場をおわかり？ あなたには質問する権利も無ければ、何をどうしようしようという選択権も無いの。……ただ私の話を聞いて、そのあと天幕を出る。たったそれだけよ。簡単でしょ？」

*

*

*

セシエがリルニアの野営地に到着したのは、夜明け前のことだった。ガイゼルの天幕に

はこんな時間だというのにまだ明かりが灯っていて、入り口の前に立つ見張りにはセシエの姿を確認すると、手際よく入り口の垂れ幕をあげた。

天幕の中では国王のほかに、もう一人男性がいた。第二師団の主攻の指揮統制を任されているウエルトン千人長だ。千人までの部隊を指揮する権限を持つ若手の隊長で、人望が厚く、平原のダオルグ狩りでも一定の評価を得ている人物である。

国王と千人長は真剣な眼差しで机上の地形図を睨んでいたが、垂れ幕が上がるのと同時に入り口に目を向けた。セシエは入り口の前で片膝をついて、最敬礼の姿勢をとる。

「……『陰の影』セシエ、ただいま帰還しました」

「よくぞ無事で戻った。さあ、中へ入れ」

言われるまま、セシエは天幕の中に入る。ランタンの光に照らされた国王の顔には、くつきりと疲労の色が見て取れた。ここ数日、彼がまともに休息を取っている様子は見られなかった。

「ひどくお疲れのようですね」

セシエにそう問いかけられ、ガイゼルはゴツゴツとした手で疲れた目を揉みほぐしながら答えた。

「そうかもしれん」

彼は座り心地のあまり良くない簡易椅子の背もたれに体をあずけ、大きなため息を一つ吐いた。そして、彼は『陰の影』のほうに視線を向ける。

「しかし、指揮官の主な仕事は戦いに備えて知恵を絞ることだ。休むのは勝利の祝杯を挙げたあとでも遅くは無い。……さあ、報告を聞かせてくれ」

やつれた顔で微笑むその姿は、どこかセシエには弱々しく見えた。そんな国王に、彼女はありのまま報告すべきかどうか決断できなかった。

「どうかしたか？」

ぼろ机の上で、ランタンの炎がゆらゆらと揺らめいている。机の上の小物類や、国王の体を作り出す影もまた、天幕の覆い布に投影されて揺らいでいた。セシエはそれらに目をやって、自分の心にどうすべきかを問いかけてみる。

国王はただじっと、彼女が話し始めるのを待っているようだった。

「隊長、席を外していただけませんか？」

セシエがそう言うと、黙って傍にいたウエルトンは国王のほうに目を向けた。国王は顎で天幕の入り口を指し示す。

「わかりました」

隊長は踵を返して天幕を立ち去る。

彼が天幕を出てしばらく経った頃合いに、セシエは国王に視線を戻してとうとう話し始めたのだった。

当初はすべて上手く運んでいたこと。敵兵にもだいたい疲弊が見られること。敵の司令部が慌しかったこと。任務遂行中にデボラの魔法によって発見され、彼女の天幕に連れ込まれたこと。彼女が相当な魔法の使い手らしいということ。アラニールではサハンだけでなくラムサスも彼女に殺されたらしいということ。彼女が自分にデルロイ伯爵の作戦情報を教えてそのまま解放したこと。自分は相手に何の情報も漏らしていないこと。

そのすべてをセシエは国王に話したのだった。国王はその間、いっさい口を挟まず、た

だ静かに彼女の話をじつと聞き入っていた。

報告を終えると、セシエは続いてデボラが語った作戦情報を国王に伝えた。

デルロイ軍本隊は間も無く、明け方の薄闇に乗じて正面から渡河を試みる計画だということ。そして、リルニア軍主力が本隊の渡河阻止に躍起になっている隙を突いて、二十数騎の精鋭で構成された主攻が上流部の渡河可能地点から密かに川を渡り、司令部を急襲する計画だということ。

セシエはデボラに聞かされたとおりに話した。

私感として、必ずしもそれらの話が真実だという保証は無いということも補足し、彼女は今回のすべての報告を終えた。そして、ミスを犯した自分ほどのような罰でも受ける覚悟があるということをつけ加えて、言葉を締めくくった。

すべて終わるまで静かに耳を傾けていたガイゼル国王は、椅子から腰をあげてセシエの傍らまでくると、彼女の肩に手を置いた。セシエは黙ってガイゼルの顔を見上げる。彼は優しい笑みを湛えていた。

「その点は不問だ、お前に落ち度は無い。よくぞ無事に帰ってきてくれた。よくぞ素直にすべてを話してくれた」

セシエは国王の言葉を受け、最敬礼の姿勢をとった。

国王はデボラの肩から手を離し、腕を組んだ。

「デボラという査察官の魂胆はわからぬが、素人のでっちあげた話とは考え難いな。川の水量が戻りつつある今、我々はいつ後退すべきかを常に意識している。そんな中、今まで全く動きを見せなかった敵本隊が突然正面から大挙すれば、こちらが敵の本隊に釘付けになってしまってもおかしくはない。敵の軍部がその案を採用する可能性は大いに考えられるだろう」

セシエは顔を上げて国王の表情を窺う。彼の顔は真剣そのものだった。

「では、陛下は敵の情報を信じるおつもりなのですな」

セシエは罪悪感にさいなまれ、思わず顔を曇らせる。彼は少しだけ表情を崩して『陰の影』を見た。

「川の状態をユークリアに探らせていたのだが、上流に流れが穏やかで浅瀬になっている場所を見つけたらしい。その付近では敵の斥候の姿も確認された。余はその情報をもとに、ずっと敵の取りうる行動を考えていたのだが、どう考えてみてもデボラの話した作戦を敵が選択する可能性が一番高いように思われる。」

デボラの話が聞かされなかったとしても、余はやはり同じプランで軍を動かしただろう。何度も言うが、お前に落ち度は無かった」

セシエは眉をひそめ、不安そうな顔を国王に向けた。

「彼女は何者で、一体何を企んでいるのでしょうか？」

太陽はまだ姿を現していなかったが、空は仄かに白み始めていた。

何日も睨み合いを続けている間、ガイゼル王はデルロイ伯爵宛に何度も退去勧告を送っていた。領域を超えて無断でリルニア王国の土地に踏み込んでいるデルロイ伯爵軍に対して、国王自らが親書を送るという今回の通告は、形としては十分すぎるほどデルロイ伯爵の顔を立てた方法だった。そうした態度をとることによってリルニア王国が伯爵軍を軽んじていないことを彼に印象づけ、こちらの考えに呼応して退却してくれば互いに無駄な血は流さずに済む。

その点は国王自らが師団長として出陣した要因のひとつであったが、今日までデルロイ伯爵は何も明確な態度を示していなかった。伯爵とて、レグドル教国という異教の国と手を組んでまで騒ぎを起こしているのだ。一度軍を動かしてしまった以上、そう簡単に引き下がることはできないのかもしれない。

「ウェルトン、連中は来ると思うか？」

ガイゼルは隣にいる若き千人長に問いかけた。

「わかりませんが、もし来るなら全力をもって殲滅するまでです」

その頼もしい言葉に、ガイゼルの顔に笑みが浮かぶ。若き日のオルソンに感じた頼もしさと同質のものを、彼の自信に満ちた言葉から感じ取ることができた。軍にこういった人材が育ってくれることは、リルニア王国にとって非常にありがたいことである。

（あの日以来、オルソンはすっかり無気力になってしまった。状況が状況だっただけに、無理も無いことだが……）

湿気を帯びた朝の空気がガイゼル国王のあごひげを撫でる。

「報告します！ 敵軍が対岸で集結しています！」

その場にあつた背の高い針葉樹に簡単に足場を組んだ即席のやぐらの上から、兵士が大声で叫んだ。

「いよいよ動き始めたようですね」ウェルトンが振り返って言った。

国王は頷き、声を張り上げる。

「各員、鎧の止め紐に緩みが無いか確認せよ！ 弓兵は弦の準備だ。敵が行動を開始するまではまだ時間がある。落ち着いて取りかかれ！」

国王の命令が全隊に通達されると兵たちの無駄話も止み、あたりはほどよい緊張感に包まれた。

「……陛下」不意に、低く穏やかな女性の声がガイゼルの真後ろから聞こえる。

国王が振り向くと、そこにはいつの間にか黒衣の人影があつた。国王が彼女に声をかけると、最敬礼を取っていたその人物はゆっくりと顔をあげた。

艶のある黒髪を、前髪のひと房だけを残してシニヨンに編み上げた髪型が印象的なその女性は、『陰の影』ユーケリアである。『陰の影』は男も女も物静かな者が多かったが、そのなかでもユーケリアは特に口数が少ない。

「首尾はどうか？」

ユーケリアには上流の警戒を、セシエには下流の警戒を任せてあつた。彼女が姿を見せたということは、川上のほうで何らかの動きがあつたということだ。

「イセール川上流の対岸に、人影が確認されました。その規模は不明。現在は斥候が彼らの動向の監視を行なっています」

ガイゼルは上流と下流に最小限の斥候部隊を配してあった。もしも敵が渡河を開始するようなら、後方に待機させている軽歩兵隊を送って迎撃に当たらせる手はずである。

たとえ相手に戦闘意志が無いとしても、相手がこちらの退去勧告を無視し続けている以上、さらに進もうとするのならそれを阻止しようとすることは当然の処置である。リルニア王国軍が先にしかけたとしても、その攻撃には全く不当性は無い。

敵がセオリー通りに動くとすれば、陽動のための部隊が先に動き、その混乱に乗じて奇襲部隊が行動するはずである。デボラという女によってもたらされた情報の真偽については不明だが、今のところはほとんど情報通りに状況が推移していた。

(あの女の企み……余にとつて吉と出るか凶と出るか)

とかく、戦場では冷静さを失ったほうが負けなのだ。デボラの計略がどういったものであろうと、自分の経験と勘を信じて動くしかなかった。慎重に行動を選びさえすれば、大敗を喫することはまずない。

『陰の影』、上流には軽歩兵小隊を二つ送る。迎撃は彼らに任せ、お前は他に目立った動きが無いか上流の監視を続けてくれ」

「かしこまりました」

彼女は現れたときと同様、立ち去るときもほとんど何の物音も立てずに王のもとを離れた。『陰の影』の装備は物音が立ちにくいような工夫が各所に凝らされているが、それでも目の前の人間が物音一つ立てずに動くのを見ると、やはり背中に寒いものが走る。『陰の影』という呼称自体が『物陰に潜む人影』というような意味合いで付けられているのだが、まさに彼ら彼女らは影のような存在であった。

対岸の敵主力部隊が行動を開始するのに、それほど長い時間はかからなかった。彼らは盾を構え、隊列もお構い無しに進軍を始めたのである。数日で川の水量が減ったとはいえ、大勢の人間が一斉に進軍できるような浅瀬はまだ限られていた。彼らは淵を避けながら前進を試みる。川幅が広がったので、弓兵たちの射程に入るまでリルニア王国の兵士たちは固唾を呑んで彼らの動きを見守るしかなかった。

「弓兵、構ええッ！」

ウエルトンの叫び声を聞き、川沿いに配された弓兵たちが空に向かって弓を構えて弦を引き絞る。

「放て！」

反りの少ない矢柄と、硬質の金属で作られた矢じりを持ったリルニア製の矢が天に向かって無数に放たれる。その矢は空中で放物線を描くと、そのまま敵の最前衛あたりにバラバラと降り注いだ。

敵軍の兵士はそれらを懸命に防御するものの、受ける角度によっては盾や鎧を貫いて悲惨な目に遭う者が続出する。

「第二射、構え！」

ウエルトン千人長は敵の反応に一喜一憂することなく、即座に次の命令を出した。

「放てえッ！」

ウエルトンの命令で、次から次へと絶え間無く矢が発射され、ガイゼルは後方からその

様子を静かに見守っていた。第二師団の主力を一任されたウェルトンにとっては、今回の戦いは、自分の能力を国王に見せつける最大のチャンスだった。彼はその重圧に過剰に興奮することも無く、周囲に状況を把握するだけの余裕があった。

ガイゼルの目から見ても、今のところウェルトンの指揮には何も問題は無かった。若輩ながら、彼は期待以上の確かな指示を部下たちに与えていた。

「陛下！」女の叫ぶ声と馬の足音が、ガイゼルの耳に届く。彼女は馬を疾駆させて下流方向から駆け上がってくるころだった。

「どうした？」

「下流の部隊がアンギルの群れによって奇襲されました。すでにこちら側に上陸している数は三十を数え、いまだ続々と増え続けています。至急援軍を派遣してください！」

アンギルというのは人型の水棲生物で、人間並みの知性と独自社会を持った高等な生物である。水中での生活に適した独特の外見が不気味で、ランドール人の社会と交わることは極めてまれだった。えらと肺を持ち、ぬめりのある体表が乾かない限りは地上でも支障なく活動できると言われている。レグドル教国と利害が一致するときには共同作戦を展開することがあり、水際の攻防に連中が加わるとランドール人にとっては非常に厄介な相手となる。

今回も水中を静かに移動して岸に接近し、奇襲をかけたであろうことは想像に難くなかった。増水で水が濁っており、見張りが接近する彼らを見落とすことも計算済みだったに違いない。

「わかった。待機している軽歩兵隊をすぐに送る。お前は先に下流に戻って味方を援護しろ」

国王は彼女の返事を待たず、国王は軽歩兵小隊の隊長三人に命令を与えた。小隊長たちはガイゼルの命令を受けて即座に移動を開始した。

ガイゼルは深いため息をつく。

「なるほど、下流域は武装しての渡河が困難であるから安心していましたが、まさかアンギルを使役するとは。……デボラという女、なかなかやる」

デボラの漏洩した情報を完全に信じたわけではなかったが、正面と上流に比べ、下流域はやはり防御が手薄だった。そこを突かれたのだから、リルニア軍には痛手である。

「持ちこたえてくれれば良いが……」

*

*

*

「上流に差し向けた精鋭部隊が苦戦を強いられております。撤退命令をお出しください」
デルロイ伯爵の前に駆け寄った伝令が言った。伯爵はどっかりと椅子に腰を降ろしたまま、デボラのほうを見る。彼女は首を横に振った。

「なりません。戦闘を続行してください。今彼らを下げると、中央の突破部隊の士気に関わります」

デルロイはコクリとうなずいて、伝令に視線を戻した。

「現状維持だ、撤退命令は出せない。まだ連中を釘付けにしておく必要がある」

伯爵の言葉を聞いて、伝令は下唇を噛みしめる。彼が敬礼して退出するのを見送ると、

デルロイはデボラのほうを振り返った。

「……あんな命令を出すのは辛い、部隊を見殺しにするようなものだ」

伯爵の言葉に、デボラは微笑を浮かべただけである。

「まさか貴様がアンギルどもと懇意だったとは知らなかった。あんな連中を召喚できるだけの力があるのなら、我が部隊に犠牲は必要なかったのではないか？」

そう言われても、彼女にはまるで動じる様子は無かった。ついさっきまで、伯爵はアンギルの伏兵の話彼女に聞かされていなかったのである。

デルロイはアンギルを召喚するという話をデボラに聞かされたとき、驚きで口をぽかんと開けている以外何もできなかった。彼女はこちらの上流域での戦況が不利と見るや、突然呪術だか魔法だか妖術だかをを用いて不気味な水棲生物を呼び出して見せたのである。

そもそもデルロイ伯爵は、デボラがそういったたぐいの能力の持ち主であることを知らなかったし、部隊規模でアンギルを召喚できるほど力のある人間だということも知らなかったのである。

アンギルに命令を与えているデボラを見つめながら、デルロイ伯爵は怒りに打ち震えていた。彼女にそれほどの能力があることをあらかじめ知っていたなら、それを想定した作戦の立て方も当然できたはずであるし、そうすれば当然、もっと犠牲を減らしてリルニア軍を撃破できたはずなのだ。

デルロイ伯爵は自分がデボラに感じている怒りの中に、殺意にも似た感情が含まれていることに気付いた。

「おい、何とか言ったらどうなんだ？」

伯爵は怒りの感情を可能な限り抑圧し、静かなトーンで彼女に問いかけた。デボラはそれでも微笑を湛えていた。それはまるで、愛玩動物へ飼い主が見せる表情のようですらあった。

彼女のその表情にはさすがにデルロイ伯爵も耐え切れず、胸ぐらに挿みかかった。彼女は冷笑とも受け取れる笑みを崩さないまま、ようやく口を開いた。

「多くのランドール人には、魔法についての知識が不足しているように感じます」

彼女は「ランドール人」という表現を使ったが、その言葉が意味する対象がデルロイ伯爵自身であることは容易に想像がついた。

「どういう意味だ！」彼の手に、ぐっと力が込められる。

「手を離しなさい。これほど締め上げられていたら話などできるはずありません」

デルロイは大きく舌打ちし、彼女を突き放す。デボラはまるで埃でも払うかのように、彼に掴まれていた場所を。パタパタと手ではたいた。

「魔法という観念を簡単に言い表すことはできませんが、魔法という力は超自然のものでありません。すべて、自然の因果に乗っ取ったやり方で引き出されるのです。

私の使う術は、そのほとんどが呪術です。『呪』というのは、強い想念という意味です。それを操る術者、つまり呪術師の役割は、『呪』を織り上げて方向性を与えることなのです。呪術師の能力はあくまで発生した『呪』に意味をもたらすことであって、『呪』を生み出すことではありません。

『呪』は激しい感情から生み出されます。そういう意味で、戦場は『呪』が生まれやすい環境なのです。

伯爵の軍勢の奮戦があつたからこそ、私はアンギルたちの召喚が可能でした」

その言葉を聞いて、デルロイは一瞬ヨロリと足元をふらつかせたようだった。だが、彼はすぐに踏ん張って、女を睨みつけた。

「それはつまり、我が兵士たちが死をも覚悟せねばならないような極限の心理状態であることで『呪』が生み出され、それを利用して呪術とやらを行使したということだな」

デボラは彼を睨み返した。

「そう解釈していただいて構いません。戦場で発生した『呪』を有効利用することに、何か問題でも？」

デルロイは地図の置かれている机に握り拳を叩きつけた。

「このチクショウめツ！ 我が民の命はオモチャでは無いのだぞ！」彼がどれだけ取り乱そうと、デボラは心にも留めていないといった様子である。

伯爵が、握りしめた拳で女に殴りかかろうかと考えたまさにその時、新たな伝令が陣中に飛び込んできた。

「申し上げます。中央突破部隊の前衛が対岸に到着しました！ 対岸での隊列再編もほとんど混乱無く訓練どおり行なわれている模様。敵は弓兵を後方に下げ、重装の密集横隊を前面に押し立てています」

その報告で、伯爵の怒りは一瞬にして歓喜へと変わった。彼は口元を手で覆ったが、かみ殺した笑いは容易に聞き取ることができた。

「ようし、いいぞ。それでこそ日ごろから兵士たちに隊列変更と整列の訓練を重点的にさせていた甲斐があつたというものだ。

奴らもまさか、散り散りに渡河を終えた兵士たちがこれほど素早く隊列を整えるとは思っていないらしい。あの戦力で横隊を組んでいるとなれば、敵部隊の層はさほど厚くはない。

密集方陣で中央を攻め立てて突破すれば、ガイゼルのクソ野郎はもう目の前だ！ そのまま一気に押し潰せいッ！」

*

*

*

国王の護衛についていた『陰の影』ディアンドは、彼の真横にびったりと馬を並べていた。国王は自分の栗毛の馬にまたがっており、すぐにでも動けるよう手綱に手をかけていた。そんな二人の周りには、重武装の近衛兵が険しい顔で周囲を警戒しながら取り囲んでいた。

ウェルトン千人長は、敵は川を渡った勢いでそのまま本隊に突撃をかけると予想し、戦いが始まる前に密集横隊を長弓部隊の後方に控えさせていた。彼は敵が岸へ到達するのに合わせて弓兵と後方の密集横隊とを入れ替えようとしたが、寄せ集めの編成が仇となって弓兵の後退は予想以上に手間取ってしまった。その混乱に乗じて、敵は瞬く間に兵を集結させて密集方陣を整えてしまったのである。これほど素早い隊列変更をウェルトン千人長は見たことが無かった。

敵が渡河で多くの犠牲を出したため、敵の密集方陣とこちらの密集横隊の数は拮抗していた。ただし、隊伍を乱した散兵の撃破を目的として組まれた味方の密集横隊は、一点集中の攻撃にはそれほど強度を持たない。薄く長い横隊では、縦にも厚みのある密集方陣の

圧力を支えることは容易ではなかった。無論、隊列を再編成するような時間的余裕も無い。国王がいつでも逃げ出せるような状態にあるのは、敵が横隊を突破するのを警戒してのことである。その時は近衛部隊で壁を作り、後方にディアンドとともに一時退避する手筈になっている。

前線では白刃が朝日を受けて煌き、戦士たちの怒号が渦巻いていた。ウェルトン千人長は降りかかる剣を薙ぎ払い、誰よりも大きな声で全軍に命令を発していた。彼が最前線で戦う姿は友軍に勇気を与え、不利な隊列ながらも何とか敵軍の勢いを抑え込んでいた。

「……リルニアにも次代を担う若者が育ちつつある」

ガイゼルは興奮する馬を手綱で抑えながら、独り言ちた。

「陛下、あれを！」

寡黙な巨漢、ディアンドが対岸の敵陣の方向を指差す。国王がその方向に目をやると、上空に三つの黒い影が確認できた。対岸までは少しばかり距離があったが、その黒い影は羽ばたいているように見てとれた。

「なんだあれは」

ガイゼル・アルディエルドが眉をひそめる。遠めに見た印象ではコウモリのようなのだが、それにしてもあまりにも大きい。国王は若かりし日のレグドル教国軍との戦いの日々の記憶を思い返した。

「あれはランギルダンだ。近衛隊、すぐに弓を構えろ。奴らは素早い！」

王が叫んだ。と、その三頭のランギルダンは羽ばたいて一気に見上げるほどの上空まで昇ったかと思うと、あとは落下とも思えるような速度の滑空でリルニア王国軍の後方を急襲した。

その速さはかなりのもので、石弓装備の近衛兵が石弓のクランクを巻き上げて迎撃態勢をとるだけの余裕すらなかった。迫り来るランギルダンは並の人間の二倍ほどの体格を持ち、黒い翼まで含めると相当な大きさである。いわゆる腕のようなものを持たず、黒い剛毛に覆われた翼が腕のあるべき位置に存在していた。その大きな翼を支えるために、胸筋は異常なまでに発達していた。胸部から腹部にかけてのみ体毛が薄く、白っぽい皮膚が露出している。黒い体毛に覆われた顔は豚のような形状だったが、それでいて細く尖ったような印象があった。醜悪な顔つきである。

予備動作の短い飛び道具を準備し終えていた近衛兵は、発射の合図を待たずに各自の片断でランギルダンへの攻撃を開始した。ランギルダンのまさかのスピードに面食らって、多くの者は飛獣ランギルダンに有効なダメージを与えられなかった。それでも、何とか一頭だけはダメージで落下させることに成功した。

そのランギルダンは矢を目に受けて墜落する破目になったのだが、巨大な飛獣ランギルダンはその質量だけで凶器だった。獣が落下した地点では二人の近衛兵が圧死し、落下した獣が地上でバタバタともがいたせいで、凶暴な脚の鉤爪を受けて一人の兵が重傷を負った。重武装であるはずの近衛兵の全装鎧の胸当てが、まるで布でも破ったかのように引き裂かれたのだった。

落下を免れた二頭のランギルダンは、空中で旋回して二度目の攻撃に移った。今度は弓や投石紐を装備していた兵たちも迎撃準備が間に合わなかった。

驚が兔を狩るがごとく、一頭のランギルダンは巨大な鉤爪を使って近衛兵を鷲づかみに

してさらった。もう一頭は胴を掴み損ねて兵士の頭だけをもぎ取っていく。

飛獣にさらわれた男の体は獣に握り潰され、血と肉と臓物と装備品の雨が生き残った兵士たちの頭上に降り注いだ。頭だけちぎり取られた兵士の体は地上で力なくくずおれ、頭は上空でその中身をぶちまけた。

あまりの悲惨な事態に、十分な訓練を受けているはずの近衛部隊が恐慌に陥りそうだった。

「密集隊形を崩すな、射撃準備をしろ！ 落ちた獣のそばにいる者は、短剣でヤツの首を掻いて仕留めるのだ。放っておくとまた飛び上がるぞ、急げ！」

国王は大声で命令を叫んだ。動揺していた近衛兵たちは、その声で再び士気を取り戻す。落ちた獣のそばにいる者たちは鎧通しの短剣を手にランギルダンに馬乗りになり、それ以外の者たちは三度目の攻撃に備えて武器を構えた。

後方が急にピンチに立たされて、動揺したのは近衛兵たちだけではなかった。ほんの一瞬、戦線を支えていた最前列の部隊にも後方の危機に混乱が生じた。そのたった一瞬の混乱が前線の隙を作り、横隊の中央部が切り崩されることとなった。敵部隊は密集横隊にできた『穴』に大量の兵士をねじ込み、無理矢理その穴を広げた。やがて横隊中央部は瓦解してゆき、主力の防衛線は左右に兵力を温存したまま突破されてしまった。

もちろん、主力が突破されてもガイゼル王のいる場所まで全く無防備というわけではなかった。後方に下がった長弓部隊が弓を剣に持ち替え、隊列を整えて待機していたのである。

とはいえさすがに主力と比べれば兵力は少なく、装備も軽装である。長弓部隊の兵は弓で後方から味方を援護する戦術を中心に訓練を受けているので、直接的な戦闘にはあまり長じていない。敵戦力が国王のもとへ到達するのを多少遅らせる程度の役割しか期待できないのは確かだった。

敵の密集方陣が、武器を剣に持ち替えた長弓部隊と激突した。敵の密集方陣の檜床が、容赦無くリルニアの兵士たちを貫いてゆく。そんな悲惨な状況でも、彼らは近衛部隊がランギルダンを排除して国王を戦線離脱させるまで、何としてもこの防衛線を維持しなければならなかった。決死の状況にあつて長弓部隊の戦意が失われないのは、ガイゼルがリルニア平原を救った英雄として国民に愛され、信頼されているからである。

彼らの後方で、近衛部隊がようやく一頭目のランギルダンを仕留めた。近衛兵の一人がランギルダンの上体に馬乗りになって、喉に剣を突き立てたのである。ランギルダンは断末魔の声にならない苦悶の呻きを残し、血の泡を吹いて絶命したのだった。

だが、残りの二頭は数本の矢を受けてもいまだ健在だった。連中が急降下攻撃を何度も繰り返すたび、リルニア側に死傷者が続出している。近衛兵の活躍によって国王はまだ傷ひとつ受けていないが、早くランギルダンを始末しなければ国王を敵軍から逃がすことさえままならない。近衛兵たちは焦燥に駆られてひたすら矢を獣めがけて射掛けた。

危機的な状況に置かれていたが、主力を指揮していたウェルトン千人長は比較的冷静だった。

敵の主力によってこちらの主力が突破されたことは痛手だったが、敵も強引な手段に出たために相当の損害を出していた。ウェルトンはその点を見落とさなかった。彼は分断された味方主力部隊を一点に集結させた。

味方の長弓部隊がどれほど敵の攻撃に耐えてくれるかはわからなかったが、主力部隊を十分な厚みを持たせて編成しなせば、背後からの攻撃で敵に絶大なダメージを与えることができるかと踏んだのである。

彼の適切な指示によって、部隊はほとんど何の混乱も無く再整列を開始した。対岸を正面に据えて編成されていた横隊を、正反対の方向に向けて方陣にするにはやはりそれなりの時間が必要だったが、それをやるだけの価値は十分にあった。

「急げ！ 敵は待つてはくれんぞ！」

*

*

*

対岸でリルニア軍の分断された主力が再集結しているのをイライラとしながら見つめ、デルロイ伯爵は立ち上がった。

彼は手を前方に差し示すと、大声で叫んだ。

「主攻部隊の援護に向かう。全軍、前進だ！」

彼の命令を、副官が復唱する。控えの部隊の数はさほど多くは無かったが、皆、つわもの揃いである。

「ちよつと、どういふつもりなのです！ この戦いは私の指示通りに戦えば勝てると思し
ているでしょう！」

デボラは顔を真っ赤にしてデルロイを叱責する。彼女は勝負を急ぐデルロイの前に立ち塞がって、命令の取り消しを要求した。

「お前がどれほどレグドル教国で評価されている人間かは知らんが、まともな軍人ならば誰だつてこの状況なら取るべき行動は一つだ。すなわち、突出した主攻部隊を支援し、彼らの前進を阻害する邪魔な存在を排除する。そんな常識も知らんような奴の作戦に耳を貸すわけにはいかないな」

彼はデボラの脇を通り抜け、机の上の兜を手にした。竜の図案を彫り込んで箔押しした豪華な兜である。

レグドル教国の女呪術師は振り返って、デルロイ伯爵を睨んだ。

「私の指示を無視するということは、レグドル教国の指示を無視することを意味します」

伯爵は黙って兜をかぶると、剣帯のずれを整えた。そして、副官に作戦上の細かな指示を与える。その後、彼は大きなため息をついて、背後に目をやらずに答えた。

「私が望んだのはレグドル教国との対等な同盟関係だ。属国になると言った覚えは無い。その点をよく考えてくれたまえ」

前進を告げる陣員が鳴り響き、準備万端整った待機部隊の兵士たちが喊声をあげた。

*

*

*

上流の戦闘地域を離脱した『陰の影』ユーケリアは、たった一人で王の命令に従って調査を開始していた。

低木がまばらに生えているだけであっても、それが河岸沿いにずっと続いているために、視界はかなり制限された。それでも、何も見落とさないように注意しながら何らかの痕跡

を探った。

さらに上流へと辿っていくと、ユーケリアの背丈よりも頭二つ分は高い葦が密生していたため、視界はさらに限定されることとなった。彼女は小剣で葦を払いながら、慎重に水辺の調査を続ける。

敵がこれほど上流まで登ってくる可能性は低かったが、そんな常識の裏をかくのが術策というものである。先入観だけで状況を判断してはいけないのだ。敵に魔術に長けた者がいる場合はなおさらである。

彼女は泥地に足跡が残されていないか、水中に何者かが潜んでいないか、入念に調べを進めた。対岸の警戒ももちろん怠ったりはしない。だが、それらしき気配は感じられなかった。

そろそろ引き返そうかと考えはじめたとき、ふと彼女は息を潜めて耳を澄ました。馬の蹄の音が聞こえたのである。一つや二つではない、かなりの数がある。

ユーケリアは葦の茂みを慎重に掻き分けて川辺を離れ、葦の狭間から音のする側を窺った。

彼女の目の前には、軽騎兵隊の姿があった。彼らの掲げる旗は、ヴェルゲン男爵のものである。第一師団とヴェルゲンの部隊の進軍ルートから考えると、サン・ルブラール山脈北部の道幅の狭いルートを横断するしか、ここに至る道は無い。その点から考えると、彼らは騎兵隊だけの少数でこの場にやってきたと考えるのが自然だった。

隊の先頭には、全装甲胄に身を包んだヴェルゲン男爵の姿があった。兜の面頬を上げていて顔が見えたのでそれとわかった。

第一師団の師団長を任されているはずの彼が、自分の私兵だけを引き連れてこの場に現れた理由はわからなかった。もちろん、第一師団からのそういった伝令も来てはいない。それどころか、二日ほど前から第一師団との連絡は途絶えていた。だが、作戦行動中に連絡が絶え絶えになることは日常茶飯事である。それに、第二師団が置かれている今の状況から考えれば、そんなことは些細な問題だった。ともかく今は、猫の手も借りたいような局面なのである。

「男爵閣下、『陰の影』にご挨拶します」

ユーケリアは男爵の進む小道へと出て、国王直属の『陰の影』だけが携行を許される特別なメダルを胸元に下げて最敬礼の姿勢をとった。

「うむ。これは良いところに来たな、『陰の影』……面おもてをあげよ」ヴェルゲン男爵は手綱を引いて馬の歩みを止めた。「第二師団の現在の状況が知りたい」

「はッ。第二師団は現在、デルロイ伯爵軍と交戦中です。イセール川南岸で北を正面にして主攻を中央に配し、助攻を左翼右翼に置いております。私は国王陛下よりイセール川上流の偵察任務を仰せつかって単独行動をしておりますゆえ、現在の戦況や部隊展開については詳しく把握しておりません」

彼女の報告を聞いて、ヴェルゲンは兜の面頬を下ろした。

「そうか。もつと多くの情報を持っていると期待したが……」

彼が手で合図すると、二人の騎兵が前に歩み出た。彼らは鞆から馬上戦闘用の長剣を引き抜いてユーケリアの退路を塞いだ。

男爵が自分の私兵だけを引き連れて行軍しているのに、さほどそのことを怪しまなかつ

た自分をユーケリアは呪った。沈着冷静で的確な判断力を有すると言われ、その点を評価されて国王直属の『陰の影』となった彼女にとっては、それはあまりにもうかつな失敗だった。そんな彼女を待ち受けるのは、不名誉な末路のみである。

彼女は腰の小剣を抜いて身構えた。千の兵に値すると言われる国王直属の『陰の影』にとっても、やはり軽騎兵の一団を相手にするのは無謀すぎる事だった。

最後のアンギルは、セシエの胸部へのひと突きが実質の致命傷となった。アンギルの体に深々と刺さった長剣を引き抜くと、剣は信じられないほどぐにやぐにやにひん曲がっていた。肉を裂き、骨を断ち切るうちに、剣は無残に歪んでいったのだろう。もう、これでは十分に剣としての役割を果たせそうに無い。

彼女は歪んだ剣を鞘に納める努力をやめて地面に投げ捨てると、辺りを見渡した。ざつと、五十近くはアンギルの死体が転がっているだろうか。小勢でよくアンギルの猛攻に耐え抜いたものだと思う。リルニア王国の兵士はアンギルの倍以上の数の亡骸をさらしていた。ややもすれば、全滅していたのはこちら側かもしれないというほどの接戦だった。

生き残った兵士たちは、山のように重なり合った中に味方の生存者が残っていないか探索を始めている。もちろん、生きたアンギルを発見した場合には手にした武器で容赦なく喉を突いて殺すことだろう。

「お見事でした」

近くにいた兵士が一人、セシエに声をかける。彼は手拭いを彼女に差し出していた。

手拭いを差し出されて、『陰の影』は初めて自分の体に目をやった。体じゅうが、アンギルの体液と泥とでべとべとである。戦鬪の興奮がおさまってくると、嗅覚もよみがえってくる。醜えた臭いと生臭さが入り混じった、嫌な臭いだ。

彼女は感謝の意を兵士に伝えて手拭いを受け取ると、それで体を軽く拭いながら、下流域の部隊を取り仕切っているラダン百人長の元へと急いだ。

「ラダン百人長は？」

最初から配置されていた部隊の隊長は、セシエが三小隊を連れて戻ったときにはすでに戦死していた。その緊急事態に、救援で駆けつけた三小隊を統括していたラダン百人長が全隊の指揮を引き受けたのだった。そんなラダンだったが、今はどこにも見当たらなかった。

「こちらです」

自身のわき腹を布で押さえて、座ったままじつとしている兵士がセシエを呼んだ。彼は自分の傷口を布で圧迫していたが、すでに布は血で染まり、彼の顔は蒼白だった。彼は隣に横たわる死体を顎で指し示していた。アンギルと刺し違えて果てているその人物は、確かにラダン百人長だった。

「隊長は崩れかかった味方の防衛線を、自らの体を張って最後まで死守しました。ご立派な最期でした」

痛みと格闘しながら、男が言葉を吐き出す。

「無理にしゃべると傷に触る。……司祭どの、こちらへ！」

セシエは従軍司祭を呼びとめてその兵士のことを彼に託すと、自分はラダンに随行していたもうひとりの百人長を探しに向かった。

その人物を探し始めて間もなく、セシエは残念な情報を兵士に聞かされることとなる。ラダンに随行していた百人長も戦いで討ち死にしたというのである。

戦場では情報は錯綜するものだが、戦鬪の事後処理を包括的に指揮している人物が見当たらないことから考えても、その情報の信頼性は高そうだった。となれば現在、下流域の

部隊には残存部隊を取りまとめる指揮官が不在ということになる。十人長は幾人か生存していたが、百人長からが士官となるリルニア王国の軍制では、十人長は分隊規模の小規模作戦の訓練しか受けていないのだ。

「今の我々には中心となる人物が必要です。どうかあなたが指示をお与えください」
数名の十人長がセシエのそばに寄ってきて、彼女にそう申し出た。

セシエは『陰の影』の養成施設で戦略や戦術の教育も受けてはいたが、それは部隊を率いる側の立場としてではない。『陰の影』として活動する上で知っておくべき最低限の知識として教え込まれただけのものなのである。軍人でも貴族でもないセシエは、彼らを率いるような権限も実績も無かった。しかし、セシエはそれを理由に申し出を断るわけにはいかなかった。今の彼らには確かに指揮官が必要だった。

本隊と合流後は適切な人物に指揮権を移譲することを条件に、セシエは彼らの申し出を受け入れた。

彼女はすぐさま部隊の再編に取り掛かった。戦えないほどの重傷者と従軍司祭を残し、それ以外の動けるものは皆、再編部隊に組み込んだ。

『陰の影』であり、軍部と深い関わりを持たないセシエではあったが、ここにいる面々の多くは先ほどの壮絶な戦いで彼女の活躍ぶりを知っていた。だからこそ彼女に指揮を執ってもらいたいと十人長が申し出たのであるし、そんな彼女の出す命令に対して特に異を唱える者も無かった。そして、十人長たちは思いのほか手際よく兵士たちを動かしてくれた。頂点に立つ訓練を受けていない十人長たちでも、少人数の兵士たちを動かすことにかけてはプロだった。セシエはほとんどどかしさを感じることもなく、迅速に部隊の再編成を済ませることができた。

再編成後の部隊は四十名あまりで構成されていた。当初は百名ほどが下流域に派遣されていたから、アングルとの戦いの壮絶さが伺い知れる。兵士たちの表情にも疲れが色濃く出ていたが、戦意はまだ失われていなかった。皆、よそ者に祖国を蹂躪されることを快くは思っていない様子だった。

「諸君、ガイゼル国王陛下の命令で下流地域に派遣された我々は、甚大な害を被りながらも、何とか与えられた役割を果たすことができた。

しかしながら、我々の戦いはこれで終わりではない。第二師団の本隊は、現在もデルロイ伯爵軍、並びにレグドル教国が放った魔物との戦闘を継続中と思われる。

よって我々は、これより本隊の救援に駆けつける。本来ならば諸君に十分な手当を施し、再び鋭気を養うまでこの場に留まるのが望ましいが、敵はのんびりと我々の到着を待ってはくれない。諸君には無理を押しつけて救援に向かってもらわねばならない。

我々は、レグドル教国に屈するわけにはいかない。寡兵ではあるが、レグドル教国の屈強な魔獣との戦いを生き抜いた諸君は皆、精鋭であると信じている。何としても我々の力で友軍を支援し、安心して暮らせる日々を取り返すのだッ！」

セシエは編成を終えた部隊の先頭で、全隊に聞こえるように大声で発声した。声の調子を落ち着かせ、迷いが表れないよう意識して話した。軍属でない得体の知れない『陰の影』が部隊の指揮を執るのだから、せめて威厳のある頼れる人物として兵士たちに理解してもらいたかった。彼女の言葉が終わると、兵士たちが大声をあげてそれに答えた。彼らの気迫は十分に伝わってきた。彼女の迫真の演技は、それなりに兵士たちに受け入れられたら

しかった。

そんな兵士たちの興奮が冷めやらぬうちに、セシエは部隊に前進命令を出した。

敵が魔獣まで投入して総力戦をしかけてきた以上、わずか四十名ほどであっても遊兵を作ってしまうべきではなかった。将校や士官としての教練を積んでいるわけでないセシエにも、それくらいのことには理解できた。彼女は可能な限りの速度で部隊の進軍を急がせた。「現在ガイゼル国王の近衛部隊は空飛ぶ魔物と交戦中、その前方には敵主力が迫り、味方部隊が抵抗を続けています！」

戦場に到達すると、斥候の報告どおりの光景が前面に広がっていた。実際に目で見た限り、近衛部隊は空飛ぶ魔物——ランギルダンに対して互角以上には戦えているように思えた。セシエはその獣の実物を見るのは初めてだったが、養成施設でその凶暴さと危険さは十分に聞かされていた。もしも彼女が部隊を率いずに単身でいたならば、迷わず近衛部隊の加勢に向かっていただろう。だが、四十名の兵士を預かっている彼女の決断は、その前方で敵主力の猛攻を支えている味方部隊への加勢だった。

「おお！ ありがたい、今にも切り崩されそうなのだ。貴官は？」

剣で応戦している長弓部隊の指揮官が、駆けつけたセシエに問いかける。

「私は王の『陰の影』です。下流の警戒地域で戦闘があつたのですが、敵は退けたものの士官が全員戦死しました。不在の指揮官の代わりに私が隊をまとめあげ、たつた今ここに駆けつけた次第です。私には用兵の心得がありませんので、貴殿に隊をお預けしてもよろしいですか？」

指揮官はそれを快く引き受けた。セシエは安心し、自身も剣を仲間には拝借して散兵として戦闘に加わった。

戦いは劣勢だった。重武装で数が多い敵主力に対し、軽装の少人数で応戦しているのだから当然と言えば当然だった。しかし、しばらく戦い続けるうちに敵の攻勢に若干の乱れが生じ始めた。

セシエはゆとりができたときに周囲を見渡してみても、その理由を理解した。リルニア王国軍の主力部隊が態勢を整えて、敵主力の背後から攻撃を開始していたのである。セシエの心には、希望の光が灯った。味方の主力が戦闘に加わったことで、戦力差がほとんど無くなったのだ。そして、互角ならば敵の前後を封じているリルニア軍が断然有利だということになる。

「我が軍の主力が敵の背後を取った！ 勝機は我々リルニア軍にあるぞ！」

目の前の戦いにばかり気を取られて、味方が敵背後を攻撃していることに気付いていない兵士たちにも状況がわかるよう、彼女は大声で叫んだ。その声は付近の味方に勇気を与え、敵を恐慌状態に陥れた。

戦況の変化に気付いた士官たちも、次々に激励の言葉を叫んだ。

やがて味方兵士のあいだから歓声とも取れるような大きな声が沸きあがった。すでにリルニア軍は気迫で完全に敵を圧倒しており、この軽装の部隊が敵を抑えさかれるのかという心配も、すでにどこかへ吹き飛んでしまっていた。両面から畳み掛けると、敵はわけもなく総崩れとなった。

敵主力が役割を果たせなくなった今、戦いの趨勢は決っていた。ガイゼル国王を襲撃したランギルダンたちも近衛部隊の奮戦によって全滅し、後方の憂いも無かった。

デルロイ伯爵の本隊は、主力が総崩れになったことを確認するや否や、転進を開始した。「全軍、追撃！」

好機と見て追撃の命令を発したのは、ウェルトン千人長である。一度はガイゼル国王の本隊を危険に晒してしまった千人長にとっては、汚名を返上する格好のチャンスだった。兵士たちにとっても低いリスクで勲功を上げる絶好の機会であることは、言うまでも無い。リルニア王国軍の主力は、隊列の乱れを気にかけることなく一斉に駆け出し、敵部隊に追撃をかけた。

主力部隊が敵本隊を追いかける姿を見て、ガイゼル国王は舌打ちした。

「伝令兵！ 追撃を停止するようウェルトン千人長に通達せよ」

ガイゼル国王の近衛部隊はすでに壊滅的な状況だった。この状況下で味方の主力が採るべき行動は、敵の追撃ではなく師団の立て直しである。主力を失った敵に、戦闘継続能力は無い。もはや無駄な血を流す必要はいっさい無く、ワレンハイトに逃げ帰ったデルロイ伯爵は政治的な手段で立場を追い詰めることが可能なのだ。若き士官であるウェルトンには、どうやらその辺りの大局的判断力が未だ備わっていないらしい。

「早く部隊を呼び戻すのだ！」

国王はそう叫ぶが、敵味方の入り乱れた一団はそのままイセール川へと突入してしまった。こうなってしまうのは、いくら国王命令であっても後退は困難である。

とはいうものの、川の中の戦いは、リルニア側が有利に進めていた。このまま押し切ってくれるかと期待を抱き始めた頃、事態は急変した。水棲魔獣アンギルたちが水中から現れ、リルニア軍に攻撃を開始したのである。アンギルたちの介入によって、敵味方、そして人と魔物が入り乱れた戦いは、まるで行方がわからなくなってしまうた。

「……隊列を立て直せ！ 我々は戦線を離脱し、オキレフの部隊との合流を試みる」

辛い決断だったが、ガイゼル国王はそう宣言するしかなかった。追撃に加わらなかった手勢だけで隊列を組みなおし、後方に接近しているはずのオキレフの部隊と合流するのが一番懸命な選択なのだ。イセール川で練り広げられる壮絶な戦いを最後まで見守っていたら、それさえもできなくなる可能性が高い。

「陛下、あれをご覧ください！」

寡黙な巨漢、『陰の影』ディアンドが川上を指差した。国王がその方向に目をやると、そこにはヴェルゲン男爵の紋章を掲げた軽騎馬隊の姿があった。

国王は我が目を疑った。第一師団と共同作戦を展開中であるはずのヴェルゲンの騎馬隊が、この場に現れたことがにわかには信じられなかった。しかも、その先頭にいる人物はヴェルゲン男爵が愛用しているものと同型の全装鎧を身に付けているのだ。ヴェルゲンの私設騎馬隊であるから彼と似た鎧を身に付けた者がいても不思議は無いのだが、彼がもしヴェルゲン本人だとすれば、彼の率いていた第一師団は一体どうなったのだろうか？

国王は眉をひそめ、彼らの行動を見守った。ヴェルゲンの軽騎馬隊の次の行動によって、ガイゼル王はすべてを悟った。デルロイ伯爵と同様、レグドル教国と領地を隣接させているヴェルゲン男爵が、デルロイ伯爵のようにレグドル教国と通じている可能性を配慮しておくべきだったと、今さらながら王は自分自身を責めた。

軽騎馬隊は信じられない行動に出たのである。すなわち、国王の部隊めがけて突撃を仕掛けたのだ。

「総員、突撃に備えろ！」ガイゼルは命令を発しながらも、あまりの事態に気が遠くなる思いがした。

もしもヴェルゲンがはじめから敵と通じていたとすれば、与えられた役割を第一師団が果たした可能性は低い。そして、疲弊した第二師団の近衛部隊が騎馬部隊を打ち破る可能性も限りなくゼロに近い。無論、オキレフが指揮している傭兵部隊も、所詮は傭兵ではないからさほど大きな期待もできない。つまり、リルニア王国がレグドル教団に完全敗北を喫する公算が極めて大きくなったということである。

近衛部隊は大きな動揺を見せた。ヴェルゲンの軽騎馬隊が寝返ったことがにわかには理解できていない様子である。いや、理解できないというよりは信じたくないという思いが強いのもかもしれない。だが、軽騎馬隊によって矢の雨を降らされた時点で彼らは現実を直視せざるを得なくなった。

近衛部隊は大楯を並べて激突の衝撃に備えた。

その直後、長槍を脇に抱えて突撃するヴェルゲンの私設軽騎馬隊と、重装甲に身を固めたリルニア近衛部隊が激しくぶつかり合った。

比較的軽装であるヴェルゲン騎馬隊からは、最初の衝突で落馬した者が大勢出た。だが、疲弊した近衛部隊にとっては、それでも脅威と言えた。ランギルダンとの戦闘によって近衛兵たちはすでに満身創痍だった。

「隊列を乱すな！　ここで切り崩されればリルニアに明日は無くなる！」

国王が激を飛ばし、近衛兵たちが死に物狂いで騎士団に立ち向かった。

*

*

*

「ウェルトン千人長！　ガイゼル国王が危険です！」

イセール川の中での戦いの最中、ウェルトンを見つけたセシエが叫んだ。

「この状況では我々にはどうしようもない。我々同様、近衛部隊とてどれほど攻撃に持ちこたえてくれるかはわからん。お前はガイゼル国王を救出して戦線を離脱するのだ！」

そう指示を出したウェルトンは、水中から突如現れたアンギルにいきなり腹部を鋭い爪で切り裂かれた。彼はその衝撃で武器を取り落としたが、震える手で自分の腰の短剣を引き抜くと、アンギルの首筋にそれを突き立てた。アンギルは声にならない不気味な叫び声をあげる。

「は……早く、行け！」血の泡を吹きながら、ウェルトンは声を振り絞ってセシエに命じた。セシエは黙ったままうなずくと踵を返した。

*

*

*

「今がチャンスだ。離脱するぞ！」

敵の混乱を目にして、デルロイ伯爵は自身の護衛兵たちに告げた。

「何をおっしゃっているのです！　一度前進と決めたなら、その方針を貫いてください。

今はガイゼルを仕留めるチャンスなのです。私がアンギルたちを追加で召喚したのは、あなたがたに戦闘を続行してもらうためです。あなたがたを逃すための捨て駒として召喚し

た訳ではありません」

デボラはデルロイの袖にすがりついた。デルロイは冷淡な目でデボラを見下ろした。「……知らんな。私はアンギルを召喚してくれと頼んだ覚えは無い。お前が勝手に召喚した結果、敵は混乱に陥ったがそれは私の感知せぬことだ。アンギルの援護があるうが無かるうが、これほどの被害が出てまで戦闘を続行させる言われはない。例えそれがレグドル教国の意向であってもな」

伯爵は自分の袖にすがりつく女の手を振り払って、サーベルを抜き放った。伯爵は切っ先をデボラの顔の前に突きつける。

「離脱に異論は無いな」

伯爵が低い声で肯定の返事を強要する。

「脅しのつもりですか」

デボラには、一切動揺した様子は無かった。むしろ、剣を向けられてから冷静さを取り戻したようにさえ見えた。

「先刻から申しておりますように、私はレグドル教国の代表としてここに存在しています。その私を脅すということは、レグドル教国を脅すのと同義です。おわかりですね？」

伯爵は不敵に笑った。

「それは、確かにそういうことになるのかもしれない。……だがな、ここは戦場だ。いくらレグドル教国の代表といえども、戦死してしまえば私の所作を本国に報告することはできない」

女が怒りに顔を歪め、サーベルを振り上げた男を睨みつける。

「死ね！」

伯爵は勢いよくサーベルを振り下ろした。

*

*

*

ランギルダンとの戦いで傷だらけの本隊は、ヴェルゲン男爵の騎兵部隊の襲撃を受けて劣勢を強いられていた。イセール川で戦うリルニア側の主力も、アンギルの猛攻にじわじわと圧されていた。

やがて戦闘の混乱で部隊は散り散りとなり、戦いは隊の編成が完全に崩れた大乱戦となった。敵味方が入り乱れ、周辺一帯が戦場となった。

「陛下あッ！」

重装の敵兵士の装備の狭間に突き刺した鎧通し短剣を引き抜きながら、セシエは叫んだ。この大乱戦によって、彼女は未だに国王を発見できずにいた。ディアンドが国王の護衛についているはずであるが、この大乱戦では無事でいられるかどうかはわからない。ひよつとすればディアンドが上手く立ち回って国王を戦場から離脱させているのかもしれない。だが、それを確認できるまでは搜索をやめるわけにはいかない。

セシエは近場に倒れてもがいているリルニア近衛兵が立ち上がるのを手助けした。重装甲の鎧は剣の攻撃には強い耐性を示すが、一旦倒れてしまうと重量によって自力で起き上がるのが困難なのである。その隙を敵に突かれてしまえばひとたまりも無い。

「……ありがとう、『陰の影』どの。すまないが俺の左手の手甲を外してくれないか？」

立ち上がった男の手甲に目をやると、鉄板が大きく窪んで腕を強く圧迫しているようだった。恐らく棍棒のような打撃武器で殴られたに違いない。

セシエは短剣で手甲の革紐を手早く切った。その瞬間、男は悲鳴をあげる。手甲の下のダブルレットは血に染まっていたが、複雑骨折のような悲惨な状況ではないように思えた。それでも男の苦しみようを見ると、骨にヒビくらは入っているのかもしれない。

「た、助かった。腕がやられていて、起き上がるうにも踏ん張りが利かなかったのだ」

「陛下はどこ？」セシエは彼に尋ねた。

「ヴェルゲンのクソヤロウから逃げ回っているところだろう。俺はこのザマだが、今はまだ近衛兵が持ちこたえているはずだ。だが、急いだほうがいいな。……危険だが、ヴェルゲンの旗を目指せば必ず合流できるはずだ」

セシエは感謝の意を述べ、武器を失った彼に自分の武器を手渡した。

「君は？」

立ち去ろうとするセシエに、近衛兵は心配そうに尋ねた。

「心配いらぬわ。私は戦闘中でも調達できるから」

彼女は簡潔にそう説明したが、『陰の影』は衣服の隠しの中にも特殊武器を潜めているし、武器が無くとも体術だけでそれなりに戦えるように仕込まれている。むしろ、量産された一般的な武器は、彼女にとって消耗品でしかなかった。

「俺は可能な限り敵兵を道連れにする。……陛下を頼んだぞ！」近衛兵が叫んだ。

装備が重い近衛兵の足では、『陰の影』に同行すれば足手まといになるだけである。それに、手負いの身で国王のもとに自力で戻ることが困難なことを、近衛兵は知っていた。

「任せて」

セシエは振り向いて近衛兵に微笑みを見せると、ヴェルゲンの旗を掲げる騎馬隊を目標に駆け出した。

武器を持たずに戦場を駆け抜けるセシエの姿を見て、格好の標的を得たりと彼女に向かっていった戦士は、彼女の見事な体捌きで腕と首をへし折られ、無残な死を遂げた。彼女は不気味な痙攣を続ける男の手から長剣をもぎ取ると、再びヴェルゲンの旗を目指して駆け出した。

*

*

*

また一人、近衛兵が力尽きてその場に倒れ伏した。
「……まずいですね」

右肩に矢が突き刺さっており、左手で長剣を構えている『陰の影』ディアンドが口を開いた。どちらの手でも武器を取り扱えるように訓練を受けているディアンドだったが、右肩からの出血が彼を弱気にさせているらしかった。

「私もそろそろ年貢の納め時かもしれん」国王が周囲に気を配りながら口を開く。すでに二人とも騎馬を無くし、満身創痍だった。

「……私が退路を切り開いて見せますよ」ディアンドはそう言って、倒れた近衛兵が作った防御の穴から斬り込んできたヴェルゲンの騎馬兵の前に立ちはだかる。

彼は手にした長剣で迷うことなくその馬の前足を斬り払うと、馬とともに地面に倒れた

兵士を長剣で突き殺した。

ディアンドの一時の妙技に恐れをなすことなく、さらに二騎が彼に襲い掛かる。ディアンドは長剣から手を離し、服の隠しに忍ばせていた投げナイフを三本まとめて引つつかむと、それを投げつけて一人を落馬させることに成功した。そして彼は、急接近してきたもう一騎を視界の正面に据えた。その騎馬兵は槍を構えて突進したが、ディアンドはその槍を寸前であわして懐に潜り込むと、すれ違いざまに鎧のわき腹の継ぎ目に短剣を突き立てた。

臓物を撒き散らせながらも、男は騎馬から落ちることはなかった。ディアンドはその男にはもう目もくれず、ナイフを受けて落馬した男の上に馬乗りになった。そして、迷わず敵兵の首を掻く。

男の動脈から脈打って噴出した血が、『陰の影』を紅に染める。

「次に死にたい奴は誰だ！」

立ち上がりながら、ディアンドは凶暴な獣の咆哮とも思えるような声で叫んだ。その後方では、内臓をあたりに撒き散らした騎兵が味方の近衛兵たちにめった刺しにされていた。

さすがに三騎もの騎馬兵を一瞬にして葬られると、ヴェルゲンの騎馬部隊も少々臆したようだった。勢いだけでディアンドの前に飛び出そうという無謀な男はもういなかった。

「陛下！」

女の叫ぶ声に、近衛兵たちは一瞬体をこわばらせたが、その声の主がもう一人の『陰の影』であることを知ると、彼らは少し緊張を解いた。

敵兵の一団を割って現れたセシエは、近衛兵がすでに少数しか残っていないことに驚いた。しかも皆、手負いである。

彼女はガイゼルのもとにたどり着くと彼に向かって略式の敬礼をし、微かに眉をひそめた。彼は馬を無くし、全身傷だらけだった。国王を狙って多くの敵が攻撃を試みたのだということが想像に難くなかった。近衛兵たちとディアンドの奮戦が無ければ、国王はすでにこの世にいなかったに違いない。

国王はセシエを見て、大きくうなずいた。

「よくぞ戻ってくれた」

「遅くなりました、陛下。ただいまより陛下の護衛の任務に就かせていただきます」

セシエは国王の傷に緊急の手当てが必要なものがないのを見て取ると、踵を返してディアンドの横に並びかけた。

「状況は？」ディアンドのほうをちらりと見てセシエが尋ねる。

「良くないな。俺もしくじって右肩に矢を受けちゃった。出血で少しばかり目がかすむが、戦えないほどじゃない」

「……背中を預けても大丈夫かしら？」

「まかせな」

ディアンドの返事を聞いてうなずくと、セシエは後方を振り返った。

「私とディアンドで活路を切り開きます。近衛兵は全員、国王陛下の周囲を固めつつ、我々のあとに続いて移動してください！」

『陰の影』は潜入や間者、暗殺術のプロであって、戦闘について言えばよく訓練された騎士ほどの技術は無い。もし剣術試合をして、同じ武器で正面から正々堂々と戦えば、十

試合中一本でも騎士に勝てれば良いほうだろう。だが、ルール無用の戦場においては、彼らは剣の技術だけでなく自分の持ちうる様々な体術や特殊技能を駆使して戦いに臨むことが可能なのである。彼らは戦場のあらゆるものを武器として利用できるし、また、卑怯だとか姑息だとか言われるような手段や作戦を選ぶことに何のためらいも無い。彼らは単独でも十分な強さを発揮するが、連携したときにはさらに恐ろしい存在となる。

ヴェルゲンの騎馬兵団は賢明だった。二人の『陰の影』が反撃に出ると見るや、急いで近衛部隊への攻撃を中断して距離を取った。

その騎馬部隊の一时的な後退によって、大きな手柄を立てるチャンスを得た気になったデルロイの兵士たちは、愚かしくも二人の『陰の影』の前に飛び出していた。

「いくぞ！」

ディアンドとセシエは立ちふさがる敵たちを切り伏せ、文字通り『血路』を切り開いていった。型にはまることのない二人の鬼神のごとき戦いは、敵兵たちを震え上がらせた。次第に、誰も『陰の影』には近寄らないようになった。敵は皆、こちらを遠巻きに包囲しているだけだ。

これなら何とかして戦場を離脱できるかもしれないとセシエが感じ始めたとき、彼女の耳に女の嘲るような高笑いがかえった。

「……アンタの部下どもは、不甲斐無いヤツばかりだねえ」

デルロイ伯爵軍の兵士たちはその声のする方向に目を向け、凍りついた。

乱戦のさなか、戦場のど真ん中をデボラとデルロイ伯爵が並んでこちらに向かって歩いて来ていた。デボラは伯爵の首もとに短剣を突きつけており、二人はそのままの状態で『陰の影』たちの進路を塞いだ。

デボラは伯爵を突き飛ばして転倒させ、スッとガイゼル国王のほうを見据える。

「お久しぶりです、ガイゼル様」演技じみた大げさなお辞儀をデボラがして見せると、近衛兵たちに囲まれていたガイゼルの顔色が変わった。

「……お、お前は、ディボレイアではないか！」国王の口から、聞きなれない名前が漏れる。

「今の私はデボラですわ、閣下。いえ、陛下とお呼びすべきなのでしょうね？ レグドル教国で話されるマハロマ語ではディボレイアという発音が困難なため、かの地では私はデボラと名乗っておりますの。ランドール人が魔力と恐れる力も、かの地では能力として快く受け入れられ、私も今では四賢院の一員として名を連ねております」

突っ伏していたデルロイ伯爵が、起き上がりながら口を開いた。

「貴様が四賢院の一員だと？ 馬鹿なッ！」

伯爵が驚くのも無理はなかった。四賢院というのは、レグドル教国の中枢部を担う機関のひとつである。名こそ有名であるが、彼らが表立って動く機会は少なく、ランドール諸国ではその実体をほとんど掴めていないのが現状だった。唯一分かっていることといえば、力のある四人の魔術師によって構成されているということくらいであるが、デボラは今、自分がそのうちの一人であることを明かしたのだ。デルロイ伯爵は、まさか彼女がそれほどの重要人物だとは思っていなかったに違いない。

「同盟を申し出てきた相手の調査を、信頼の置けない下っ端に任せるわけにはいきませんからね」

デボラは不敵な笑みを浮かべた。

「伯爵が同盟を申し出る前にも、私は一件の調査を行なったわ。カンタレアのヴェルゲン男爵よ。彼は同盟ではなくレグドルの傘下に入ることを望んでいた。彼はあなたとは違って、私の魔力に屈して欲望に溺れないだけの強い意志を持っていたし、何よりも才能のある人物だった。そして、その才能を生かせる場がレグドル教国であることを彼は知っていたの。」

それに比べたらあなたは意志が弱く優柔不断で臆病だったし、レグドル教国の本質を理解していなかった。あなたは自分の力も国の力も十分でないのに、レグドル教国と対等の関係を望んだ。そんなもの、とても無理な話よ。

レグドル教国はデルロイ伯爵と同盟を結ぶよりも、リルニア攻略の橋頭堡としてワレンハイトを手に入れたほうが賢明であるとの判断を下したわ。リルニア攻略はそのための格好の餌だったというわけ。リルニア攻略と称してデルロイ軍をワレンハイトから駆り出し、リルニア軍にアンタの軍勢を始末させれば、後は我々がワレンハイトを占領すればそれで終わり」

その言葉を聞いて、デルロイの顔から血の気が引いたようだった。

「し、しかし、リルニア平原を丸ごと手に入れられる状況で、なぜ我がワレンハイトだけを奪う気なのだ？」

「今はまだ時期じゃない。私たちは前回の侵攻で学んだの。リルニア平原は勢いで攻め落とすのでなく、徹底的に叩いて心から屈服させる必要があるとね。」

今回の我々の狙いは、いずれ来るリルニア平原進攻の日のための橋頭堡の確保と、リルニア平原のカリスマ的な統治者であるガイゼル国王の命だけよ。ガイゼル王のいないリルニア王国など恐れるに足りませんからね」

そう言ってくすくすと笑う彼女に、デルロイ伯爵軍の一人の兵士が矢を射掛けた。だが、彼女を狙った矢は、彼女の眼前で不自然にぐにやりと軌道を変えてしまう。彼は震える手でもう一射してみたのだが、結果は同じだった。

彼女が睨みつけると、その兵士はすくみあがって動けなくなってしまった。

「リルニアの雑魚二人すら片付けられないお前たちが、私を倒せるとでも思っているのかい？」

デボラはデルロイ伯爵を軽々と片手で抱え起こした。

「リルニアの別働師団を打ちのめしたレグドル教国軍の部隊は今頃、中央街道を引き返してワレンハイトの無血開城に向かっているはずよ。あなたのおかげでワレンハイトとガイゼル国王の命、その二つを同時に手に入れることができそうだわ。……だけでもう、あなたは用無しなの」

彼女が短剣で伯爵の太腿を切りつけると、そこからは血が流れ出した。動脈を傷つけているのか、おびただしい量だった。伯爵軍の兵士のあいだからは、悲鳴にも似た声が上が

る。

「どうせだからあなたのことは、最期の瞬間まで有効活用させてもらうことにするわ」
デボラは伯爵を殺し、彼自身と彼を慕う者たちの感情から『呪』を引き出すつもりなのである。

「ガイゼル・アルディエルド！」
デルロイ伯爵が苦痛に耐えながら叫んだ。

「私は今でも我がワレンハイトを貴様に引き渡したいとは思わん。貴様が昔、我が領地の村を焼き払って大勢の人間を無差別虐殺した時、私は貴様の非道さにひどく憤慨した。血も涙もない男だと思った。しかし、あの村が本当にレグドルの拠点だったとすれば、レグドル教国の本性を知った今、私がおもいと同じ立場に立たされたとすればきつと同じ選択するはずだ。ガイゼル・アルディエルドよ、恐るべきレグドル教国との同盟などと、私はどうやら取り返しつかない大きな過ちを犯してしまったようだ。……本当にすまなかった」

彼が素晴らしい終えるや否や、デボラは伯爵の喉を引き裂いた。近くにいた伯爵軍の兵士たちは絶叫した。伯爵の断末魔の苦痛、彼の兵士たちの何もできぬ悲哀、血の凍るような行いへのリルニア兵の憤怒、それらの感情が混ざり合い、溶け合い、常人でも感じ取れるほどの膨大な量の『呪』があたりを立ち込めた。

彼女は冷笑を浮かべると空気を求めてもがき苦しむ血みどろの男を投げ捨て、印を結んだ。デルロイの体から流れ出した血が、地面に魔方阵を描く。デボラは動作を交えながら不気味な呪文を唱え始めた。

「きさま！」

正気を取り戻したものがたちが、彼女への攻撃を試みる。しかし、彼らの放った矢は不自然な軌道で的を逸れ、彼らが斬りつけた刀剣は彼女に命中する前に粉碎された。

兵士たちがなすすべもなく見守る中、伯爵は痙攣を始め、やがてこと切れた。悲壮感が漂う中、彼女は詠唱を終えた。一瞬にして周囲がまばゆい光によって包まれ、戦場はダオルグたちで溢れかえった。

「ダオルグよ！ アンギルよ！ リルニア王国軍とデルロイ伯爵軍の雑兵どもを蹴散らすのだ」

彼女が高らかに命令を発すると、獣が発する不気味な関の音が戦場に響き渡った。

「……さて、ガイゼル様には私がじきじきに引導を渡してさしあげましょう」

彼女がそう言って国王を睨むと同時に、ディアンドとセシエが彼女の前に立ちはだかった。『陰の影』たちとしては、ガイゼル国王が殺されることを黙ってみているわけにはいかなかった。

ディアンドはセシエに目配せをする。

「お前は陛下を連れて逃げる。コイツは俺が引き受けた」

「で、でも」

「早くしろ！」 ディアンドは大きな声でセシエを怒鳴りつけた。

セシエは無言で頷き、国王の元へと駆け寄る。近衛兵たちもちゃんと自分たちの役割を心得ていて、二人が通るための道筋を自分たちの武器で切り開いていった。

「陛下、行きましょう」

セシエがガイゼル国王の手を引いて進んでいくのを確認し、ディアンドはデボラのほうに引き直った。

「私の邪魔をするとどういったことになるか、体で思い知るがいいわ」

そう言って彼女が手のひらをかざすと、矢が刺さっていたディアンドの右肩から、おびただしい量の血が噴出した。

ディアンドは絶叫するが、さすが『陰の影』の訓練を修了しただけのことはあって、激痛によって気絶するほど脆弱ではなかった。それでもやはり、大量失血は致命的な事態で

ある。彼はもう自分が生き残ることは考えていなかった。刺し違えてでもデボラを地獄に引きずり込もうと考えていた。

男は獣のように吠えて女に襲い掛かった。女はさっきの術で十分対処できると考えていたのか、少し油断していたらしかった。突然彼が反撃に出たことに、女は何の対処もできない様子だった。

ディアンドは勝ったと思った。彼は力の限り手にした剣を振り下ろした。

しかし、剣は彼女には当たらなかった。彼女が剣を避けたのではなく、剣が彼女を避けた。磁石が反発するような力が働いて、剣は彼女を避けた。

「馬鹿な」

彼は冷静に対処して二撃三撃と攻撃を繰り返したが、結果は同じだった。さっき兵士たちが繰り返した攻撃と違って、彼の攻撃は完全に不意打ちだった。だからこそ彼は、デボラの防衛が間に合わないだろうと予測していたのだが、彼女は見事に攻撃を防いじまった。

「さすがというべきかしら、あれだけの血を流してこれほど機敏に動けるんですね。不意を突いた攻撃というのはいけません。残念ながら私には無意味だったわね。私をひどく動揺させて集中を断ち切らなければ、私の魔法障壁は揺らぎさえしないわ。ご愁傷様でした」

彼女はもう一度手のひらをかざして念を込めた。ディアンドの肩からは、またしてもおびただしい量の血が噴き出した。失血があまりにも多すぎて、今度はさすがの『陰の影』も立つてすらいられなくなった。だが彼女は魔法を弱めようとはしなかった。彼の肩口の傷からは延々と血が流れ出し、彼の体は痙攣を始めた。ディアンドは目を白黒させてこの世のものならぬ苦しみと格闘していた。デボラは残忍な笑みを浮かべ、男が失血するまですつと魔法を解かなかった。

国王を戦場から脱出させるだけの十分な時間は得られなかった。近衛兵が立ちほだかるアングルと激戦を繰り返していたとき、後方からデボラが追いついてきたのである。

「逃がさないわよ」

長衣一枚で防具も身に付けずに堂々と戦場を歩く女性の姿は、とても違和感があった。敵にも味方にも、彼女の歩行を遮ろうとする勇氣のあるものはなかった。

味方の兵士はアングルやダオルグの攻撃を支えるので精一杯で、彼女に立ち迎えるのは自分ひとりしかないと思っただけだった。

彼女は喉を鳴らして唾液を呑み込もうとしたが、うまくできなかった。彼女は死を強く意識した。ディアンドが容易く打ち負かされるような相手を、自分がどうこうできると思えなかった。それでもセシエは長剣を構えてガイゼル王を庇った。

「あら？ またあなたなの？」デボラは少し嬉しそうな様子である。

「邪魔をするつもりならそれなりの覚悟はしてもらわないとね」

彼女はそう言って手を差し出した。だが、セシエだって尻尾を巻いて逃げ出すわけにはいかなかった。長剣を握る手が汗でびっしょりだった。

「待て、デイレイア！ この子を殺すことはまかりならん！」

セシエの背後から、ガイゼル・アルディエルドが叫んだ。

デボラは王のその反応に驚いているようだった。セシエは油断無くデボラの一挙手一投足に目を光らせる。

「おやおや、国王を守るはずの『陰の影』を、国王が庇いだてなさるのですか？ そんな話は初めて聞きましたわ。『陰の影』が国王の愛人か何かだとすれば、いっそう殺し甲斐もあるというもの。さあ女、かかってきなさい！」

デボラは馬鹿にしたように手を広げて、完全に無防備な姿勢をとった。誘引と分かっている、セシエは何もしないではいられなかった。

「馬鹿！ よせ！」 ガイゼルが叫んだ。

彼女は大きな声をあげて、デボラに襲い掛かった。女はやはり避けようとさえしなかった。

セシエが突き出した剣は一直線にデボラの腹部めがけて進んだが、例によつて寸前で急に軌道を変えてしまうのだった。セシエは大きく姿勢を崩した。

「残念でした」デボラはそう言うと、前のめりになったセシエに魔力を込めた拳で胸部を殴りつけた。軽装の『陰の影』であるが、布地の下には金属が埋め込まれていてそれなりに防御効果がある。だがセシエは今までどんな巨漢に殴られたときにも感じたことが無いくらいの激しい痛みを覚えた。あばら骨にヒビの一つや二つくらいははいっているかもしれないなかった。

セシエは武器を取り落としてその場に崩折れ、うずくまった。彼女は咳と痛みでちゃんと呼吸ができなかった。

そんな彼女を、デボラは左手で胸ぐらを掴んで持ち上げた。女の力とは思えないほど軽々と持ち上げていた。空いた右手には、また新たな『呪』を集束させている。

セシエは歯を食いしばって女の顔を睨みつけた。すぐそこに迫った死は避けて通れないらしいと覚悟はしていたが、最後の最後まであきらめる気は無かった。

「楽には死ねないわよ」

デボラは左手でセシエを掴み上げたまま、反対の手で何度も繰り返しセシエを殴りつけた。その一撃一撃がさつきの一発目と変わらぬほどの威力を持っていた。

デボラとガイゼル国王のあいだにどんな怨恨があるのかセシエは知らなかったが、国王が庇おうとした女性を殴打してなぶり殺しにすることが、デボラにとっては最高の悦楽であるのは間違い無さそうだった。

殴られながらも、セシエには疑問に思うことがあった。

（ガイゼル国王は私ごときのために、どうしてそこまで取り乱すのだろうか？）

セシエが薄れ行く意識の中で目にしたデボラの顔は、恍惚とした色を帯びていた。まさに狂気そのものだった。

「とどめよ」

デボラは意識を失いそうなセシエの表情を見て、気絶するよりも先に致命傷を与えるつもりらしかった。彼女は狐のような鋭い瞳でセシエの顔を見据え、拳を握りしめた。

「やめるのだ、デイボレイア！」

そうガイゼルが叫んだ瞬間、セシエが頭をうなだれる。そのガクリという衝撃で、セシエの首にぶら下がった首飾りが——見栄えのしない白っぽい小石がついた首飾りが、彼女の胸元から飛び出したのだった。

これはセシエが幼かった日、父から別れ際に受け取ったものだ。他の人から見れば何でもない安っぽい首飾りであったが、それを見た瞬間、デボラの目の色が変わった。

彼女は驚きと混乱で、思わず左手で掴んでいたセシエを取り落とした。セシエは地面に

体を打ちつけ、そのままうつぶせに倒れる。

「……な、なぜお前がそれを！」

暗闇で仄かに光る石ではあるが、昼間に目にすればただのみすぼらしい石でしかない。だが、デボラにとってこの石は大きな意味のあるものだった。デボラはひどく狼狽し、その石が自分の思う石と同一のものかどうか、もう一度確かめようと震える手で地面に突っ伏した女の肩に手を伸ばした。

セシエは先ほど地面に落下した衝撃で、失いかけていた意識を完全に取り戻していた。

デボラの手が自分の肩に触れた瞬間、彼女は行動を起こした。

デボラは大きな悲鳴をあげた。

セシエは差し伸べられたデボラの手を引っつかみ、自分の服の隠しにねじ込んであった小型の手投げナイフで彼女の腕を切りつけた。突き刺す目的で作られ、しかも投げて使うためのバランスで設計されたナイフであるから、それほど深くは切りつけられなかったが、長衣の上からであっても確実に上腕動脈に触れた手ごたえはあった。

デボラは石を目にしたことでひどく狼狽し、自分を覆っていた魔法の障壁が弱まっていたことに気付いていなかったのである。今回の攻撃はすんなりと彼女の腕に命中し、彼女の長衣は見る見る鮮血で染まっていた。

セシエは彼女に立て直す隙を与えず、馬乗りになってナイフであと数箇所動脈を切り裂こうとした。

「セシエ！ やめろッ！」 ガイゼル国王が今度はセシエに向かって叫んだ。

今度はセシエが狼狽する番だった。ガイゼル・アルディエルドに二十年ぶりに「セシエ」と呼ばれたのだから、無理もなかった。セシエは敵に馬乗りになっているにもかかわらず、思わず国王のほうを振り返ってしまった。

「セシエ！」

次に国王がそう叫んだとき、それは警告の色を帯びていた。セシエは慌ててデボラのほうを振り返る。だが、すでに遅かった。デボラの手ひらが自分の腹部にかざされているのを見て、セシエは今度こそ自分は死ぬなど感じた。

デボラは手のひらから、強いエネルギーを発した。

だが、そのエネルギーは先ほどのような痛打ではなかった。むしろ、ただ自分の上からセシエを押しのけるためだけにエネルギーを使ったという感じだった。デボラほどの使い手であれば今の一撃でセシエを殺せたかもしれないのに、彼女はそれをしなかった。

セシエは魔法の力で吹き飛ばされ、ガイゼル自らがその彼女を受け止めた。セシエは彼の助けを借りて立ち上がると、デボラのほうを睨みつけた。

デボラのほうも、切りつけられた右腕の上腕部を抑えながら立ち上がっていた。だらりと垂れた右手からは、ぽたりぽたりと血が地面に滴り落ちている。

「こんな再会をするだなんて……」

苦々しい表情でつぶやくデボラを、セシエは相手にするつもりは無かった。

セシエは魔法についてそれほど詳しいほうではないが、魔法の力が全身の動作で誘引するものであることくらいは知っていた。片手を切られ、反対の手でそれを止血している今の状況ならば、デボラはまともに魔法を使えないはずだ。

セシエは腰の短剣を引き抜いて構えた。哀絶の表情を湛えたデボラも血だらけの右手で

印を結んだ。

そんな二人のあいだに、一頭の馬が割り込んだ。全装鎧を身に付けた、ヴェルゲン軽騎馬隊の指揮官である。彼は兜に手をかけ、面頬をあげた。

「ヴェルゲン、貴様とんでもないことをしてかしたな」ガイゼル国王が鎧の男に向かって口を開いた。面頬の下から現れた顔は、ヴェルゲン男爵その人であった。

「辺境の領主で収まっているのはかなり退屈でしょね。若気の至りなのか、少々無茶をしてみたくないのですよ」

ヴェルゲンはそれだけ言うと、彼は馬を下りてデボラのほうに向き直った。

「その傷は放置すると危険です」

デボラがうなづくのを確認し、彼はすぐさま止血作業に取り掛かる。その間ずっと彼は無防備な状態だった。それを補うように、四騎の軍馬が二人の周囲を堅めている。

「デボラ様、すぐに馬にお乗りください。応急処置はしましたが、ここでは満足な手当てをできません」

肩の辺りを布と棒を用いて固く締め付けたあと、ヴェルゲンが言った。もうデボラの長衣は半分ほどが血で染まっていた。動脈の損傷は、応急処置の遅れが命取りになりかねない。

セシエにはもはや選択の余地はなかった。彼女は国王の手を引いて急いでその場から逃げ出したのだった。短剣で彼らに斬りかかっても、返り討ちに遭うのは目に見えているからだ。

遠ざかるセシエの後ろ姿を見て、デボラは寂しそうな表情を浮かべた。

「デボラ様？」

馬の背にあがるうとする姿勢のまま動かなくなったデボラに、彼女を押し上げようとしていたヴェルゲンが怪訝そうな顔で尋ねた。

「……いえ」

デボラは鎧に足をかけると、馬にまたがった。その瞬間、傷口が脈打つようにズキズキと傷んだ。ヴェルゲンがしっかりと腕を縛っていないければ、血液が噴出していたかもしれない。

男爵は彼女の後ろに急いで腰を降ろすと、馬に拍車をかけた。

「急いで天幕までお連れします。ご心配にはおよびません、カイゼル王の追跡は我が部隊にお任せください」

彼女はうわの空で返事をした。彼女は失血で意識が薄れゆくを感じながら、怪我をしていないほうの手を懐に滑り込ませた。その手が、長衣の隠しに大切にしまわれた小石の首飾りを掴む。セシエが持っていたものと酷似した首飾りだ。

「あなた……」

デボラは目を閉じて、遠い記憶のかなたを思い返していた。

*

*

*

……デボラは十代だった。彼女がまだランドール人のデイボレイアとして、ごく一般的な生活をしてきた頃の記憶である。

ある日のこと、彼女は誰も触れていない杯が勝手に倒れるという不思議な現象を目の当たりにしたのだった。その時は偶然だと思っていたのだが、彼女はそれに類する不思議な現象を、その後何度も繰り返すことになる。それらの奇妙な体験が目の前で繰り返されるうち、いつしかそれが魔法の作用であると彼女は気付き始める。しかも、その魔法は自分が引き出しているらしいということに気付いたのである。

ランドール人の国では、魔法使いの存在は極めて特異なものだった。魔法は偏見の対象であり、魔法使いは森の奥や人里離れたところに隠れ住むか、傭兵や冒険者に身を落とさなければ生きていくことが許されなかった。街で普通の生活を送ることなど、とても許されることではなかった。

デイボレイアの父は軍の将校だった。厳格な父に、自分が魔法の才を持っているらしいということを知った彼女は打ち明けられなかった。母親はすでに他界していたので、彼女が唯一心を許せたのは幼馴染みの男性だけだった。デイボレイアは自分の魔法の秘密を彼に打ち明けたのである。

父がフィアンセと決めていた男性よりも、幼馴染みの彼にデイボレイアは心を寄せていた。彼女が期待していた通り、その幼馴染みの男性は親身になって自分と一緒にその問題を考えてくれたのだった。

そして彼との話し合いの中で、一つの結論が出た。ランドール人の国ではないレグドル教国ならば、魔法使いは敬遠されるどころか重宝されるので、二人でレグドル教国に逃げた。そこで暮らそう、と。

二人は駆け落ちのような形で街を飛び出したのだった。しかし、ランドール人と敵対関係にあるレグドル教国の勢力下に、いきなり飛び込んでいくだけの勇氣は二人には無かった。下手をすればスパイ嫌疑でもかけられて処刑されてしまうかもしれないからである。

二人はレグドル教国の支配下には足を延ばさず、近隣の街々で情報を仕入れた。そして手に入れた情報をもとに、ランドール人の勢力下でゲリラ的にレグドル教国を支援しているという村に足を運んだ。

その村は傍目から見れば何の特徴も無いランドール人たちの村であるが、噂によればレグドル教国の自由な気風に賛同する者たちが多く集まっているらしい。

村は期待どおりの村で、事情を話すと村長はデイボレイアと男性を快く迎え入れてくれたのだった。二人はそこで晴れて夫婦となった。村長はデイボレイアには魔法を自在に制御するための訓練の機会を、夫には仕事を与えてくれた。

初心者にとって、魔法のエネルギーを集束させることはとても困難なことである。何も無い場所に集束させるとなれば、より一層難しくなる。それで彼女は、手始めに道端に落ちていた拳くらいの大きさの石ころを焦点具として用い、魔法の練習を始めたのだった。

最初は上手くいかなかったが、やがて彼女は大量の『呪』を集束できるようになった。ある日、石は彼女の集めた『呪』の量に耐え切れずに四散してしまった。

偶然に、彼女は破片となったその石が暗闇で仄かな光を放っていることに気付いた。何度も繰り返して練習に使っていたために、破片にはごくごく微量の魔力が宿っていたらしかった。魔力といっても、相当に注意を払わなければ感知できないほどごく微量なものである。当然、照明に使えるほどの明るさは無く、あらゆる面において実用価値は皆無だった。だが、彼女にとってそれは意図的で無かったにせよ、自分が初めて魔力を封じ込めた

記念の品となった。

彼女は見る見るうちに魔法を上手く制御できるようになっていった。石のような焦点具が無くとも、ある程度の量なら何も無い空間にだって魔力を集束できるようにまで成長した。もうこの村には、彼女に十分な手ほどきができるほど優れた呪術の使い手はいなかった。

村で一年少々の歳月を過ごした二人だったが、彼女は一大決心をしてレグドル教国で本格的に魔法を学ぶことを決心した。村での仕事がある夫と、夫とのあいだに授かった生後間もない娘を連れて行けないのは心残りだったが、決意は揺るがなかった。

幸いなことに、生まれた子どもは近所に住む二人の若い乳母が面倒を見てくれることとなったので、育児についても心配はいらなかった。

デイボレイアは思い出の石の破片を加工し、二つの首飾りを作った。離れていてもお互いが傍に居ることを実感できるようにと、夫とお揃いの首飾りを作ったのである。駆け落ちしたときから今日までの、二人の様々な思い出が詰まった宝物だった。

彼と結ばれたのは、自分に魔法の才があったからこそだった。自分と夫とを結び付けてくれた魔法の才に、彼女は心から感謝していた。授かった魔法の力を極めることが、自分たちをより一層幸せにしてくれると彼女は信じて疑わなかった。期待を胸に抱き、デイボレイアは村を後にした。

「こつちのことは心配しなくていい。自分を信じて精一杯やってみろ、デイボレイア」
去り際、笑顔で見送りをしてくれた彼に、デイボレイアは言った。

「あなた、あの子をよろしく願います。……私が一人前になって帰ってくるまで、二人にはとても寂しい思いをさせることになるけれど、私は絶対に立派になって帰ってきます。だから、それまで辛抱して待っていてくださいね」

感情が高ぶった彼女は、それだけを口にするのがやっとだった。男は大きく頷き、最後まで笑顔のまま彼女を送り出した。

セシエは後ろにガイゼル国王を乗せた馬を疾駆させ、戦場を離脱していた。

たった一頭の馬を手に入れるために何人もの近衛兵が死に、生き残った者たちも体じゅうに新たな傷を創ることとなった。セシエやガイゼルとて例外ではなかった。特にセシエはデボラの殴打を食らってからのというもの、激痛と腫れでいつものような機敏な動きができないでいた。それでもセシエはようやく手に入れた馬を無駄にしないため、自らの体に鞭打って可能な限り素早く立ち回った。

戦場を離脱するときを追っ手がかかったが、それは最後まで随伴していた近衛兵たちが何とか食い止めてくれたようだった。

多くの犠牲を払って手に入れた馬を、セシエは精一杯駆り立てた。近衛兵が身を挺して追っ手を食い止めてくれたといっても、やがては新たな追っ手がかかるはずなのだ。急いで逃げる必要があった。もちろん全速力というわけにはいかない。二人乗りの状態で全速力を維持すると、早く馬を潰してしまうことになる。

戦場を去るとき、ざっと見渡しただけでも戦いの趨勢は確定的だった。デルロイ伯爵軍は大将を喪って潰走をはじめ、リルニア王国軍は絶え間無い戦いで疲弊しきっていた。レグドル教国軍の手先の魔物たちに、人間たちは翻弄されている様子だった。

デルロイ伯爵軍とリルニア王国軍を先に潰し合わせ、消耗したところを一気に殲滅してしまう汚いやり口だった。レグドル教国軍の姑息なところは、その仕上げの殲滅ですらダオルグやアングル、内通したヴェルゲン男爵の部隊に任せ、正規軍はいつさい血を流していないところである。

レグドル教国は近年、西部戦線の膠着状態打破に力を注いでいるから、ひよつとすればリルニア平原に十分な数の正規軍を投入するほどの余力がなかっただけのことなのかもしれないが、そんな状況でもこれだけリルニア王国を翻弄するのだから、レグドル教国という国は恐ろしい国だった。

日が完全に沈んだ頃合いを見計らって、セシエはサン・ルブラール山道に差し掛かる分岐路で馬を乗り捨てた。馬は意図して東側の迂回路の方向へと駆けさせ、自分とガイゼルは痕跡を残さないように暗い森の奥へと慎重に進んだ。オキレフ王子の傭兵部隊が近くまで迫っているという話ではあったが、すぐさま合流できる可能性を信じて山道ルートに直行することはしなかった。

彼らと素早く合流できれば確実に国王の安全は確保できるが、一日二日経っても合流できない可能性だってあるのだ。合流するよりも早くに追っ手に追いつかれてしまったら、それこそ一環の終わりだった。

それに、急いで逃走できない理由もあった。国王は切り傷を多く創っていたから、なるべく早く応急手当をしなければならぬのである。無理して追っ手を撒いたとしても、失血や怪我の熱で国王が死んでしまったら、何の意味も無い。

こういった状況では、発見されにくい森の奥深くで手当てを済ませ、数日間隠れておいて、安全が確認されてから森を出るとするのが賢明だった。

ガイゼル王は切り傷の影響からか、少し熱を帯びているようだった。長時間ガイゼルを連れては歩けないなと思いつながら、セシエは真っ暗で何も見えない森の中を進んだ。目を

開けようが閉じようが、視界は何の変化も無いただの真つ暗闇だった。頼りになるのは手や足からの触覚情報と、研ぎ澄ませた耳から聞こえる聴覚情報だけである。

「この音……」

彼女は音を頼りに進むと、そこに小川のせせらぎを見つけた。イセール川と源流を同じくする川なのかもしれないが、この小川は軽くまたいで越えられるほど小規模なものだった。暗くて水が澄んでいるのか濁っているのかすらわからなかったが、匂いで判断する限りは飲み水として問題無さそうだった。

セシエは手探りで適当な木を見つけ、その幹にガイゼルをもたせかけた。その瞬間だけ彼は軽くうめき声を発したが、あとは静かだった。

セシエは腰に固定した革バッグの中から空の水袋を取り出すと、小川の冷たい水をそこに満たした。続いて、彼女はマメ科の植物を煮出した汁で染めたと特殊な布をバッグから取り出すと、その布で水袋の注ぎ口を縛った。

彼女は水袋を傾け、布から滲みだした水を一滴舐めてみる。

特に鉱物が混ざったような味もしなければ、舌を刺すような刺激もない飲みやすい水だった。水袋の口に巻きつけた布の染料には殺菌作用があり、また、きめが細かく泥や不純物の大半はその布によつてろ過されてしまうのである。最終確認としてセシエはその水を自分の味覚でチェックし、ようやくガイゼルにその水を飲ませた。

「まるで体に染み入るようだ」

水を飲み終えたガイゼルは、弱々しいかすれ声でそう感想を述べた。彼の熱はさつきよりも上がっていた。

夜が更けると、月が天上に昇ったおかげで多少はものが見えるようになった。微細な明るさでも、全く無いよりはマシだった。

暗い中でガイゼルの応急手当を行なうのは困難を極めた。だが、彼女は丁寧に一つ一つの傷を、布でろ過した水を用いて洗い流し、炎症を抑制する薬草が主成分の軟膏をすり込んで包帯を巻いた。

応急手当を終えたらもう少し森の奥まで移動しておくのが理想だったが、ガイゼルが予想以上にぐったりとしていたので、これ以上彼に無理をさせたくはなかった。セシエはそのまま小川のせせらぎのそばで夜を明かすことにした。

そうと決まると、今度は食事だった。彼女は干し肉を水に浸して柔らかくしておいたものを引き上げて、少量ずつ噛み千切って咀嚼し、ガイゼル国王に口移しで与えた。

本来なら火でも起こして暖かいスープでも用意したいところだったが、敵から身を潜めている現在の状況では、火を起こすことは厳禁だった。

「……迷惑をかけたな」

食事が終わったあと、ガイゼルが木の幹に腰掛けたまま口を開いた。彼の声は弱々しかったが、さつきよりは声に落ち着きがあった。

「滅相もございません。私は国王陛下下の『陰の影』ですから」

作業に没頭していたためか、セシエには時間の感覚が無くなっていた。木の葉の合間から見える空が仄かに白み始めている様子から判断すれば、もう日の出が近いのだろう。

とはいっても、まだお互いの顔を青白い光でうつすらと確認できる程度の光量である。

「虫が気になるかもしれませんが、少しお休みになられたほうが良いと思います」

そう呼びかけるセシエの手を、ガイゼルがそつと掴んだ。

「……すつかり立派になったな、セシエ」

そう呼びかけられて、彼女はどきりとした。彼が『陰の影』となった彼女を『セシエ』と名指して呼んだのは、先刻の戦いが最初だった。それよりもさかのぼるとなると、二十年前ということになる。また名前前で呼ばれたことにセシエは驚き、思わず手を引つ込めてしまいそうだった。

「覚えているか？　初めて会ったあの日のセシエは、両手で軽々と持ち上げられるほど小さかったのだぞ」

彼女はすぐに返す言葉を思いつかなかった。二十年ぶりに執務室で出会ったガイゼル・アルデイエルドは、彼女の期待を裏切つてとても事務的にしか接してくれなかったのである。彼女は、ガイゼルがもう二十年前の出合いをすつかり忘れてしまったのだと思いつ込んでいた。執務室での初めての会見以来、セシエは『陰の影』という立場に徹しようと心に決めていた。『陰の影』はただ影であればいいと割り切つたからこそ、国王とも無理なく接することができた。セシエは国王直属の『陰の影』として生き、そして死ねれば本望だと考えるようになっていた。

だが、彼が今発した言葉は、間違いなく二十年前のあの日のことを覚えている口ぶりだった。割り切つていたはずのセシエの心には様々な情念が渦巻き、目頭が熱くなるのを彼女は感じていた。

「……忘れるはずありません」

セシエには、か細い声でそれを口にするのがやつとだった。

「隣に来てくれないか、セシエ」

ガイゼルがそう言つたので、セシエは素直にその指示に従つた。彼と同様に木の幹に背を預けると、お互いの肩と肩とが触れ合った。

しばらくのあいだ沈黙があった。

「お前に話しておかなければならないことがある。落ち着いて聞いてくれ」

ガイゼルは穏やかな口調で言つた。次に口にしようと考えている内容に抵抗があるのか、彼はしばらく黙っていた。そして、ついに決心して口を開いた。

「お前と出会つたあの日、余はお前の住む村を焼き払い、無差別に村人の虐殺を行なつたのだ」

セシエにとって、彼のその言葉はあまりにも衝撃的だった。自宅の食料庫に閉じ込められていたところを彼に救出された印象が強かつたから、まさか村をあんな状態にしたのがガイゼル・アルデイエルドその人だとは夢にも思えなかつた。彼女には、彼の言葉はすぐに受け入れられるものではなかつた。

「そ、そんなはずありません！　あの村はレグドル教国の攻撃を受けて——」

セシエは森に潜んでいることも忘れて、思わず大きな声をあげてしまった。

だが、彼は冷静に首を振つた。

「いいや、本当のことだ。余はあの村がレグドル教国を支援しているという情報を手に入れ、戦闘部隊を投入して徹底的に叩いたのだ。余はレグドル教国がリルニア内部で根付くことを恐れていたから、文字通り徹底的に叩いた。……実際、あの村の間はお前一人を除いては皆殺しだった」

セシエは信じられないという顔で首をぶるぶると振った。

「ウンです。ではなぜそのときに私も殺してしまわなかったのです！」

「お前は幼かった。まだ十分に言葉を話せないくらいだったから、レグドル教の悪影響をまだ受けていないと思ったのだよ。それに、運も良かった。村はすべて焼き払い、炎を逃れて飛び出してきた人間は皆、我々に斬り殺された。だがお前は、どういうわけか焼け落ちた家の地下食糧貯蔵庫の中にいた。家の床が濡れた絨毯で覆われていなければ、お前も煙に巻かれて助からなかったことだろう」

セシエにとつては昔の記憶だったが、ガイゼルに言われて彼女もあの時の状況を少しずつ思い出していた。

「あれは父がやったんです。私は、父が自分を置いてけぼりにしたものとばかり思っていました」父にあまり良い感情を抱いていなかったセシエだけに、心境は複雑だった。「そうですか、父は炎から私を守るために……」

本当はガイゼルの恨んで然るべきなのだろうかと、彼女は思った。しかし不思議なこと、なぜかそういった感情は芽生えなかった。

「……サイノスか、あれはなかなか頭のいい男だった」

「陛下は私の父をご存知なのですか？」セシエは身を乗り出して尋ねる。

国王はコクリと頷いた。

「ああ、知っているとも。サイノスはその村に行くまでは余が統治していたヨレンディンというところで小姓をしていた。下級貴族の三男坊だから将来は望むべくもなかったが、兄弟の中では最も知恵があり、融通の利く若者だった」

セシエは「おや？」と思った。その疑問を素直にガイゼルにぶつけた。

「でも、なぜその人が私の父だと思うのです？」

ガイゼルは沈黙し、言葉を選んで慎重に話を続けた。

「サイノスはある日、何を思ったのかオルソン隊長の娘を連れて駆け落ちしたのだよ。もちろん行き先は誰にも告げなかった」

オルソン隊長といえは二十年前のあの日、ガイゼルとともに行動していた人物である。

先日ミリエル王女と一緒にいるときにセシエは彼とも再会を果たしていたが、二人が言葉を交わすことはなかった。

「だが一年ほどしたある日、オルソンの娘からオルソン宛に一通だけ便りが届いたのだ。その手紙には『元気でやっています。サイノスとのあいだに子が生まれ、セシエと名付けました』とだけ書かれていたそうだ。やはり、所在を教えるような文面はなかったらしい。

余はオルソンとは若い頃から友としての付き合いがあるから、彼自身が余にそのことを打ち明けてくれた。彼は自分の娘と孫娘に、人目でいいから会いたいと嘆いておった。男手一つで育てあげた一人娘だから、その想いはひとしおだったのかもしれない」

ガイゼルはオルソンの嘆きを我が事のように感じていたようだった。

「……しかし、セシエという名前は決して珍しいものではありません」

セシエはその言葉を口にしたことを後悔した。月明かりに照らされた悲しげなガイゼルの顔がセシエのほうに向けられた。彼が何の根拠も無くサイノスを父親だと言うわけが無いのはわかっていたはずなのに、セシエはあえて尋ねてしまったのである。彼の答えを聞かずとも、セシエには彼の次の言葉がわかった。

「焼け落ちたあの村で、瀕死の者たちにトドメを刺して回っていたとき、私とオルソンはサイノスの死体を見つけてしまったのだよ」

言葉で実際に聞くと、その衝撃は一層大きなものとなった。セシエは慌てて耳を塞いだ。手遅れだった。二十年間ほとんど思い出せなかった父の記憶が、堰を切ったように次から次へと甦ってきた。セシエは心が身に添わない様子で、ただ呆然としていた。

ガイゼルは黙ってセシエを抱き寄せ、両手で彼女をやさしく包み込んだ。セシエ自身も逆らわずに彼に体を預けた。

しばらくじっとそうしたままでいたが、セシエにはもう一つ尋ねなければならないことがあった。

彼女は勇気を振り絞って次の質問を口にした。

「……母は？」

ガイゼルはごつごつとした手でセシエの肩をしつかりと引き寄せた。セシエは生唾を飲み下して、覚悟を決めた。母がどんな最期を遂げていても、今の自分ならその事実を冷静に受け止められるとセシエは思った。

「我が部隊はお前を救い出したあともあの村で懸命に搜索したが、黒こげで顔の判別がままならない死体が多く、結局はお前の母親の遺体を特定することができなかったのだよ」その言葉を聞いて、それも仕方ないとセシエは思う。

「——だが、この話には続きがあるのだ」ガイゼルは言った。

「えッ？」セシエは顔をあげ、彼の顔を見上げる。

「数灯時前、余は図らずも彼女との再会を果たしてしまったのだ。……お前の母の名は、ディボレイアという」

その言葉を聞いた瞬間、セシエは全身の毛が逆立つ感覚を覚えた。体が硬直して、何の反応もできなかった。

彼が戦場でデボラと遭遇して取り乱した理由が、ようやくセシエにも理解できた瞬間だった。

ガイゼルはセシエを力強く抱きしめた。

「で、でも、そんな——」

彼女が動揺しながらも何か言葉を口にしようとしたその時、ガイゼルはセシエを押し倒した。突然のことで、彼女には何がどうなったのか全く理解できなかった。

ガイゼルの呻き声が聞こえたところで、セシエはようやく我に返った。

彼女はガイゼルを押し退けて衣服の隠しから両手で掴めるだけの手投げナイフを取り出すと、少し離れた茂みに向かってすべてのナイフを同時に投げつけた。闇の中で男の悲鳴があがった。

すぐさま別の場所からもう一人の敵が武器を手に襲い掛かってきたが、彼女は強引な技でその武器を奪い取ると、その武器で男を八つ裂きにしてしまった。

敵の気配は、川のせせらぎの音にかき消されてしまったのである。セシエはガイゼルの体調を気遣うあまり、初歩的なミスを犯してしまったのだ。

「ガイゼル様！」追跡者を撃退したあと、セシエは国王のもとに駆け寄った。そして彼の体を抱き起こした。

「……今のは堪えたな」ガイゼルは深刻な表情のセシエに対し、微笑みを浮かべて見せた。

彼のわき腹には、石弓の太矢が深々と突き刺さっていた。

「ははは、そう悲しそうな顔をするな。余も戦場は長い。言いたいことはわかっておる。この矢は余の内臓を刺し貫いているのだろう？ 無理に矢を引き抜けば余は大量失血で死ぬことになるし、このままにしておいてもやがてじわじわと血が臓器を満たして余は苦しんで死ぬことになるのだ」

傷の状態は、彼の言葉通りのものであった。

「申し訳ありません——」セシエはどうすることもできずにただ、彼の体を抱きしめていくしかなかった。

「自分を責めることはない。この傷があろうが無かろうが、結果は何もかわらんよ。老体でありながら、先の交戦で無数の怪我を負ってしまったのだから……」

二人の顔を朝日が照らした。

「……セシエは温かいな」二十年ぶりの抱擁だった。彼はセシエに抱かれたまま、穏やかな口調で話しはじめた。「お前を『陰の影』の養成施設に入れたのは、お前に生きていくのに最低限必要な知識や技術を身に付けさせるためだった。お前が適当な年齢まで成長すれば、余はお前を『陰の影』としての才覚が不十分という理由で施設から追い出し、お前の能力に見合った職を与えるつもりでいた。

しかしお前は、あまりにも『陰の影』として優秀すぎたのだ。優秀な人材を不適格者として施設から放り出しては、さすがに施設の担当官も黙ってはいない。だからお前は他のライバルを差し置いて、こうして余の『陰の影』となってしまうのだ。

……正直、初めての謁見の場で成長したお前の姿を目にしたときは心が痛んだ。お前の親を殺した人間を、お前は希望に満ちたまなざしで見つめていたのだからな」

セシエは彼を抱きしめたまま、静かに口を開いた。

「……あなたに家族が殺されたと知った今でも、私は不思議と恨みを感じておりません。

私にとつて、ガイゼル様は生活のすべてなのです。養成施設での辛く過酷な生活も、ガイゼル様のもとの『陰の影』として働きたいという強い思いがあったからこそ耐え抜くことができました」セシエはガイゼルのわき腹を染めてゆく血を見つめていた。「……あなたはいない世界には、私の居場所なんてありません」

ガイゼルはセシエの肩を掴んで体を離すと、彼女の瞳の奥を覗き込む。彼女の言った言葉の意味を、ガイゼルは彼女の表情から読み取ろうとした。彼女はただ、微笑みを湛えてコクリと頷くことでそれに答えた。それを見て、ガイゼルは深く頷いた。

「そうだな、『陰の影』。お前はガイゼルという男に対し従順で、ガイゼルという男のために、もう十分に生きたと思う」ガイゼルが言った。

「……お供いたします」

セシエがそう答えると、ガイゼルはやさしい微笑みを浮かべた。

「国王直属の『陰の影』が黄泉路のお供をしてくれると余も心強い」そう言って、ガイゼルはやさしくセシエの首筋に手を回すと、彼女の首から下がった国王直属の『陰の影』のメダルを引きちぎった。

セシエは彼の行動が理解できず、身を起こして彼を見つめた。

「何をなさるのです？ それは私の国王直属の『陰の影』の証……」

ガイゼルは矢の痛み顔に顔をしかめながらも、精一杯の微笑みを浮かべた。

「余を地獄までエスコートするのは、この『陰の影』のメダルだけで十分だ。セシエ、国王直属の『陰の影』としてのお前の人生は、ここで余の人生とともに幕を引いて、これからは『陰の影』としてではなく、ただ『セシエ』として自分自身のために生きるのだ」

セシエはガイゼルをただ呆然と見つめた。彼の言葉が信じられなかった。

「なぜです？ 父と死に別れ、生きていた母は敵だった。この上ガイゼル様にまで見放されたら、私、私……」

彼女は一人ぼっちになる悲しみで打ちひしがれてしまいそうだった。

「私はお前を見放したりはしないさ。いつでもお前を見守っている。それにお前には祖父のオルソンだっている。無口で頑固者だが、あいつはあいつなりにお前のことを心配しているのだ。あいつを悲しませるような真似をすることは断じて許さんぞ」少しきつめの口調でそう言うと、ガイゼルは二十年前のセシエに見せたようなやさしい顔に戻った。

「生きていれば、良かったと思える日は必ず来る。余もやり残したことが何も無いとは言えないが、自分の人生には満足している。お前にもそんな人生を歩んでほしい」

死を目前にして、自分を懸命に励まそうとするガイゼルの姿をセシエは直視できなかつた。

「でもリルニア王国は……リルニア王国はどうなるのです」

「……レグドル教国は、余がいなくなればリルニア王国は統制を失うと考えているようだが、そう簡単にもいかんだろうさ。オキレフ、グレアム、ミリエルはああ見えてもなかなか利口な子たちだからな」

土気色になった顔で、ガイゼルはそれでも笑顔を崩さなかった。

セシエは演習場でのミリエル王女との会話を思い返し、ガイゼルの言葉があながち虚勢では無いように思えた。あの日のミリエル王女の目には、力強い光が宿っていた。

セシエが直接会話したことの無いオキレフ王子とグレアム王子についても、確かにガイゼルが信頼するだけの要素はあった。オキレフ王子には自らの判断で傭兵部隊を編成して戦力を捻出するだけの行動力があるし、グレアム王子には国の内政充実に欠かせない真面目さと厳格さがある。

彼ら三人の力が合わされば、確かにレグドル教国の脅威にも敢然と立ち向かえるような気がした。

「セシエ——」

ガイゼルはセシエの手を握りしめた。

「——そろそろ余を楽にしてくれないか？ 矢の痛みでもがきながら死ぬぐらいなら、我が子同然の、お前の手にかかって死にたい」

セシエは大きく見開いた瞳で、ガイゼルの瞳を見つめた。彼は本気だった。

「……セシエ、お前とは、もっと違った形で巡り会いたかったよ」

*

*

*

朝もやの中、オルソンは慎重に森の中に中隊を展開させた。彼が直接こうして戦闘部隊の指揮に当たるのは二十年ぶりのことだった。村での虐殺の一件以来、彼は大規模な軍事作戦には関わっていなかった。

今回のこの行軍に志願したのは、孫娘が命をかけて戦場を駆け回っているときに、安全な街で安穩とした日々を送っている自分が許せなかったからである。自分が祖父であると名乗り出る資格など無いのはわかっていたが、ただ彼女だけに辛い戦いを押し付けて自分だけが逃げていっているわけにはいかなかった。

「こっちにはいませんぜ！」一人の傭兵が叫んだ。

オキレフ王子の本隊は、すでにイセール川周辺に布陣している敵部隊を急襲している頃合いだった。傭兵たちというのは日ごろ、村などの小口の依頼で大抵の時間をダオルグなどの怪物退治に費やしているから、今回の敵は傭兵ばかりの混成部隊にはうってつけの攻撃対象だろう。

オキレフは敗残兵の話から、第一師団と第二師団が辿った運命のほぼ全容をすでに理解していた。彼は全戦力を注ぎ込んでヴェルゲンを討伐する気だった。夜を徹して山道を急いでいた彼らは、追跡部隊と思われる騎馬兵の団を捕縛した。彼らに口を割らせ、国王が戦場から逃げ延びているという話も聞きだしていた。

オルソンは森に残って国王を捜索することを志願した。オキレフは彼に中隊を預け、自分はヴェルゲンとデボラを討ち取るためにイセール川へと向かったのだった。

「オルソン隊長、女です！ 女がいます！」傭兵が興奮気味に叫んだ。傭兵の足元にはヴェルゲンの追跡部隊員らしき身なりの男がナイフを全身に刺されて死んでいたが、今はその男のことよりも生きた女のほうに皆の注意が注がれていた。

オルソンは木々のあいだから見える一人の女を、目を凝らして見つめた。
セシエだった。

草むらを掻き分け、オルソンはその女のところへと向かった。彼女は森の真ん中で、ただじっと直立していた。その脇には小川が流れ、彼女の足元にはうずくまる影が二つ。

一つは刃物で切り裂かれ、人の原型を留めていなかった。そして、もう一つは――。

――リルニア王国の国王、ガイゼル・アルディエルドだった。

「隊長！」

傭兵たちが女に向かって思い思いの武器を構えていたが、オルソンはそれを手で制した。

「大丈夫だ。この女は敵ではない」

オルソンは急いで二人のもとに駆け寄ると、国王の容態を確かめようとした。だが、彼にはすでに脈が無かった。

「何ということッ！」

彼の体温から察するに、死んでからまだそう時間は経っていない様子だった。

包帯だらけのガイゼルの首もとに、ふとオルソンは独特の圧迫跡を見つけたのだった。

『陰の影』は親指一本で頸動脈を圧迫し、一瞬で相手を気絶させる技術を身に付けている。気絶したあともそのまま頸動脈を圧迫し続けられ、相手はそのまま死に至る。ガイゼル国王の首に、そのときに残る特有の圧迫跡が刻まれているのをオルソンは見逃さなかったのである。

『陰の影』、貴様！」オルソンは立ち上がった。

ガイゼル国王は、『陰の影』のメダルを握りしめて果てていた。全身ひどい傷なのに、表情はまるで眠っているかのようだった。

「お察しのとおりです。私が国王陛下を殺しました」

彼女は極めて冷静な口調で言った。

オルソンは立ち上がった女の肩を力強く揺さぶったが、泥と血で汚れた彼女の顔には表情らしき表情は無かった。

「なぜそのような真似をッ！」

オルソンに物凄い形相で掴みかかられても、彼女はいつさい表情を変えなかった。彼女は平然としていた。

「わき腹に受けた矢が致命的でした。国王陛下は私の介錯を希望されたのです」

確かに国王がわき腹に受けている傷は、最高の環境で最高の治療を尽くしたとしても、延命処置がやつともかもしれない酷い状態だった。彼女の言葉は疑いようがなかった。

「そんな！」オルソンはがっくりと膝をついた。彼は悔しさでいっぱいだった。彼はまじまじと安らかな顔で眠るガイゼルを見つめた。

「ガイゼル様！ あなたも、あなたの父上も本当に人がお悪い。友人である私を残して先立たれてしまうのですからな！」ガイゼルは震える声で言った。

「……苦しまず、安らかに逝かれました」

そう口にした女を、膝をついたままの姿勢でオルソンはゆっくりと見上げる。

女の目は冷たい色をしていた。彼女は国王のほうを見ようとすらせず、ただ平然と直立していた。国王の死に際して、まるで何も感じていないような無機質な印象だった。

『陰の影』はみんなそうだ。どんなことがあってもまるで動じず、皆一様に人形のようなのである。

オルソンは、いくら自分と血の繋がりがあろうと、こんな冷血な女とは上手く付き合っていないのだらうと感じはじめた。彼はいたたまれない気持ちで女の顔から目を背け、そのまま無意識に視線を落とした。

——そこで彼はハツとなった。

自然体で直立しているように見えるセシエだったが、彼女の拳は鬱血して真っ白になっってしまうほど、硬く力強く握りしめられていた。

彼女の拳は小刻みに震えていた。その真っ白な拳だけが、彼女の想いの深さを物語っていた。